

靈界物語 第五六卷 眞善美愛 未の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五六卷』愛善世界社

2006(平成18)年08月05日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第三章

仇花あだばな

〔一四三三〕

第四章

盜歌とうか

〔一四三四〕

第五章

鷹魅ようみ

〔一四三五〕

第二篇

宿縁妄執しゆくえんまうしふ

第六章

高壓かうあつ

〔一四三六〕

第七章

高鳴たかなり

〔一四三七〕

第八章

愛米あいまい

〔一四三八〕

第九章

我執がしふ

〔一四三九〕

第三篇

月照荒野げつせうくわうや

第一〇章

十字じふじ

〔一四四〇〕

第一一章	惚泥 <small>でれどろ</small>	〔一四四一〕
第一二章	照門 <small>てるもん</small> 嵐 <small>おろし</small>	〔一四四二〕
第一三章	不動 <small>ふどう</small> 瀧 <small>たき</small>	〔一四四三〕
第一四章	方岩 <small>はこいは</small>	〔一四四四〕

第四篇
三五開道あななひかいだう

第一五章	猫背 <small>ねこぜ</small>	〔一四四五〕
第一六章	不臣 <small>ふしん</small>	〔一四四六〕
第一七章	強請 <small>がうせい</small>	〔一四四七〕
第一八章	寛恕 <small>くわんじょ</small>	〔一四四八〕
第一九章	癡漢 <small>ちかん</small>	〔一四四九〕
第二〇章	犬噓 <small>けんきよ</small>	〔一四五〇〕

〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕

序文 じよぶん

瑞月王仁が横臥したまま、この物語を神示に従ひ口述せるを見て、大本人の中に色々の批評を下して居る方々があります。役員も信者も又長屋の主人までも、口を揃へて……神様とも在らうものが、謹嚴なるべき靈界の有様を発表するに際し行儀の悪い寝そべつてどうして眞實の事が傳へられるものか。斯の如き手續に由つて成りし著書は一讀すべき價値の無いものだ……と謂つて一口に毀つて居る人もあります。勿論神様としては口述者の肉體を行儀よく端坐させておいて御傳へ遊ばされ度きは最も在りませう。然し乍ら瑞月は一昨年以來非常に健康を害し、日夜病氣に苦み悩み到底一時間と坐つて居ることの出来ない状態でありました。この肉體の健康に復するを待つて居やうものなれば何時になるか判らない。夫れでは數多の信者や世界の人人々に對して神様の御仁慈の御思召を宣傳する事は出来ませぬ。思想の惡潮流は天下に氾濫し殆ど泥海と化せむとするこの際一日も猶豫する譯には行かない。仁慈深き大神は世界萬民を救ひ至治太平の神代を一日

も早く築き上げ、萬有一切を天國の樂園に遊ばしめ、地獄の慘状より救はむとの御考へより、止むを得ずして、變則的方法を一時お採りになつたのであります。神の仁慈は到底人間の計り知るべき限りではない。中には……瑞月は神に仕ふる身なれば二六時中極めて壯健にして病氣などに犯さるべき道理が無い、それに日夜病氣に苦しんで居るのは何か御神慮に叶はない事が有るのに違ひない。そんな神慮に叶はない人の口から喋つた寢言を聞いて何にするか……と言つて居る人もチヨコチヨコあるやうに聞いて居りますが、王仁は二六時中澤山の信者の病氣平癒を各地に於て祈る聲が耳に聞え來ると共に、その苦痛の幾分かを助けて居るのだから、大本信者に病人の絶滅せない限りは、瑞月王仁の肉體は斷じて健康體に復する事はありませぬ。瑞月王仁が病氣病魔と戦いながら、孜子として神業の一端に奉仕するその苦衷を察せない人々は右様の批難や攻撃をさるるのは寧ろ當然でありませう。昨年未信者併も基督教信者の某氏が瑞月に向つて……靈界物語を寝ながら口述するのは不都合ではないか……と詰問された事がありました。瑞月はその時左記のやうな事を答へて置きました。

…現代の立派な人間様は何れも大道を直立して歩行活動して居ながら、蟹のやうに神意に反せる横道ばかりを行つて居るぢやありませんか。社會の潮流は滔々として横流して居る、河の水も潮水も皆横に流れて居る。夫れ故、俗界の人々に交つて共に活動せむと思へば神意に反したる行動を取らなければならぬ。かう謂へば餘り消極的だと又言はるかは知らぬが、横臥して靜に宇宙の眞理を考へ神意に背かざる誠の解釋をなし、神教宣傳使としての公平なる判断を爲し、社會の活動者を大神の愛護の下に立派に能く立ち働かしめむとする爲である。又横に寝て王仁が働くと言つたのは、眼を塞ぎ眠ると云ふの謎である。體主靈從の現代人の行動は正しき人間としては眞面目に眼を開けて見れば居られない。一切の自我心を捨て安靜安眠の境地に立つて些しも偏せず、宇宙精神の眞髓を探つて之を世人に傳へむ爲に、靈界物語を著はして居るのである。地上を横流する河水は滔々として些しも淹滞せない。併し士農工商に従事する活人は、無論立つて働かねばならないのは當然であることを心得て貰ひたい……

と云つた事がある。要するに之は一種の詭辨でもありませんが、實際のことを言

へば今日こんにちの世態せたいを見て吾々われわれは傍觀ばうくわんする事ことが出来できない。止むやを得えず、病軀びやうくを驅かつて世よの爲道ためみちの爲ために犠牲ぎせい的に立たち働はたらいて居をるのであります。何程なにほど寢物ねものがたり語ごとだと謂いつても其その内容ないようは決けつして眠ねむつては居ゐないことを茲ここに告白こくはくしておきます。惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐ま世せ。

蟹かにが行ゆく横よこさの道みちを歩あゆむより

横よこに立たちつつ道みちを「たて」行ゆく

大正十二年三月十四日

於龍宮館

人生の目的は決して現界の幸福と歡樂を味はふのみでない。凡ての人間は幸福及び歡樂のみに執着して苦惱と災厄を免れむとのみ焦慮し、自愛的方面に熱中して居るやうだ。併し神様が人間を世界に創造し玉ふた使命は、決して人間が現界に於ける生涯の安逸を計らしむるが如き淺薄なものではない、人間は神様の目的經綸をよくよく考察して、何處までも善徳を積み信眞の光を顯はし神の生宮、天地經綸の御使となつて三界の爲に大々的活動せなくては成らないものである。又人間には直接天國より天人の靈子を下して生れしめ玉ふたものもあり、或は他の動物より靈化して生れたものもある。大神は初めて世界に生物を造り玉ふや黴菌に始まり、蘚苔となり、草木となり、進んで動物を造り玉ふた。先づ蟲となり、魚となり、貝となり、鳥となり、獸となり、最後に人間を生み出し玉ひ、神は自ら生物を改良して、動物產生の終りに總ての長所を具備して理想のままに人間を造られたと云つてゐる學者もある。動物發生の前後に關する問題は靈界物語を讀

まれた讀者の判斷に任す事として、凡て人間は大神の無限の力を賦與され智能を授けられて居る以上は、日夜之を研いて啓發し、神の境域に到達し得る資質を具して居るものである。春生じて夏枯るる草も、朝に生れて夕に死する蜉蝣の如き小動物も種子と子孫を遺さないものは一つも無い。動植物は生じては枯れ、枯れては生じ、生れては死し、死しては生る。幾百千萬歳、神は同じ神業を繰返させ玉ふものである。人間の生死問題も宇宙の主宰なる大神の目より御覽になる時は、萬年の昔も萬年の未來も少しも變りは無いのである。彼の草を見るも莖となり、葉となり、花となり實となる。草の本體は果して何れにあるか。昆蟲を見るに幼蟲となり、蝶蛾となり、樹間の卵となる。生の本體は抑何ものぞ。卵は蟲の始めにして又蟲の終りである。初卵と終卵とは同じものか異なれるものか、詮じ詰めれば單に一體の變化に過ぎない。人間も亦是に類する變化は免れ得ない。幼たり老たり死たるも一體の變化のみ。宇宙の萬物は神の生成以來幾萬年間同一體にして幾萬年の未來に至るも變るものでは無い。吾人は神が生成し玉ひし祖先來の肉體にして幾萬年の未來までも之を傳承し得るものである。凡て生物に死の關

門があるのは神様が進化の手段として施し玉ふ所の神の御慈愛である。死無きものは固着して變ることが無い。若し人生に死の關門なき時は人間も無く子孫も無いものとなる。生物は死あるを以て生殖の機能を有するのである。故に死なるものは生物の最も悲哀とする所なれども是また惟神の攝理である。併し人間は他の動物と異なり死後始めて靈界に入り復活して天國の生涯を營むものなれば、人間の現肉體の生命は只その準備に外ならない事を知らねばならぬ。人間社會に於て往古より今日に至るまで靈魂の歸着に就いて迷ふこと久しく、或は天國を説き或は幽冥を説き三界を説く宗教家は今日迄幾萬あつたか知れない。然し未だ一として徹底的に宇宙の真相、人生の本義を説いたものは無い。……彌勒出現成就して始めて始めて苦集滅道を説き三界を照破し道法禮節を開示す……とは先聖既に言ふ所である。人は天地經綸の奉仕者にして所謂天地の花、神の生宮たる以上は單に他の動物の如く卑劣なるものではない。神に代つて天地の爲に活動すべきものである。王仁がこの物語を口述する趣旨も亦人生の本義を世人に覺悟せしめ、三五教の真相を天下に照會し、時代の惡弊を被ひ清め地上に天國を建て、人間の死後は直ち

に天界てんかいに復活ふくくわつし人生じんせいの大本分だいほんぶんを盡つくさしめ、神かみの御目的おんもくてきに叶かなはしめむとするの微意びいに外ほかならないのであります。

附言ふげん

金剛不壞こんがうぶゑの如意寶珠にょいぼつしゆ、大本教おほもとけうの宣傳使せんでんし、湯淺仁齋ゆあさじんさい氏の紹介せうかいによつて、鳥取縣氣とっとりけんけ高郡海徳村かぐんかいとくむら大字徳尾宮東菜種田おほあぎとくをみやひがしなたねだに於て種刈り中鎌おいたねかちうかまに當り拾得しふとくしたる天降石てんかうせきにして明治廿三年四月廿四日森岡直衛めいぢにしふさんねんしぐわつにしじふよつかもりをかなほゑし氏の所有しよいうなりしが、本日ほんじつその息直次郎そくなほじらうし氏より大本おほもとに獻納けんなふされたり。靈界物語れいかいものがたり（靈主體從れいしゆたいじゆう）第一卷だいいつくわんに記載きさいせるシオン山しんざんより出いでたる金剛不壞こんがうぶゑの如意寶珠にょいぼつしゆなる顯國魂けんこくたまは即ち之これである。この寶玉ほうぎよくの履歷書りれきしよあり、今左いまさに轉載てんさいす。

一、鳥取縣氣高郡海徳村大字徳尾、森岡直衛、宮東、菜種田とっとりけんけだかぐんかいとくむらおほあぎとくをもりをかなほゑみやひがしなたねだに於て種刈中鎌おいたねかりちうかまに當り拾得しふとくす。明治廿三年四月二十四日朝めいぢにしふさんねんしぐわつにしじふよつかあさ一、鳥取警察とっとりけいさつに届出とどけだす、警察けいさつより縣廳けんちやうに出だす。其後そのご中學校等ちうがくかうとうにて験ただせ共無名石どもむめいせきに

て歸來せり。

一、此玉拾得前貳拾壹日より貳拾參日迄參日間鶏夜叫せり。家内の者近所の人心配なし判定者に問ふ。判定者の言に依れば善事の知らせなりと云ふ。其翌日この玉を拾得せり。

右は原文の儘也 以上

大正十二年三月七日 舊正月二十一日

於龍宮館

第一篇 自愛之柵

第一章 神慮（一四三一）

現代人はおもえらく

根底の國には最初より

一個の魔王嚴在し

諸多の地獄を統轄し

墮ち來る精靈の罪惡を

支配なすと恐れられ

魔王は嘗て光明の

天人なりしも叛逆の

罪に問はれて衆族と

共に地獄に墮されし

ものとの信仰昔より

深く心に刻まれて

眞相覺れるものも無し

魔王もサタンもルシファーも

約言すれば地獄なり 殊に魔王と稱ふるは

背後に位置せる地獄にて 此處に住めるを兇鬼と云ひ

兇惡最も甚だし 又前面に位せる

地獄をサタンと稱ふなり サタンは魔王に比ぶれば

さまで兇惡ならざれば これをば兇靈と稱ふなり

又ルシファーと云ふ意味は バベルに屬する曲にして

彼等の領土は久方の 天界までも擴がれり

故に一個の魔王ありて 地獄を統治し坐さざるは

地獄天界兩界に 住める精靈に別ち無く

皆これ人の精靈より するものなるや明けし

天地創造の始めより 現代社會に至るまで

幾億萬の人靈が 現實界に在る時に

皇大神の神格に 反抗したる度に比して

各自に一己の惡魔なる 業を積み積み邪鬼となり

地獄ぢごくを造つくり出だせし由よし
悟さとりて常つねに靈れい魂こんを
淨きよめて神かみの坐ます國くにへ
昇のぼり行ゆく可べく努つとむべし
ああ惟かむながらかむながら
御み靈たま幸さちはへ坐ましませよ。

愛あいと善ぜんとの徳とくに充みち
信しんと眞しんとに住すみたまふ

眞まことの神かみは罪ざい惡あくと
虚き偽よぎに充みちたる人ひと々に

仁じん慈じと光さか榮えの御み面おもてを
背そむけて之これを排はい斥せきし

地獄ぢごくに墜つ落らくさせたまひ
邪じゃ惡あくに對たいして怒いかりまし

之これをば罰ばつし害そこなふと
各も宗もの各おし派への教と役り者つぎが

傳つたへ來きたりしものぞかし
この言げん説せつは大おほ神かみの

大おほ御み心こころを誤ご解かいせし
癡ち呆はう學がく者しゃの言こと葉はなり

神かみは如い何かなる罪つみ人んどにも
面おもてを背そむけ排はい斥せきし

怒りて精靈を地獄界へ

決して墮すものならず

その故如何と尋ぬれば

善と愛とは主の神の

珍の身體なればなり

善の自體は害惡を

決して加ふるものならず

愛と仁とは何人も

排斥すべき理由なし

萬一神が罪人に

背き斥け怒りまさば

仁慈と愛に背反し

その本性に戻りまし

神格自體に反く可し

それ故神は何處までも

人の精靈に接しますや

善と仁慈と愛により

臨ませ玉はぬことは無し

五六七の神は人のため

善を思念し克く愛し

仁慈を施し玉ふのみ

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

神かみより人ひとに流ながれ來くる

凡すべてのものは愛あいの善ぜん

信しんと眞しんとの光ひかりのみ

根ね底そこの國くにより來くるものは

惡あく逆ぎやく無ぶ道だうばかりなり

まことの神かみは人間にんげんを

惡あくより離はなれて善ぜん道だうに

立たち歸かへらせむと爲なし玉たまふ

之これに反はんして地獄界ぢごくかいは

人ひとをば惡あくに誘さそはむと

一いつ心しん不ふ亂らんに焦せう慮りよせり

さは去さりながら人間にんげんは

天界てんかい地獄ぢごく兩界りやうかいの

間あひだに介かい在ざいなさざれば

人ひとは何等なんらの想さう念ねんも

意い義ぎも自由じゆうも撰せん擇たくも

あらず身み魂たまも亡ほろぶべし

人ひとに善ぜん惡あく二方面にほうめん

あるは正せい邪じやを平なら衡しする

神かみの賜たまなればなり

神かみ若もし人ひとの精せい靈れいに

面おもてを背そむけたまひなば

惡あく事じを心こころの儘ままになし

人ひとたる所以ゆゑんは滅ほろぶべし

神かみより人ひとに向むかひまし

流ながれ來きたれる光くわう明みやうは

唯ただ々ただ善ぜんの德とくのみぞ

然しかるに惡あしき人間にんげんも

善ぜん無り比やうむひの身み魂たまにも
皆みなその神み徳とくに浴よくすなり

少すこしく相さう違あひの點てんあるは
眞まことの神かみは惡あく人にんに

對たいして惡あくを離はなれしめ
救すくひやらむと爲なしたまひ

善ぜん無り比やうむひの身み魂たまには
益ます々ます圓えん滿まん具ぐ足そくなる

善ぜんをば積つませたまふなり
以い上じやうの如ごとき差さい異いあるは

人にん間げん自じ身しんの心こころより
之これをば敢あへて爲なすものぞ

凡すべての人ひとは天てん界かいや
地ぢ獄ごくの所しょ受じゆの器うつはにて

中ちゆう有う界かいに居をればなり。

世せ界かいの人ひとは天てん界かいの
流ながれを受うけて善ぜんを爲なし

地ぢ獄ごくによりて惡あくを爲なす
故ゆゑに大おほ本もと神しん諭ゆには

凡すべての事じ物ぶつは靈れい界かいの
皆みな精せい靈れいの爲なす業わざと

示しめさせ玉たまふ所以ゆゑんなり
 されども人ひとはその行わざ爲なを
 残のこらず己おのれの身みよりすと
 信しんずる故ゆゑにその爲なせる
 惡あくは皆みなその自じ有ゆうとなし
 心しん中ちゆう深ふかく膠ちやく着やくせり
 それ故ゆゑ人ひとは自じ身しんより
 惡あくと虚き偽よぎとの因たねとなる
 神かみの關くわんする由ゆ來らいなし
 人ひとの身み魂たまに包ほう有ゆうせる
 惡あくと虚き偽よぎとはその人ひとの
 心こころの中なかの地ぢ獄じやくなり
 地ぢ獄じやくと云いふも惡あくと云いふも
 皆みな同どう一いつの事ことぞかし
 人ひとは自みづから包ほう有ゆうせる
 諸しよ惡あくの原げん因いんなる故ゆゑに
 地ぢ獄じやくに墜おちて苦くるしむも
 自みづから赴おもむく次し第だいなり
 決けつして眞まことの大おほ神かみは
 地ぢ獄じやくに墮おとくる苦くるしめて
 處しよ罰ばつし給たまふものならじ
 如いかん何なんとなれば人にん間げんが
 惡あくを欲ほつせず愛あいせずば
 主すの大おほ神かみは地ぢ獄じやくより
 脱だつ離りせしめて天てん界かいへ
 導みちびき玉たまひ人ひとをして
 地ぢ獄じやくに投なげやり給たまふこと
 決けつしてなきを悟さとるべし

ああ惟神々々

御靈幸へましませよ。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館 口述者識)

第二章 戀淵(一四三二)

波斯と印度との國境テルモン山の山續きエルシナ谷の山口に、淋しき竈の煙も絶えて春の永日も、いと暮し難く柱はゆるぎ梁朽ちし破れ家に、火影も消えし秋の夜の長き賤が伏家に花を欺く妙齡の美人、破れし衣に身を纏ひ只一人悲嘆に暮れて居る。嘗て鬼雲彦が假の館を結び、バラモン教を開きたるテルモン山の神館の跡を守る小國別、小國姫の二人があつた。此二人の夫婦にはデビス姫、ケリナ姫と云ふ二人の美しき娘を持つて居た。

ケリナ姫は近所の鎌彦と云ふ若き男と戀に落ち、兩親の目を忍びテルモン山の

館やかたを脱ぬけ出し、エルシナ谷だにの一つ谷ひとだにに破家あばらやを建たて、夫婦ふうふ氣取きとりで暮くらして居ゐたのである。併しかし乍ながら夫をつとは一年いちねん以前いぜんに或ある目的もくてきを抱いだいて、ケリナ姫ひめを此破家このあばらやに残のこし出て行いつたきり何なんの便たよりもなく、後あとに残のこつた姫ひめは途方とほうに暮くれ親おやの里さとに歸かへりもならず、又また外ほかへ行ゆく事ことも出で来きず、木きの根ねを食くらひ、或あるは乏とほしき果物くだもの等を漁あさつて僅わづかに其日そのひを送おくり、夫鎌彦をつとかまひこの消息せうそくを待まちつた。家いへは益々ますます貧まつしくして朋友ほういうちき知己うちきもなく訪おとふものは峰みねの嵐あらしと雨あめの音おとのみであつた。

廣ひろき世界せかいを自みづから狭せばめて山深やまふかく世よに隠かくれ住すむ身みの悲かなしさ、やるせなく、人跡じんせきなれば道みちも狭せまく萱草かやくさに埋うづもれ、夏なつの炎天えんてんも何なんとなく心淋こころさびしく時々ときどき猛獸まうじうの聲こゑ、耳みみを劈つん裂ざき魂たましひを宙ちうに飛とばすこと幾回いくわいなるを知らず。何日いつまで迄た経たつても歸かへり來きたらざる夫をつとの姿すがた、全まく神かみの恵めぐみに見放みはなされ、露つゆの命いのちを野邊のべに曝さらし玉たまひしには非あらざるかと、とつおひつ、思案しあんに暮くれ乍ながら月つきの光ひかりを便たよりに草くさを分わけ、漸やうやうにして谷たにの口くちの人通ひとどほりに出でた。ここには可かなり大おほきな谷川たにがはが流ながれ激流げきりう飛沫ひまつを飛とばして居ゐる。之これをエルシナ川がはと云いふ。ケリナ姫ひめは世よを果敢はかなみて前後あとさきの考かんがへもなく、身みを躍をどらして崖下がいがの水すい中ちう目め蒐がけて飛とび込こんだ。月つきは西にしの峰みねに隠かくれ夜よるの暗やみは益々ますます濃厚のうこうとなつて來きた。此時このとき谷川たにがは

の端に長劍を腰に提げ覆面頭巾の三人の男、ひそびそと何事が囁いてゐる。

甲「おい、兄弟、吾々三人は北の森でゼネラル様から六千兩の金を貰ひ其御教訓によつて一時も早く國許に歸り、親や女房や子供を喜ばさうと思つてゐたが、到頭意の如くならず、スツカリと恵みの金は取られて了ひ、如何しても此儘で國へ歸る事は出来ぬぢやないか。何とかしてもう一働きやつて、それを機に泥棒をスツカリ思ひきり、國許に歸つて正業に就き度いものだな」

乙「おい、ベル、貴様も俺等も皆二千兩づつ分配したのだが今は最早無一物、取つたものを取られると云ふのは天地自然の道理だから、悪銭身につかず、もうスツカリ思ひきつたら如何ぢや。俺やもう此商賣が初めから好かんのだが、益々嫌になつて來たよ。折角盗つた金を又取られてしまへば何にもならぬぢやないか。

只残るのは罪惡ばかりだからな」

丙「おい、ベル、ヘルの兩人、取られたとはそりや何だ。吾々は皆娼婦に惚け、酒に溺れて使つてしまつたぢやないか。それ丈け愉快な事をしたのだから決して盗られたのぢやないよ。それよりも之から十里ばかり行くとテルモン山の神館が

ある。そこへお詣りしてスツカリ心を改めてゼネラル様の様に山伏となり法螺貝でも吹いて廻らうぢやないか。さうすれば今迄の罪が滅びて極樂参りが出来るかも知れないよ」

ベル「エー、しようもない、そんな弱音を吹きやがる奴は此谷川へでも身を投げて斃つたが宜からう。俺は益々これから泥坊學の研究をして天下の財寶を自由自在に致す積りだ」

丙「然し、何だか妙な音がしたぢやないか。まさか投身ではあるまいな」

ベル「うん、どうやら投身らしい。然し乍ら死にたい奴は勝手に死んだら宜いだ。俺等はどこ迄も生の執着が強いのだから千年も万年も生通すつもりだよ」

丙「投身と聞けば、こりや斯うしては居られぬ。何とかして助けねばなるまいぞ。なあへル」

ヘル「うん、さうだ。シャルの云ふ通り之から眞裸になり谷川へ飛び込んで救うてやらうかい。愚圖々々してゐると何程流れの遅い淵でも死骸がなくなるかも知れないよ」

シャルは「おう、さうだ」と云ひ乍ら衣類を脱ぎ棄てザンプとばかり暗の淵目
蒐けて跳び込んだ。飛び込んだ途端に自分の足に力限りに喰ひついたものがある。
シャルは驚いて聲を限りに「助けて呉れえ助けて呉れえ」と叫ぶ。ヘルは又もや
ザンプと跳び込んだ。見れば二人の男女が淵に浮きつ沈みつ掴み合つてゐる。ヘ
ルは暗がりに髪の毛を掴んで淺瀬に引張り上げた。二人とも多量に水を呑んで殆
ど息が絶へてゐた。ヘルは聲を限りに、

ヘル「おい、ベル、大變だ。シャル迄が死によつた様だ。早く來て手傳つて水を
吐かして呉れ」

ベルは泰然として上の方から、

ベル「おい、ヘルの奴、シャルはもう死んだか。死ぬ事の好きな奴は放つといた
ら宜いぢやないか。そして、も一人の奴は男か女か、どちらか。女なら助けても
宜いかな」

ヘルは、

ヘル「エー、薄情な奴め」

と云ひ乍ら舞ひ細砂の上に二人を引張り上げ色々と介抱をして水を吐かせた。二人は漸くにして息吹き返した。

ヘル「おい、シャル、危ない事だつたのう。まア氣がついて何よりだ。然し何處のお女中か知らぬが、ようまア甦生つて下さつた。これで吾々の懸命の働きも無駄にはならない。ああ嬉しや、大自在天様」

と合掌する。ベルは上の方からスパスパと煙草を吸ひ乍ら、ベル「おい、三人の娑婆亡者、死損ひ奴、何をグズグズしてゐるのだ。いい加減に上つて來ぬかい」

ヘル「おい、ベルの奴、斯う暗くては仕方がない。貴様、そこらで一つ火を焚いて燈明をつけて呉れないか。上り道が分らぬからのう」

ベル「八釜しう云ふない。泥坊に火は禁物だ。幸ひ夏の事でもあり寒くもあるまいから、夜が明ける迄、そこへ伏艇してゐるがよからう。水雷艇も一隻あるさうだし、都合が好いわ。深く陥つた戀の淵、何でも馬鹿な女が居つて腐れ男に心中立をして死んだのだらう。そんな奴を助けに行く奴が何處にあるかい。餘程お目

出度い奴だな。アハハハハハ

ヘル、シャルの二人はベルの友情を知らぬ冷酷な態度に憤慨し乍ら、漸くケリナ姫を助けて、壁立つ様な岩を傳ふて上つて来た。ベルは女と聞くよりその美醜を試さむと枯芝を集めてパツと火を焚いた。よくよく見れば女は色飽く迄白く、氣品高き妙齡の美人であるにも拘らず、その着衣は實に見窄らしき弊衣であつた。ベル「やア、これはこれは何處のお女中か知りませぬが、随分綺麗なお方、襪襪に黄金の玉を包んだ様な貴女の様子、さぞ斯様な處へ投身をなさるに就いては何か深い理由があるでせう。何は免もあれ、お助け申さねばなるまいと存じ、家來のヘル、シャルをして助けにやりました。さア逐一事情をお話なさいませ」

シャル「ヘン、うまい事仰有るわい。俺等が助けてやらうかと云つた時、死に度い奴は勝手に死なしたら宜いと吐したでないか。のうヘル、此ナイスの顔を見て、直ぐアンナ事吐すのだから呆れてものが云へぬぢやないか」

ヘル「うん、さうだ。仕方のない奴だ。もしもしお女中さま、お前を助け様と發企したのは此ヘルでムります。それで私の家來のシャルが第一着に跳び込み、お

前に水中に取つ捉まつて苦しんでる處を私が跳び込みお二人とも命を助けたのですよ。此ヘルが居らなかつたならば、お前もシャルも既に冥途の旅立をして居つたのですからな」

ケリナ「はい、有難うムいます。ツヒ女の小さい心からヒステリックを起し、一層斯んな憂世に居るよりも極樂参りをしたのが得だと、無分別を出して跳び込んで見ましたものの餘り苦しいのと、俄に娑婆が戀しくなつたので如何しようかと藻掻いて居ます矢先、貴方等が現はれてお助け下さいましたのは本當に神様のやうに存じます。ようまあお助け下さいました」

ヘル「エへへへおい、ベル、どうだ。もう貴様の野心は駄目だぞ。二人も證據人が居るのだからな。もしもお女中さま、此奴ア大悪人の大泥棒ですよ。バラモン教の鬼春別將軍様でさへも脅かして懐のお金を奪ひとると云ふ悪人ですからな」

ベル「アハハハ俺が泥棒なら貴様もヤツパリ泥棒ぢやないか。これこれお女中、實の所は吾々三人は皆バラモン教の軍人であつたが、鬼春別將軍様が猪倉山の山

寨さいで三五教あななひけうの宣傳使せんでんしに言向ことむけ和やはされ修驗者しうげんじやになり軍隊ぐんたいを解散かいさんしたものであるから、俺等おれたちも止やむを得えず泥棒どろぼうと商賣替しやうばいへをしたのだ。併しかし乍ながらお前まへは心配しんぱいしなされるな。泥棒どろぼうは決けつして人ひとの生命いのちをとるのが目的もくてきぢやない、寶たからを横奪わうだつするのが目的もくてきだ。お前まへから寶たからを盗とらうと云いつた所ところで何なに一つありやせない。それだから何も請求せいきうしないわ。然しかし乍ながら只ただ一つここに請求せいきうがある。それは外ほかでもない。お前まへが今いま此處ここで死しんだと思おもへば如何どんな諦めあきらもつく筈はずだ。どうだ私の妻つまに……假令たとへ三日みつかでもなつて呉くれる氣きはないか□

ケリナ「ホホホホ好すかぬたらしい、モ一いよう言いわむワ。何程命なにほどいのちが惜をしうないと云いつてもお前まへのやうな鬼面おにづらの泥棒どろぼうに身みを任まかす位くらゐなら潔いさぎよく淵ふちへ身みを投なげて死しにますわいな。妾わたしの身みを任まかす男をとこは世界せかいに只ただ一人ひとりよりありませぬわ。お生憎あいにくさま様□

ベル「こりや女をんな、命いのちを助たすけて貰もらひ乍ながら何なんと云いふ愛想あいそづかしを申まをすのか。不都合ふつがふせんば千萬まんな、此儘このままには差許さしゆるさぬぞ□

ケリナ「あのまア得手勝手えてかつてな事ことを仰有おつしやりますわいのう。妾わたしはお前まへに助たすけて貰もらつたのぢやない。此このお二人ふたりの方に救すくつて貰もらつたのだから大きおほきに憚はばかりさま。ねえお二人ふたり

さま、さうでせう。生命を的に助けて下さつたのだから、これには何かの深い因縁がなくては叶ひませぬわ」

ヘル「エへへへおい、ベルの大將、如何だい。世界に一人より身を任すものはないと此ナイスが云つて居たのを聞いているかい。貴様を除けばシャルと俺と二人だ。併し乍ら二人乍ら生命を助けたのは此ヘルだ。もうシャル、よもや俺の御恩は忘れはしよまいな」

シャル「うん、そりや忘れぬ。然し乍ら此ナイスを助けようと思ふ心は俺もお前も同様だ。さうだからお前と俺と二人の中から此ナイスに選ましたら宜いのだ。

それが順當だと思ふよ。もし、ケリナさまとやら、貴女のお考へは如何ですかな」
ケリナ「ホホホホ」

ベル「エー、如何しても俺に靡かぬと吐しや靡かいても宜い。ま一度放り込んでやるからさう思へ」

ケリナ「あのまあベルさまとやらの空威張りの可笑しさ。そんな事で今日の女は脅喝され、男に盲従するやうな馬鹿はありませぬぞや。貴方が放り込んでやると

仰有るなら美事、放り込んで見なさい

ベル「よし、御注文とあれば、何奴も此奴も皆放り込んでやらう。さてもさても憐らしいものだな。ここに三人の土左はんが出来るかと思へば聊か同情の涙に暮れぬ事もないわい、イツヒヒヒヒヒ」

ヘル「さアさアケリナさま、こんな奴を相手にせず何處かへ参りませう。そして互に身の打明け話をしようぢやありませんか。おいシャル、貴様はベル大將のお伴を忠實にやつたら宜からうぞ」

シャル「俺だつて何時迄も泥坊の乾兒は御免蒙りたい。ゼネラルさまの訓戒を思ひ出せば到底泥坊なんて、恐ろしくて出来るものぢやないからな」

ヘル「そんなら、シャル、若夫婦のお伴に使つてやるから跟いて來たら宜からう。その代り、ベルと絶縁をするのだぞ」

ベルは矢庭に長劍を引抜いてケリナ姫に斬りつけた。ヘル、シャルの兩人は鞘の儘ベルの刀を受け止め、ケリナ姫を身を以て圍ふて居る。此間にケリナは傍のパインの木に猿の如く驅上つて難を避けた。ここに三人は各長劍を引抜き闇の木

の間にケチヤン ケチヤンと敵味方の區別もなく刃を合せてゐる。その度毎にピカピカと星の様な火花が出る。カチン カチンと刃の擦れ合ふ音、火花の光り、吾を忘れてケリナ姫はパインの上から眺めてゐる。

ベルは劍を投げ棄て、

ベル「おい、ヘル、シャルの奴、到底此闇では勝負も駄目だ。どうだ、之から組打をやらうかい」

「よし来た」とヘル、シャルの二人は刀を投げ棄てた。此處に三人は腕力に任せてジタンバタンと組合ふて居る。遂には一生懸命になつて三人組んだまま谷底の青淵へドボンと水音を立てて落ち込んで了つた。パインの上から見てもリナ姫は自分の恩人が陥つたのを見るより「助けにやならぬ」と矢庭に木を滑り下り、又もや青淵目蒐けてドボンと跳び込んで了つた。四人は果して如何なる運命に見舞はるであらうか。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館二階 北村隆光録)

第三章 仇花（一四三三）

さつき待つ花橘の香を嗅げば

昔の人の袖の香ぞする

夢にも結ぶ戀しき吾背の君は如何なしつらむと、戀路も深き思ひ草。

花いろいろのブラツクリストを経て咲き出づる卯の花や、燕子花、紫に染る山

吹の色香に愛でて唯一人トボトボと青野ヶ原を辿り行く。花は吾身の進み行く道

の邊に笑へども、唯一聲の訪れもせず、其足音さへも聞えず、百鳥は四邊の山林

に啼き叫べども、吾涙未だ盡きず。實にも盡きざる戀の色、百花の種子、緑、紅、

白、赤、黄、爛漫と咲き出づる恨は深し深百合や、神の恵の深見草、心を寄せて

進む身の、戀しき吾が夫は妾の心を白露の、梢に霜はおくとても、尚常磐なれや、

橘の目覺草のいと清し、君の御身には何事も恙在せ玉ふ事は無くとも、何方に坐

しますか、昔の戀を忍ぶ草、春めき渡りて花霞、立上り行く空を見すてて行く雁
は、花無き里に住みや習へるか、心空なる疑ひに満ちぬ。テルモン山の神苑に
咲き誇りたる若芽の花を見捨ててはや一年、顧み玉はぬ夫の情無さ。假令此身は
屍を野邊に晒すとも、思ひつめたる戀の意地、足乳根の父母の許さぬ戀に焦れし
身は、款冬誤つて晩春の風に綻び、躑躅は夜遊の人の折を得て、驚く春の夢の中、
胡蝶の戯れ色香に愛でしも、今となり思ひ廻せば心の仇花なりしか。今や吾が身
は夏草の、濕茸に交る姫百合の、手折る人なき身の淺間しさ。アア戀しき鎌彦の
君は、何れにましますか、唯一目會はまほしやと、吹來る風の響にも、とつおひ
つ心を悩ませ乍ら、北へ北へと進み行く。

斯る處へ前方より、

とぼとぼ來る一人の男、

女を見るより佇みて、

いぶかし氣にも眺め入る。

女は見るより驚きの聲を張り上げて、

ケリナ「アア貴方は戀しき鎌彦さまぢやムいませぬか、何うしてマアこんな處に居られましたか。妾は貴方がエルシナ谷の庵を出て、些とばかり商賣をして金を儲けて来るからと仰有つて、駱駝を引つれ御出でになつた其後は、訪ふ人も無きひとり住居、晨夕の一人寢も猛獸の聲に驚かされ、秋の夕の蟲の音を聞いては哀傷の涙にくれ、憂重つて心は益々感傷的となり身も世もあらぬ思ひに世を果敢なみて、エルシナ川に身を投げたと思ひきや、名も知らぬ斯様な處へ迷つて参りました。さても嬉しや斯様な處で貴方に御目に掛らうとは夢にも存じませ何だ、お懐しうムいます」

と抱きつけば鎌彦は振り放し、
鎌彦「ケリナ姫、お前も定めて苦勞をしたであらう、誠にすまなかつた。併し乍ら私はお前には未だ隠して云はなかつたが、お前と結婚する前に、戀の仇と思ひ込み、ベルジールと云ふ男をうまくチヨロマカして淵に投げ込み、生命をとつた其のお蔭で、お前と嬉しい仲間となり、兩親の目を忍んでエルシナ谷に庵を結び、偕老同穴を契る折しも夜な夜なベルジールの怨靈現はれ、恐ろしい顔をして睨みつけ

るのでお前の側に居る事も出来ず、又お前の顔がベルギーに見えて来て怖ろしく
て仕方が無いので、行商に事寄せ、駱駝を引連れて、お前に別れ、彼方此方と彷徨
うち三人組の泥坊に出逢ひ、持物一切を掠奪され赤裸の儘、ライオン河に投
げこまれ、罪の報ひで今は冥途の八衢に彷徨ふて居るのだ。何卒私の事は思ひ切
つてくれぬと何時迄も天国へ行く事が出来ないのだ。お前は未だ此處へ来る精靈
ではないやうだ。何とかして早く引返し、御両親様に御詫をなし、相當の夫を持
ち一生を送つてくれ。それが私の頼みだ

と掌を合し涙と共に拜んでゐる。

ケリナは鎌彦の言葉に不審の胸を抱き乍ら頭を傾けて、寸時思案に沈んでゐた。
暫くあつて顔を上げ、

ケリナ「モシ鎌彦さま、今初めて貴方の御言葉を聞いて驚きました。お前は彼の
愛らしいベルギーさまを殺したのですか。何故そんな悪い事をして下さいました。
あのベルギーさまは實の所は妾の兄でムいます。お父さまが内證女を孕ませて母
に隠して首陀の家へやつたのでムいますよ。妾は其事を父から聞いて居りました

から、是迄ベルギーさまが私を妹と知らず幾度も言ひ寄り遊ばした事がムいます
が、そこは體よく斷つて居りました。思へば思へば戀しき夫は兄の仇であつたか。
其お話を聞くにつけ、貴方が憎らしいやら、戀しいやら吾乍ら吾心が怪しうなつ
て参りました」

鎌彦「私は一度ベルギーさまに御目に掛つてお詫をせなくてはなりません。夫故
靈界へ來てから所々方々と其所を探し一言御許しを頂きたいとあせつて居りま
すが、噂に聞けば、何うやら天國にお出になつたさうで御目にかかる事も出來
ず、實に困り切つて居ります。貴方が兄妹とあれば御兄さまに代つて何卒一言許
すと言つて下さいませ。さうすれば此鎌彦も罪が解けて天國の生涯が送れるでせ
う。何卒今迄の厚誼に一言許すとの御言葉を頂き度うムいます」
ケリナ「妾が貴方を許すといふ資格はムいませぬ。又妾も兄の仇と知らずに夫婦
になつた罪は中々容易なものではムいますまい。屹度地獄のドン底に墮ちねばな
らぬ此靈魂、どうして左様な事が出來ませうか。アア残念でムいます」
と泣き倒れる。

鎌彦は雙手を組み草生茂る地上にドツカと坐し、悔悟の涙に暮れてゐる。斯る處へスタスタとベル、シャル、ヘルの三人、覆面頭巾の黒装束、長い劍を腰にぶら下げ乍ら、ドシドシとやつて来た。ベルは鎌彦の姿を見るより驚いて、ベル「ヤア、お前はライオン河の川縁に於て駱駝を率ゐる行商にやつて来た旅人ではなかつたか」

鎌彦「ウン、さうだ。あの時の泥坊はお前等三人であつたなア。到頭天命盡きてお前も冥途へ送られたのだな」

ベル「馬鹿をいふない。貴様は氣が違ふたのか。此處は冥途ぢやないぞ。俺達は今テルモン山の麓を通り、泥坊稼ぎに歩いて居る最中だ。ライオン河の激流へ落し込んでやつた以上は其方は最早冥途へ行つたと思ひしに、さてもさても生命冥加の奴ぢや。何處かの奴に助けられ、こんな處へ彷徨うてゐやがるのだな。アハハハ、……アツお前はケリナとかいふナイスぢやないか。何時の間にこんな處へ出て来たのぢや。サア、此處で見つけたを幸ひ俺の女房になるのだぞ」

ケリナ「ホホホホ、これはこれは泥坊の親方様、貴方はエルシナ川に落ち込んで

で妾等と一緒に冥途へ彷徨ひ來り乍ら、未だ泥坊をやらうとなさるのか。好加減に改心をなさいませ

ベル「ハテナ、さう聞くと、エー、此奴等二人の奴とお前の取合ひから格闘を始め、深淵へ落込んだと思つたら、其時に矢張り死んだのかなア。ハテ、合點の行かぬ事ぢやワイ。俺が殺したと思ふ男は此處に立つている。又ナイスも此處にゐる。さうして四邊の景色も別に變つてゐないやうだし、合點の行かぬ事だ。オイ、ヘル、シャル、貴様は此處を何と思ふか

ヘル「ウン、どうも俺達には現界とも幽界とも見當はつかないわ

シャル「夢でも見てゐるのぢやなからうかなア

鎌彦「決して此處は現界ぢやありませんよ。モウ少し向ふへ行つて見なさい。伊吹戸主神様のお關所がムいます。さうしたらスツカリとお前は死んでゐるか、生きてゐるか判るでせう。私もお前の御蔭で生命をとられ、靈界へ來たので生前に人を殺した罪に苦しめられてゐるよりは、少し許り苦しさが薄らいだやうに思ふ。併し乍ら人を殺した罪は何處迄も消ゆるものではない。お前も又私の肉體を殺し

たのだから、屹度其罪は除れまい。併し乍ら神様は吾々を地獄へ墮さうとはなさ
らぬ。此中有界へ彷徨はして天晴れ誠の靈身になり、神の光を身に浴び天國の生
涯を送る日を待たせ玉ふのだ。これからお前もモウ斯うなつては仕方がないから
悔い改めて善道へ立歸り、天國の生涯を送つたがよからう」

ベル「ハーテ、譯の分らぬ事ばかり言ふ奴が現はれたものだなア」

鎌彦「サア、皆さま、これから私が案内を致しませう」

と先に立つ。男女四人は後に従ひ、草茫茫と生え、種々の花咲き匂ふ青芝道を心
欣々進み行く。

漸くにして八衢の關所に着いた。白と赤との守衛は例の如く儼然として控へて
ゐる。鎌彦は何時の間にやら姿は見えなくなつてゐた。赤の守衛は四人の姿を見
て、まづ第一にベルを呼び出し、一々生前の罪状を取り調べ、
赤「アアお前は何うしても地獄行きだなア。可愛相だけけれど、自分が造つた地獄
だから、アア仕方がないわ」
ベル「成る程、私は仰せの如くよからぬ事を致して來ました。併し乍らコレも不

知不識の過ちでムいますから、何卒許して頂きたうムいます。神様は愛を以て御本體となさるぢやありませんか。何處迄も悪人を悪人として罰せず、地獄の苦しみを課せず、天國に救つて下さるが神様だと思ひます。悪人を罰するのならそれは決して愛とは申されません。愛の缺けた神は最早神ではありません。赤「お前は直に地獄へ行くべきものだが、今此處でエンゼルが御説教をなさるか、夫に依つて悔改め、エンゼルの御言葉が耳に入り、心に浸潤したならば屹度天國へ救はれるだらう。併し乍らお前の造つた悪業では、エンゼルの御言葉は耳に入るまい。人間が靈肉脱離して靈界に來り八衢の關所を越えて伊吹戸主の館に導き入れられた時には、エンゼルが冥官の調べる以前に一應接見して、大神様や高天原及び天人的生涯の事をお知らせになり、諸々の善や、眞實を教へて下さるやうになつてゐる。併し乍らお前の精靈が世に在つた時に、神は屹度八衢に於て善惡の教をなし其心の向けやうに由つて或は天國へ、或は地獄へ自ら行くと云ふ事は生前より既に承知し乍らも心の中に之を否んだり、或は之を軽く見てゐたら、何うしてもエンゼルの言葉を苦しくて聞く事は出来まい。エンゼルの御面が

怖ろしくなり胸は痛み、居堪たまらず悦んで自分の向ふ地獄へ自ら飛び込むであらう。神は決して世界の人間の精霊を一人も地獄へ墮さうとは御考へなさるのではない。其人が自ら神様に背を向け光に反き地獄に向ふのである。其地獄はお前が現世に居つた時既に和合した所のもので、悪と虚偽とを愛する心の集まり場所である。大神様はエンゼルの手を経たり、且高天原の内流に依つて各精霊を自分の方へ引寄せむと遊ばすけれども、素より悪と虚偽とに染み切つたお前達の精霊は、仁慈無限の神様の御取計らひを忌嫌ひ、力限り之に抵抗し、自分の方から神様を振り棄て離れ行くものである。自分が所有する處の悪と虚偽は鐵の鎖を以て地獄へ自ら引入るるが如きものである。謂はばお前等が自由の意志を以て自ら地獄へ墮落するものだから神様は之を見て愛と善と眞との力を與へ、一人も地獄へ墮そまいと焦せつてゐるのだ。どうぞやこれからエンゼルの御話を聞いて、神様に反いた悪と虚偽とをスツカリと拂拭し天國の生涯を送る氣はないか」

ベル「ハイ、免も角人間は意志の自由を束縛される位苦しい事は無いませぬ。天國へ行つて自分の意志に合はぬ苦しい生活をするよりも、一層の事地獄へ行つて

力一杯活動して見たうムいます」

赤「ウン、さうだらう。お前はどうしても地獄代物だ。各所主の愛に依つて精靈の籍が定まるものだから、どうしても助けやうがないワ。併し乍ら此生死簿には未だお前は此處へ来る精靈ぢやないから、此關所は越ゆる事は出来ない」

ベル「ハテ、合點が行かぬ事だなア。生きて居るのか、死んで居るのか、自分に少しも合點が行かぬ。どうも死んだやうな覺えもなし、だと云ふてエルシナ川へ飛び込んだ事は確だし、其間に人に救はれて生きてゐるのか、或は死んでからも残つて居る意志がハツキリしてゐるのか、どうも其點が私には分りませぬがなア」

赤「ウン、そらさうだ、わかるまい。假令肉體は亡ぶるとも、人間の本體たる精靈は意志想念を繼續してゐるなり、又生前と同様の肉體を保つて居るのだから、合點の行かぬのは無理もない。併し乍ら此處は幽冥界だ。靈肉脱離後の人間（即ち精靈）の来る處だ。サア、早く此處を立去れ。やがて誰かが迎へに来るだらう。モシ迎へに来なかつたならば、お前の好きな地獄へ行くだらう。サア早く立てツ」

と金棒を以て突出せば、ベルはヨロヨロとし乍ら、傍の茫茫たる草の中に倒れて了つた。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館二階 外山豊二録)

第四章 盜歌〔一四三四〕

高天原と根の國を	中斷したる中有界
百のエンゼル下り來て	伊吹戸主の御館に
集まりたまひ愛善の	徳をば教へ信眞の
光を照して精靈を	皆悉く天界に
救はむものと大神の	大御心を畏みて
言葉を盡し氣を配り	諭したまへど現世に

ありたる時に諸々の

悪と虚偽との罪惡に

御魂を汚し破りたる

精靈は清きエンゼルの

宣る言靈に堪へきれず

頭は痛み胸はやけ

耳には針をさす如く

いと苦しげに自ら

自由自在に根の國や

底の國へと驅り行く

ああ惟神々々

宇宙の主宰と現れませる

仁慈無限の大神は

人の精靈は云ふも更

禽獸蟲魚に至るまで

靈あるものは悉く

皆天國へ救ひ上げ

各團體の圓滿を

はからせ給へど如何にせむ

惡に慣れたる精靈は

善と眞とを忌み嫌ひ

惡と虚偽との惡魔道へ

自ら勇んで降りゆく

醜の御魂ぞあはれなり

皇大神は此様を

憐みたまひ現世に

嚴の御魂や瑞御魂

神の依さしのエンゼルを

下したまひて靈界の

奇き有様悉く

完全に委曲に説き諭し

示させたまへど現世の

自愛の欲に囚はれて

眼をふさぎ耳を閉ぢ

神の光を背にして

皆散り散りに逃げて行く

醜の御魂ぞ憐れなり

神が表に現はれて

善と惡との報ひをば

いと審に説き諭し

罪をば宥し救けむと

心を千々に碎きつつ

血を吐く思ひの杜鵑

八千八度の聲枯れて

龍宮館の渡船場に

立たせたまふぞ畏けれ

ああ惟神々々

御靈幸倍まませよ。

白赤の守衛は、

ヘル、シャル、ケリナ姫の生死簿を調べ、未だ何れも數十年現

界に壽命の残つて居ることを三人に宣り聞かせ、一時も早く此處を立ち去り東に

向つて進めよと命じた。三人は夢か現か、現界か、幽界か、少しも合點ゆかず暗

中摸索の體にて、守衛が云ふままに踵をかへし、東を指してトボトボと進み行く。

ケリナ「細き煙も絶え絶えの
光の影を後にして

戀しき夫を尋ねむと
草の樞を引き立てて

エルシナ河の邊まで
進み來れる折もあれ

傾く峰の月影は
妾が姿を見下して

諸行無常と慄ひ居る
ああ懐しや懐しや

戀しき人の後追ふて
荒野ヶ原を打ち渡り

露に體を霑して
涙を絞る悲しさよ

濡るるも花の下影に
宿らむものと立ち寄れば

傾く月は夜を殘し
仰げば高し天の河

空には雁の聲すれど
尋ぬる人の便りをば

聞知るよしもないぢやくり
ああ如何にせむ千秋の

恨を呑んで遠近と
彷徨ひ來りエルシナの

谷川目蒐けて身を投じ 寂滅爲樂となりしよと

思ふまもなくヘル、シヤール 二人の男に助けられ

又も浮世の荒風に 當りて心を碎く折

泥坊頭のベルさまが 無體の戀慕を吹きかける

ヘルとシヤールの兩人を 向ふにまはしケリナをば

互に妻に娶らむと 鎬を削る果敢なさよ

妾は驚き森林の パインの梢にかけ登り

難を避け居る時もあれ 闇をつらぬく水の音

忽ち三人の黑影は エルシナ河の深淵に

落ちたるものか憐れやと 窺ふ途端に踏み外し

ケリナも共に深淵に 落ち込みたりと思ひきや

いつの間にかは知らねども 草花茂る田圃道

彷徨ひ來りし訝しさ 思ふに此地は靈界か

探ねあぐみし背の君の 鎌彦さまに廻り會ひ

過ぎ 昔の物語 聞いて驚く吾心

戀しき人は兄の仇 如何なる因果の廻り來て

斯も不思議な運命の 綱に繋がれ居たりしぞ

これも現世の宿業が 廻り廻りて吾の身に

來りしものか情けなや 兄のベルギーを殺したる

夫と恃みし鎌彦は 又もやベルに殺されて

ライオン河の泡となり 消えて後なく靈界の

巷に迷ふ憐さよ ああ惟神々々

御魂の恩賴を賜りて 中有界に迷ひたる

吾等の御魂を速に 神の御國へ救へかし

朝日も照らず月もなく 星さへ見えぬこの道に

咲き誇りたる百の花 香りはあまりなけれども

艷を競ふて並び居る 草木の花に至るまで

常世の春を樂しみて 歡ぎ遊べる世の中に

吾等三人は何として 花も實もなき靈界の

心淋しき此旅路 憐みたまへ天津神

國津神達八百萬 神の使の御前に

謹み敬ひ願ぎまつる 謹み畏み願ぎまつる

と歌ひ乍ら進み行く。一人の泥酔男頬被りを深く被り乍ら、淋しさうな筒袖で、
労働姿の儘やつて来た。三人は道の傍の木影に立ち留り其男を目送して居る。餘
り廣からぬ道を、右によるよる左によるよると足許危く、

男 晴れを待つ宵、曇るも憎や

曇りまつよに、晴れる月

【戀】は【誰】が（五位、鷹）

【教】（鴛鴦）へ【つる】【かも】一【假】初に（鶴、鴨、雁）

ほのみし【影】の身にしみて【憂】き（家鶏、鶉）

やつこらしよ、やつこらしよ……ぢや」

と唄ひ乍ら三人にドンと突き當り、

男「ドド誰奴だ、往來の妨げをしやがつて些濟まぬぢやないか。見れば男が二人に女が一匹、ヘン馬鹿にしてけつかるわい。一寸見た所では綺麗な女だが、その衣類は何だ。まるきり古家の障子見たやうに窓が明きさらして肌が見えて居るぢやないか。えらい、蝨だ。何だ美人かと思へば蝨太夫さまか、ペツペツ、ああ汚い、臭い臭い」
と鼻を撮む。

ヘル「こりや、どこの誰奴か知らないが、俺の奥さまを捉へて何といふ暴言を吐くのだ、もう承知はしないぞ」

男「アハハハハ。乞食女を奥さまだなんて好いデレ助だなア、ハハハ、こんな蝨太夫でも後を慕つて来る男が、二人もあるかと思へば世の中は不思議なものだなア。オイ阿魔女お前の名は何と云ふのだ。蝨のお宿さま、名を云ふのが恥かし

いのか、ペツペツペツ」

ヘル「こりや、何所の奴か知らぬが一寸待て、貴様は一體此處を何處と心得て居るか」

男「ヘン、何處も彼所もあるものかい、此處はフサの國テルモン山の麓の高野ヶ原だ。俺の女房がこの先の村に待つて居るのだ。これから歸るのだよ。夫は夫は別嬪だぞ」

ヘル「これや、惚けやがるない、貴様は此處を高野ヶ原と思つて居るか知らぬが此處は冥土の八衢だ。些確りせぬかい、そして此處に現はれた女の方は俺の女房とは伴り、實の所は三十三相に身を變じ遊ばず觀自在天様だぞ」

男「ハハハハハ、何を吐しやがるのだい。觀自在天とはよく洒落たものだ。このナイスの體には、胡麻を撒りかけた如く觀音様が御出現だからな、ウフフフ

噛みつかば許しはするなただ捻れ

布子の裏にわたがみはなし

梅櫻摺縫箔の古小袖
つめきくらすりぬひはくふるこそで

花見蝨の飛び散りにけり
はなみしらみとち

汗水になりて世渡る人の身の
あせみつよわたひとみ

夏の蝨は浮つ沈みつ
なつしらみうきしづ

か、ウントコシヨ、ウントコシヨ、か。

引きかつぎ帷布ごしに空見れば
ひきかつぎかたびらそらみ

雲井を走る月の夜蝨
くもゐはしつきよじらみ

冬籠布子の綿に住む蝨
ふゆしもりぬのこわたすしらみ

雪の如くに白けてぞ臥す
ゆきごとくしらけてふ

へル「アハハハハ。こりや蝨太夫、ソロリソロリと新左衛門坊主の云ふやうな事
を吐くぢやないか、貴様は餘つ程蝨博士と見えるな」
こきさままよしらみたいうほどしらみはかせみ

男「定つた事だ。俺こそ蝨のお庄屋さまだ。これ見る、こんな淺黄の筒袖を着て居るから貴様の目には分るまいが、俺の着物は六道の辻だ。澤山の蝨がウヨウヨと右往左往に活動して居るのぢや。俺の名も六道なり合ふたり叶ふたりだ。一層の事その蝨ナイスと此處で一つ觀音較べをして夫婦になる譯にはゆくまいかなア」
ヘル「こりや、貴様は今この先に美しい女房が待つて居ると言つたぢやないか、夫にも關らず、このナイスと結婚すれば重婚の罪で八衢の關所で嚴罰に處せられるの知らぬのか。貴様は氣の多い、箸豆人足と見えるわい」
六造「實の所はまだ女房が無いのだ。俺の方から女房と定めて居るだけで、先方の意志はテンと分らぬのだ。今日で三年計り顔を見に通つて居るのだが、まだ一口も心の思ひを先方に響かした事はないのだ。つまり豫定の女房だからなア」
ヘル「アハハハハ。大方其邊のことだと思ふて居たのだ。貴様のスタイルで猫だつて女房になる奴があるかい、蝨に體を舐らして置く位が性に合つて居るわい。も少し先に行くくと六道の辻だから、蝨でも提出して地獄行の冥罰を助かつたらよからう、蝨は觀世音菩薩だからのう」

六 碌でもない事を云ふない。八衢だとか六道の辻だとか、何を呆て居るのだ。此處は現界だ。貴様は大方夢でも見て居るのだらう。蝨のやうなものは俺も實は好かないのだけれど、何分洗濯して呉れる女房もなし、噛んだり捻つたり縁側に擴げて徳利を轉がしたりして征伐しても仲々絶え切らぬものだ。六道の辻と云へば地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、と云ふ事だが夫れについて面白い蝨の歌がある、一つ聞かしてやらうか」

ヘル ウン、承はらう、どうで碌な歌ぢやあるまいが、併し乞食の門付けを聞くと思つてお耳を借してやらう、古汚い蝨のわくやうな歌なら御免だぞ」

六 〇 どうせ蝨のわく着物は古いに定つて居るわ、黴の生へた頭から捻り出した歌でなくては蝨に對する名歌が出来るものでない、野暮の事を云ふな。サアこれから地獄の蝨だ。

地獄

捻^{ひね}る樂^{らく}漬^{つが}す極^{ごく}樂^{らく}火^ひは淨^{じやう}土^ど
水^{みづ}に入^いるこそ地^ぢ獄^{じく}なりけり

餓^が鬼^き

脱^ぬぎ捨^すてて竿^{さを}にかけたる古^{ふる}布^{ぬの}子^こ
餓^が鬼^きの如^{ごと}くに瘦^{やせ}蝨^{じらみ}かな

畜^{ちく}生^{しやう}

人^{ひと}を喰^くふ事^{こと}より外^{ほか}はいざ蝨^{じらみ}
生^い畜^{ちく}生^{しやう}の果^{はて}と云^いふべき

修^{しゆ}羅^ら

血交りに殺し捨てたる蝨こそ
さながら修羅の衢なりけり

人間

帷布の縫目に宿る蝨こそ
人と同じく立ちてゆくなり

天上

五月雨や龍の鱗にわく蝨
つれてもろ共天に登れり
かくれ住む肌の守の蝨こそ
生きた観音菩薩なりけり』

シャル「アハハハハ。十八世紀のお茶坊主が吐いた歌ぢやないか、貴様の作つたのぢやあるまい」

六造「誰が作つても同じ事ぢや、現在俺の口から出たのぢやないか、他人のものなら他人の口から出る、俺の作つた證據には俺の聲をもつて俺の口から貴様に傳へてやつたぢやないか、ゴテゴテ云ふない」

シャル「他人の歌を盗む奴は、八衢の關所で調べられたら矢張咎られて咎人になるぞよ、歌を盗む奴を盗歌人といふのだぞ、ウフフフ」

斯かる所へ蓑笠を被つた五十餘の一人の婆アが、金剛杖をつき、何か小聲に歌ひながら、トボトボと進み来る。四人は其姿の何處ともなく變つて居るのに不審を抱き、つくづくと眺めて居た。婆は何か急用でもあるやうに頻りに足許を急いで居る。四人は何と思ふたか道端の背丈の延びた雑草の中に身を隠した。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館二階 加藤明子録)

第五章 鷹魅（一四三五）

此世を造りし元津祖

彌勒の神は高姫が

肉のお宮に憑りたる

日の出神とこじつけて

金剛不壞の如意寶珠

其外百の神寶に

執着強く四方の國

海洋萬里の波渡り

騒ぎまはりし其結果

仁慈無限の瑞御靈

神素盞鳴の大神の

水も洩らさぬ執成に

心の底から悔悟して

誠の道に生き復り

暫らく聖地に現はれて

教を傳へ居たりしが

淡路の里の東助が

昔馴染と聞きしより

再び狂ふ心猿意馬の

止め度もなしに躍動し

生田の森を後にして

長の海山打渡り

心こころいそいそ齋苑いそやかた館かん

詣まうで來きたりて東助とうすけに

シツポリなして舊交きうかうを

雲くもに包つつまれ村肝むらきもの

信心しんじん堅固けんこの東助とうすけは

只ただ一いち瞥べつもくれずして

心曇こころくもりし高姫たかひめも

又またもやもとの惡身あくみたま魂たま

嵐あらしに面おもてを曝さらしつ

玉國たまくに別の築きづきたる

こここゝに教主けうしゆとなりすまし

眼がん下かに見み下くだし居ゐたる折をり

八岐やまた大蛇をろちの片腕かたうでと

妖幻えうげん坊ぼうに操あやつられ

ウブスナ山やまの聖場せいぢやうに

過すぎし昔むかしの物語ものがたり

回復くわいふくせむと戀愛れんあいの

心こころは暗やみとなりにけり

戀こひに狂くるへる高姫たかひめに

いと素氣すげなくも刎はねつける

愈いよいよ自暴ばう自棄じきとなり

再發さいはつなして河鹿山かしかやま

恥はぢも名譽めいよも知しらばこそ

祠ほこらの森もりに立寄たちよりて

館やかたの主人あるじ珍彦うづひこを

大雲山だいうんざんに蟠わだかまる

兇黨界きようたうかいにて名なも高たかき

齋苑いその館やかたの時置師ときおかし

空助もくすけ總務そうむと誤解ごかいして うまく抱だき込みこ一旗ひとばたを

擧あげて聖地せいちに立籠たてこもる 東野あづまの別の向むかふ張はり

戀こひの意趣いしうを晴はらさむと 企たくみ居あたりし折をりもあれ

初稚はつわかひめ姫あが現あらはれて 千變せんべん萬化ばんくわの活動くわつどうに

居あ堪たまりかねて妖幻えうげん坊ぼう 高たか姫ひめ諸もろ共とも森しん林りんを

潛くぐつてスタスタ逃にげ出いだし 小北こぎたの山やまの神しん殿でんに

夫ふう婦ふ氣き取とりで進すすみ入いり 神かみの光ひかりに照てらされて

曲まが輪わの玉たまを落おしつ つ 高たか姫ひめ諸もろ共とも逃にげ出いだす

妖幻えうげん坊ぼうの空助もくすけは 高たか姫ひめ司つかさと諸もろ共ともに

バラモン軍ぐんの屯たむろせし 浮木うきぎの森もりに現あらはれて

あらゆる魔法まほうを行おこなひつ 世よ人を惱なやめ居ある折をり

三あ五な教けうに名なも高たかき 天女てんによに等ひとしき神かむつ司つかさ

初稚はつわかひめ姫あやスマー卜うらの 聲こゑに驚おどろき妖幻えうげん坊ぼう

黒雲くろくも起おこし高たか姫ひめを 小脇こわきに抱かかへ空くう中ちゆうを

逃げ行く折しもデカタンの
大高原の中央に

高姫司を遺失して
雲を霞と逃げて行く

高姫空より墜落し
人事不省に陥りて

靈肉脱離の關門を
漸く越えて遙々と

八衢關所に来て見れば
さも勇ましき赤白の

守衛に行途を遮られ
三歳の間中有の

世界に有りて精靈を
研き清むる身となりぬ

さは去り乍ら高姫の
身魂は地獄に籍を置き

高天原の靈光を
恐れ戦き忌み嫌ひ

一歳經ちし今日の日も
中有界をブラブラと

彷徨ひ巡り迷ひ來る
百の精靈に相對し

現實界にありし如
脱線だらけの宣傳を

つづけ居たるぞ愚なれ
エリシナ谷に隠れたる

ケリナの姫やバラモンの
軍人なるヘル、シャルヤ

六造の四人が道の邊の草に隠るる姿をば

目敏く眺め立止まり 皺枯聲を張上げて

日出神の義理天上 彌勒の神の御先達

高姫司の生宮が 汝等四人に氣をつける

早く草原飛び出して 吾生宮の前に出よ

如何に如何にと呼び立てる 其スタイルぞ可笑しけれ

ああ惟神々々 迷ひ切つたる靈魂は

神の力も如何とも 救はむ手段もなかりけり。

高姫は道の邊の長い草の中に隠れてゐる四人の男女に向ひ聲を尖らし乍ら、言

葉の尻口をピンとあげて口角泡を飛ばし、アトラスの様な顔を前にニユツと出し

二つ三つ腮をしゃくり肩を揺り、招き猫の様な手つきをして二つ三つ三つ空を搔

き乍ら、

高姫「これこれ、何處の方が知らぬが此原野は此高姫の管轄區域だ。何故こんな

處まで黙つて来たのだい。まア、ちつと此方へ來なさい。結構な話をしてやらう。エーエー、辛氣臭い。早う出なさらんかいな。蟋蟀か蠱斯の様に草の中に何時迄すつこんで居つても埒は明きませぬぞや」

四人は怖々草を分けガサガサと高姫の二三間手前まで現はれて來た。さうして不思議相に稍俯向氣味になつて高姫の顔をチラチラと偷む様に見てゐた。

高姫「これ皆さま、お前がここへ來る途中に一つの家があつただらう。何故そこを黙つて通つて來たのだい。此高姫はもとは三五教の宣傳使、今はウライナイ教のエンゼルだぞえ。天の彌勒様の根本の根本の大柱の大彌勒様で、義理天上日出神の生宮でムるぞや。あんまり現界の人間が身魂が曇つてゐるので、どうぞ助けて天國へやつてやり度いと思つて化身の法を使ひ、高姫の肉宮を使つて此大野ヶ原を往來する人民を片端から取ツ捉まへて、誠の教を聞かしてゐるのだ。さア早く出て來なさい」

六造「お前さまは音に名高い高姫さまでムいましたか。お名は承はつてゐましたが、お目にかかるのは初めてです」

高姫「うん、さうかな。妾の名は何と云つても宇宙根本の大神様の生宮だから津々浦々迄響いてゐる筈だ。三人のお方、お前等も妾の名を聞いて居つただらうな」

ヘル「ハイ、根つから聞いた事はムいませぬ。私は初稚姫さまだとか、清照姫とか云ふ立派な方の名は聞いて居ますが、高姫さまと云ふ名は今日が初めてです」

高姫「さうかいな。何とまあ遅れ耳なこと。天地の間に義理天上日出神の生宮の名を知らぬものは一人も無い筈だが、矢張身魂の因縁がないと、雷の様な聲で呼ばつても耳に這入らぬと見えるわい。さア此處で會ふたを幸ひ、高姫の姿を拜見しお聲をよく聞いておきなさい。決して高姫が云ふのぢやありませんぞや。底津磐根の根本の大彌勒様が仰有るのだから仇に聞いては罰が當りますぞえ」

ヘル「何だか知りませぬが、貴方のお聲を聞くと頭が痛くなりますわ。お顔を見ても氣分がよくムいませぬわい」

高姫「そら、さうだらう。靈國天國を兼ねた天人の身魂だから、身魂の曇つた惡の守護神は高姫の光明に照らされて、目が眩み善言美詞の言靈にあてられて、耳が鳴り頭が痛むのだよ。チツと確りしなさらんか。今ここで取違ひしたら、萬劫

末代まつだい浮うかばれませぬぞや」

ヘル」「へいへい、畏かしこまりました。又また御縁ごえんがこいましてらお世話せわになりやせう」

高姫たかひめ「ホホホホ譯わけの分わからぬ癡狂てんきやう癡呆ちほうだこと。ああ大慈大悲だいじだいひの根本こんぽんの大彌勒おほみろくさ

まも、こんな没分曉わからず漢やを濟度さいどなさらなならぬのか、ホンにおいとしいわいのう、

オーンオーンオーン、然しかし乍ながら此男このをとこはヘルとか聞きいたが、餘程よほど馬鹿ばかな奴やつと見みえる。

おい、そこに居ゐる、も一人ひとりの男をとこ、お前は高姫たかひめの名位なぐらゐは聞きいてゐるだらうな」

シャル」「ハイ、聞きいて居をりますが、私の聞きいてる高姫たかひめは貴女あなたではこいいますまい。

世界せかいに同おなじ名なは澤山たくさんいますからな」

高姫たかひめ「お前の聞きいてる高姫たかひめと云いふのは如何どんな性質せいしつの人ひとだ。一寸ちよつと云いつて御覽ごらんなさい」

シャル」「へい、吾々われわれの親方おやかたにして宜よい様やうなお方かたですわ。何なんでも三五教あななひけうとやらに這は

入いつて金剛不壞こんがうぶゑの如意寶珠にょいほうしゆに現うつを抜ぬかし大勢おほぜいの者ものに嫌きらはれ、屁への出での神かみとか糞出くそで

の神かみとか云いつて自みづから觸ふれ歩あるき、終しまひの果はてには婆ばばの癖くせに戀こひに落おち、妖幻坊えうげんぼうと云いふ古ふるだ

狸ぬきにつままれて何處どこかへ攫さらはれて行いつたと云いふ事ことです。その高姫たかひめなら聞きいてゐま

すが随分ずぶん私の村むらでは悪わるい婆ばばだと云いふ評判ひやうばんが立たつて居をりますよ」

高姫「さうかな。矢張妾の名に似た婆があるに見えるワイ。餘り妾の名が高いものだから悪神が現はれて高姫の名を騙り、三五教へ這入つて、又も日出神の名を騙り、色々の事を致したのだらう。どうも油断のならぬ時節だ。然し妾は同じ高姫でも、そんな者とは違ひますぞや。月と鼈、雪と墨、同じものと見られましては……へん……此高姫も根つから引合ひませんわい。オホホホホ」

シヤル「私は今は斯うして泥坊商賣に變りましたが、今迄はバラモン教の軍人で鬼春別の部下に仕へたものです。その時に三五教の幹部連の人相書や繪姿が廻つて來ましたが、妖幻坊に騙されたと云ふ高姫に、お前さまそつくりですよ。よもや其高姫ではムいますまいな。彼奴の云ふ事なら口と心が裏表だから決して聞いではならないと、バラモン教は云ふに及ばず三五教のピュリタンでさへも云つて居ますよ」

高姫「ホホホホ、盗人の分際として高姫の眞偽が判つて堪らうか。あの高姫と云ふ奴は實の所はバラモン教に居つた蜈蚣姫と云ふのだよ。それが妾の名を騙つて、あんな事をやつたのだ。三五教の奴は馬鹿だから、あまり御光が強いので見

分けがつかず贗者を掴んで居つたのだ。何は免もあれ、この高姫の隠れ家迄いらつしやい。決して利益にならぬ事は云はぬ。皆天國へ助けてやるのだからな」
シャル「オイ、ヘルにケリナに、六公、如何しようかな。一つ此婆アの話の話を聞いてやらうか」

六造「うん」

高姫「エー、そりや何を云ふのだ。此婆の話の話を聞いてやらうも、糞もあつたものかい。底津磐根の彌勒様の生宮だ。何と云つても助けにや措かぬ、さア來なされ來なされ。これ、其處な若いお女中、お前は一寸見た所で仲々氣が利いて居る。事と品によつたら妾の脇立に使つてやらうまいものでもない。何せよ、曇りきつた靈が直に天國に行くと言ふのは餘り氣が良すぎる。途中で墜落る様な事をしではならず、苦勞の花が咲く世の中だから……天國紫微宮から人間の姿となつて降つて來たのだ。そして苦勞の手本を見せて皆に改心させる役だぞえ。お前も出て來て苦勞をしなさい」

ケリナ「ハイ、有難うムいます。實の所は八衢の關所迄參りました所、まだ生命

が現世に残つて居るから歸れ、と仰有つたから歸つて來たのです。最早此處は現界で△いますか□

高姫「きまつた事だよ。此處は現界も現界、大現界だ。現幽神三界の救ひ主だから

先づ現界の人間から助けてやるのだよ□

ヘル「あああ、何が何だか譯が分らなくなつて來た。然しさう聞くと現界の様に

もあるし、も一つ心の底に疑念も残つて居る。こんな道端に立つて居た所が仕方

が無い。先づお婆アの後に跟いて何でも可いから探らして貰ふ事にしようかい。

のう二男一女の御連中□

高姫「探らして貰ふなんて、そりや何を云ふのだい。神の教は正眞一方だ。水晶

の樣につきぬけて居るのだぞえ。スパイか何ぞの様に探るなんて、心の穢い事を

云ふのぢやありませんわい。さアさア來なさい□

と羽ばたきし乍ら欣々と東を指して小徑を歩み出した。四人は兔も角、婆さまの

館に行つて休息せむと重い足を引摺り乍ら跟いて行く。

谷川の邊に萱で葺いた二間作りの小かな家が建つて居た。これが高姫の中有界

に於ける住家である。ヒヨヒヨした板の一枚橋を危く渡り乍ら漸くにして四人は高姫の館にやつと着いた。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館 北村隆光録)

第二篇 宿縁妄執

第六章 高壓(一四三六)

高姫に導かれて四人の男女は、細谷川の一本橋を渡り、二間造りの小さき家に導かれた。高姫の精霊は既に地獄に籍を置き、直ちに地獄に下るべき自然の資格が備はつてゐる。併し乍ら仁慈無限の大神は如何にもして其精霊を救ひやらむと

三年の間、ブルガリオの修行を命じ給ふたのである。總て精靈の内分は忽ち外分に現はれるものである。外分とは概して言へば身體、動作、面貌、言語等を指すのである。内分とは善愛の想念や情動である。

地獄界に籍を有する精靈は最も尊大自我の心強く、他に對して輕侮の念を持ち之を外部に不知不識の間に現はすものである。自分を尊敬せざるものに對しては忽ち威喝を現はし、又は憎惡の相好や復讐的の相好を現はすものである。

故に一言たりとも其意に合はざる事を言ふ者は、忽ち慢心だとか惡だとか虚偽だとか、いろいろの名稱を附して、之を叩きつけむとするのが地獄界に籍を置くものの情態である。

現界に於ける人間も亦、顯幽一致の道理に依つて同様である。現界、靈界を問はず地獄にあるものは、全て世間愛と自己よりする、諸の惡と諸の虚偽に浸つてゐるが故に、其心と自己の心と相似たるものとでなければ、心の相應せないものと一緒に居る事は實に苦しく、呼吸も自由に出来ない位である。併し乍ら惡即ち地獄に於ける者は惡心を以て惡を行ひ、又惡を以て總ての眞理を表明したり、説

明せむとするものである。故に其説明には矛盾撞着支離滅裂の箇所ばかりで、正しき人間や精靈の眼から見れば、實に不都合極まるものである。斯かる惡靈が地獄界に自ら進んで墮ちゆく時は、其處に居る數多の惡靈は、彼等の上に集まり來り、峻酷犖猛なる責罰を加へむとするものである。其有様は現界に於ける法律組織と略類似して居る。總て惡を罰するものは惡人でなければならぬ。虚偽、譎詐、犖猛、峻酷等の惡徳無きものは到底惡人を罰することは出來得ないのである。併し乍ら現界と幽界と異なる點は現界にては大惡が發見されなかつたり、又善人が惡と誤解されて責罰を受くる事が澤山にあるに反し、地獄界に於ては、惡其物が自ら進んで墮ち行くのであるから、恰も衡にかけた如く、少しの不平衡も無いものである。

而して犖猛と峻酷の内分も亦外分即ち相好の上に見はるるものである。故に地獄に墜ちて居る邪鬼及邪靈は何れも其内分相應の面貌を保ち生氣無き死屍の相を現じ、疣や痣、大なる腫物等一見して實に不快な感じを與ふる者である。然し之は天國に到るべき天人の目より其内分を透して見たる形相であつて、地獄の邪靈

相互の間に於ては決して餘り醜しく見えない者である。何故なれば彼等は皆虚偽を以て眞と信じ、惡を以て善と感じて居るからである。時あつて天上より大神の光明、地獄界を照す時は、彼等は忽ち珍姿怪態を曝露し、恰も妖怪の如き相好を現はし、自ら其姿の恐ろしきに驚くものである。併し乍ら天界より光明下り來る時は、朦朧たる地獄は層一層暗黒の度を増すものである。愛善の徳と信眞の光明は惡と虚偽とに充されたる地獄では益々暗黒となるものである。故に如何なる神の稜威も善徳も、信眞の光明も、地獄に籍を置きたる人間より見たる時は、自分の住する世界よりは暗黒に見え、眞理は虚偽と感ぜ、愛善の徳は憎惡と感ぜざるに至るものである。故に大部分地獄界に墮落せる現代人が、大本の光明を見て却て之を暗黒となし、至善至美の教を以て至醜至惡の教理となし、或は邪教と誹るに至るは、其人の内分相應の理に依つて寧ろ當然と謂ふ可きものである。

高姫は中有界に放たれ精靈の修養を積むべき期間を與へられたるにも拘らず、容易に地獄の境涯を脱する事を得ず、虚偽を以て眞理と爲し、惡を以て善と信じ、一心不亂に善の道を擴充せむと車輪の活動を續けて居るのである。類を以て集ま

るとか云つて、自分の内分に相似たるものでなければ、到底相和する事は靈界に於ては出来ない。現界ならばいろいろと巧言令色、或は虚偽なぞに由つて内分の幾分かを包み得るが故に高姫の教を聞くものも多少はあつたけれども、最早靈界に來つては自分と相似たるものでなければ、共に共に生涯を送る事が出来なくなつてゐた。併し乍ら高姫は依然として現界に居るものとのみ考へ、八衢の守衛が言葉も半信半疑の體に取扱ふてゐた。靈界へ來てから殆ど一ケ年、月日を経るに従つて守衛の言葉は少しも意に止めなくなり、益々惡化し乍らも自分の教は至善である、自分の動作は神に叶ひしものである、而して自分は義理天上日出神の生宮で、天地を總轄したる底津岩根の大彌勒の神の神柱と固く信じてゐるのだから堪らない。さて高姫は四人の男女を吾居間に導き、自分は正座に傲然としてかまへ、諄々として支離滅裂なる教を説き初めた。

高姫「皆さま、よくまア日出神の教に従つて此處へ跟いてゐた。お前は餘程因縁の深いお方だぞえ。こんな結構な教は鐵の草鞋が減る所迄世界中を探し廻つても外にはありませんぞや。そして喜びなされ、此高姫は高天原の第一靈國のエン

ゼルの身魂で、根本の根本の大神の生宮だから、天も構へば地も構ひ、何處も彼處も一つに握った太柱、扇で譬へたら要だぞえ。時計で喩たら龍頭の様な者だ。扇に要が無ければバラバラと潰れて了ふ。時計に龍頭が無ければ捻をかける事も出来ずまい。夫だから此高姫は根本の根本の世界に又と無い如意寶珠の玉ぢやから、よく聞きなされや。お前達は泥坊をしたり、バラモンの軍人になつたり所以在惡をやつて來たのだから、直様地獄へ墮すべき代物だけれども、此の高姫の生宮の申す事をよく聞いて行ひを致したなれば結構な結構な第一天國へでも助けて上げますぞや」

と止め度もなく大法螺を吹き立てる。併し乍ら高姫自身は決して自分の言葉は大法螺だとは思つて居ない。正真正銘一分一厘間違ひのない神の慈言だと固く信じて居るのだ。

ヘル「モシ高姫様、貴女が夫れ程偉い御方なら何故天へ上つて下界を御守護遊ばさぬのですか。此様な山の「ほでら」に御殿を建てて吾々の様な人間を一人や二人捉まへて説教をなさるとは、神としては餘り迂闊ぢやないですか。世界中には

幾億萬とも知れぬ精靈があるにも拘らず、根本の大神様の生宮さまが左様な事をなさるとは、些と合點が参りませぬワ。要するに高姫さまの法螺ではムいますまいかなア」

高姫は忽ち地獄的精神になり、輕侮と威喝と憎惡の面相を表はし、且プンプンとふくれ出し言葉迄地獄の相を現はして來た。

高姫「コレお前は何といふ途方もない事を言ふのだ。ホんに蟲【けら】同然のつまらぬ代物だな。勿體なくも神の生宮を輕蔑するとは以ての外ぢや。そんな不量見な事では此生宮は許しませぬぞや。直ちに地獄へ墮してやるから其積りでゐなされよ」

と獐猛なる形相に憤怒の色を現はし、齒をキリキリと噛みしめて、眼を怒らし睨めつけて居る。

ヘルは高姫の面貌を見てギョツとしながら、屹度胸をすゑ、肱を張りわざとに體を前の方へ突き出し、胸の動悸をかくし、

ヘル「アハハハハハ吐したりな高姫、其鬼面は何の事、仁慈無限の神様は些と許

り氣に入らぬ事を云つたからとて、そんな六ヶ敷い相好はなさりませぬぞや。神は愛と善と信とではムらぬか。假にも人を威喝、輕侮、憎惡するやうな事で、何うして正しい神と云へますか。御控へ召され』

と呶鳴りつけた。

高姫は烈火の如く憤り、相好益々獍猛となり、さも憎々しげに睨めつけ乍ら、高姫「コリヤ、バラモンの小盗人奴、何を云ふのだ。誠の生神は貴様のやうな盲聾に分つて堪らうか。お前は心の中に悪と云ふ地獄を築き上げてゐるから、此日出神の圓滿なる美貌が怖く見えたり、善言美詞が悪言暴語の如く聞ゆるのだ。身魂の階級が違ふと悪が善に見え、善が悪に見えたりするものだ』

と自分の悪と虚偽とにより地獄に墮ち居る事を知らず、無性矢鱈に他に對して悪呼はりをしてゐる。人間も精靈も此處迄暗愚になつては如何なる神の力も之を救ふ事は出来ないものである。

へルは高姫の前に首を又ツと突き出し、背水の陣を張つたつもりで、握り拳を固め、

ヘル「今一言、何なと言つて見よ。この鐵拳が貴様の腦天に障るや否や木端微塵にして呉れるぞよ」

との勢を示してゐる。流石の高姫も其權幕に辟易したか、ヘルに向つては夫れ切り相手にしなかつた。ヘルは振り上げた拳のやり所がなくなつて、首尾惡げに元へ直した。

高姫はニヤリと笑ひ乍らさも横柄な面付して後の三人を見下し、

高姫「コレ六公にシャル、ケリナ、何と云つても身魂の因縁性來の事より出來ぬのだから、妾の云ふ事が耳に入らぬ人は、如何しても地獄行きぢやぞえ。皆々、どうだい、一つ此生宮の云ふ事を聞いて天國へ上る氣はないか」

ケリナ「ハイ有難うムいます。到底妾のやうな罪深き人間は自分の造つた罪業に依つて相應の地獄へ行かねばなりません。何程貴女様が天國へ救ひ上げてやらうと仰有つて下さつても、身魂不相應の所へ行くのは苦しくて堪えられませぬ。

妾は現在の儘何時迄も此世に暮したいと存じます」

高姫「ハテ、さて解らぬ方だなア。神が御蔭をやらうと思ふてつき出して居るの

に受取らぬと云ふ事があるものか。諺にも……天の與ふるものを取らざれば却つて災其身に及ぶ……といふ事があるぢやないか。何故此生宮がつき出した神徳を辭退するのだい」

ケリナ「ハイ、御親切は有難うムいますが、神様から頂いた神徳なれば自分がお返し申さぬ限り決して取上げらるる事はムいませぬ。併し乍ら人間さまから頂いた神徳は、何時取返されるか知れませぬから、初めから頂かない方が、雙方の利益でムいませう」

高姫「コレ、ケリナ、何と云ふ解らぬ事をお前は云ふのだい。最前から云つた通り、底津岩根の大彌勒さまの生宮ぢやないか。此生宮を人間ぢやと思ふて居るのが、テンカラ間違ひぢやぞえ。それだからお前は改心が足らぬといふのだ。お前が妾の館へ来たのも昔の昔の根本の古き神代から、身魂の因縁があつて引寄せられたのだ。お前の大先祖は大將軍様を苦しめた十惡道の身魂ぢやから、其罪が子孫に傳はり今度は世の立替立直しにつれて、大掃除が始まるのだから、惡の系統の身魂は焼き亡ぼし、天地の間に置かぬやうにするのだから、此生宮の申す間

に柔順すなほに聞く方はうが、お主ぬしの徳とくぢやぞえ〆

ケリナ〆ハイ、御親切ごしんせつは有難ありがたうムございますが、妾わたしには大先祖おほせんぞがどんな事ことをして居をつたか、中先祖ちうせんぞが何どうだつたか、そんな事ことはテンと解わかりませぬ。私わたしは私わたしで信しんずる神かみ様がムございますから、折角せつかく乍ながら御辭退ごじたいを致いたします〆

高姫たかひめ「ドークズの身魂みたまといふものは上あげも下おろしもならぬものだなア。人間にんげんの分際ぶんざい

として根本こつぽんの因縁いんねんが解わかるものかいなア。それだから此高姫このたかひめが身魂みたま調しらべをして各自めんめに因縁いんねん性しやう來らいを表あらはし、因縁いんねんだけの御用ごようを仰おほせつけるのだ。先祖せんぞからの因縁いんねん性しやう來らいが解わからぬやうな事ことで、何どうして底津岩根そこついはねの大神様おほかみさまの生宮いきみやの御用ごようが勤つとまりますか。神かみ

の申まをす間うちに柔順すなほに聞きいて置おきなさらぬと後あとで後悔ごうくわいを致いたしても、其處そこになりたらモウ神かみは知しりませぬぞや。マア悠ゆつりと胸むねに手てを當あてて雪隠せつちんへでも入はいつて考かんがへて來きなさい。ア一人ひとりの氏子うぢこを誠まことの道みちに導みちびかうと思おもへば、竝なみや大抵たいていの事ことぢやない。乃の

木大將ぎたいしやうが旅順口りよじゆんこうを十萬じふまんの兵士へいしを以もつて落おとしたよりも難むづかいものだ。針はりの穴あなへ駱駝らくだを通とほすよりも難むづかい。これでは神かみも骨ほねが折をれるワイ。盲聾めくろうんぼに何程なにほど結構けつこうな事ことを嚙かんで含くめるやうに言いひ聞きかしてやつても、豚ぶたに眞珠しんじゆ、猫ねこに小判こばんのやうなものだ。憐あはれみ玉たま

へ助け玉へ、底津岩根の大彌勒様おほみろくさま

と掌を合し一生懸命にケリナ姫の改心を祈つてゐる。シャル、六造の二人は此問
答をポカンと口を開けた儘延び上つて立膝し乍ら聞いてゐる。暫くは土佐犬の噛
み合ひのやうな光景で沈黙の幕が下りた。其處へ銅羅聲を張り上げて門の戸をブ
手割れる程叩くものがある。

高姫はツと立上り四人を尻目にかけて乍ら、門の戸を開く可く表を指して進み行
く。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館二階 外山豊二録)

第七章 高鳴たかなり (一四三七)

七重八重言葉の花は咲きぬれど

實の一つさへなき山吹の

花にも擬ふ教へ草
インフエルノのどん底に

靈魂の籍をおきながら
底津岩根の大神の

誠一つの太柱
此世を救ふ義理天上

日の出神の生宮と
信じ切つたる高姫は

如何なる尊き御教も
吾魂に添はざれば

一々これを排斥し
變性男子の生御靈

書かせ給へる御教を
所まんだら撰り出し

自が曇りし心より
勝手次第に解釋し

其身に憑る曲靈に
身も魂も曇らされ

唯一心に神の爲め
世人のためと村肝の

心を盡すぞ果敢けれ
妖幻坊の空助に

魂を抜かれて中空より
印度の國のカルマタの

草茫茫と生え茂る
原野に危く墜落し

其精靈は身體を
首尾よく脱離しブルガリオ

八衢關所に到着し

赤白二人の門番が

情によりて解放され

天の八衢遠近と

彷徨ひ廻りて岩山の

麓に庵を結びつつ

冥土へ來る精靈を

三途の川の脱衣婆の

氣取になつて點檢し

一々館へ連れ歸り

支離滅裂の教理をば

口角泡を飛ばせつつ

一心不亂に説き立てる

其熱心は天を焼き

地を焦がさむず勢に

遠慈愛の大神も

救はむよしもなきままに

三年の間高姫が

心のままに放任し

眼を閉ぢて自ら

眼醒むる時を待ち給ふ

かくも畏き大神の

大御心を覺り得ず

吾身に憑る精靈は

至粹至純の神靈

日の出神の義理天上

底津岩根の大神と

曲の靈に騙られ

信じ居るこそ憐れなり

八衢街道の眞中で

ふと出會した四人連れ

言葉巧に誘ひて

己が館へ連れ歸り

心をこめて天國へ

救ひやらむと氣を焦ち

力を盡す高姫が

心を無にしてバラモンの

ヘルやケリナが反抗し

互に顔を睨み鯛

小さき部屋に熏つて

白黒眼をつり居たる

時しもあれや表戸を

叩くは水鶏か泥坊か

但は嵐の行く音か

何は免もあれ門口に

現はれ實否を探らむと

四人の男女を睨みつつ

庭に下り立ち表戸を

ガラリと開ればこは如何に

髯茫茫と生え茂る

バラモン教の落武者が

泥坊仲間の親分と

聞くより高姫目を睜り

神の教の言靈に

誠をさとし助けむと

心を定めて誘ひ入れ

四人の前に引き来る

ああ惟神々々

神の御靈の幸倍ひて

一時も早く高姫や

其外五人の精靈を

一日も早く大神の

誠の教に服はせ

救はせ給へと願ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

誠の道を誤りし

虚偽に満ちたる高姫が

教を如何に布くとても

正しき神の在す限り

如何でか目的達すべき

さはさりながら善人は

愛と善との徳に居り

眞と信との光明に

浴し仕ふるものなれば

善惡正邪は忽ちに

心の空の日月に

映るひ行けど曲津見に

心を曇らす精靈は

却て惡を善となし

虚偽をば眞理と誤解して

益々狂ふ憐れさよ

あななひけう 三五教のピユリタンと 救はれきつた精霊は
いか 如何でか曲の醜言に 尊き耳を傾けむや
まなこ 眼は眩み耳ふさぎ 霊の汚れし精霊は
たま 霊と霊との相似より 蟻の甘きに集ふごと
よみこ 喜び勇み集まりて 虚偽と不善の教をば
かくしん こよなきものと確信し 随喜渴仰するものぞ
かむながらかむながら 神の大悲の御心を
はか 量りまつりて萬斛の 涙は河と流れゆく
このかはしも 此河下は三途川 脱衣婆々と現はれて
げんいうにかい 現幽二界の精霊が 心を洗ふヨルダンの
なが 流れを渡るぞ憐れなる 此惨状を逸早く
すく 救はせ給へと瑞月王仁が 謹み敬ひ三五の
かみ 神の御前に赤心を 捧げて祈り奉る。

高姫は今来た男に向ひ、穴のあく程其顔を打ち見守りながら、

「ヤアお前の面體には殺氣が溢れて居る。大方泥坊でもやつて居るのぢやないかな」

「是はしたり、此處へ這入るや否や泥坊とは恐れ入ります。成程貴女の仰有る通り、吾々は元からの泥坊では△いませぬ。月の國ハルナの都に現はれたまふ大黒主の御家來、鬼春別のゼネラルのお伴を致し、齋苑の館へ進軍の眞最中、將軍の部下片彦、久米彦が三五教の宣傳使治國別の言靈に脆くも打ち破られ、浮木の森に引き返し來りたれば、此處に軍隊を二つに分ち、一方は鬼春別、一方はランチ、各三千騎を引き率れ、ビクの國を蹂躪し、次で猪倉山に陣營を構へ、武威を八方に輝かす折しも、又もや治國別の神軍に踏み破られ、鬼春別、久米彦の兩將軍は三五教に歸順致され、吾々は解散の厄に遇ひ、心にも無き剥ぎ取り泥坊を彼方此方でやつて居るもので△る。併し私が泥坊だと云つてお前さまに咎めらるる道理はありませんまい。泥坊は泥坊としての最善を盡し、其商賣の繁昌を計つて居るのだから泥坊呼ばはりはやめて貰ひませうかい。此方が泥坊なら此處に居る四人も

泥坊だ。其外世界の奴は直接間接の違ひこそあれ泥坊根性の無いものはない。いや泥坊根性の無いものは無いのみならず、藁すべ一本なりと泥坊せないものは何奴も此奴もありますまい」

高姫「オホホホホ。泥坊にも三分の理窟があるとか云つて、どうでも理窟の付くものだなア、併し乍らお前のやうに泥坊を自慢らしく云ふものは聞いたことがない。些と恥を知りなさい。それだから神様が「今の人間は天の賊だ、泥坊の世の中だ」と仰有るのだ。遠慮してコソコソやつて居るのなら可愛らしい所もあるが、大きな聲で泥坊だと威張り散らすやうになつてはもう世も末だぞへ。そこで底津岩根の大神様が今度立替を遊ばし、鬼も大蛇も賊もないやうになさるのだよ。お前も好い加減に改心なさらぬと未来の程が怖ろしいぞへ」

ベル「アハハハ。諺にも「猿の尻笑ひ」と云ふ事がありますぞや、吾々は泥坊といつても、唯金銭物品を泥坊する許りだ。それよりも大泥坊、否天の賊が此處に一人あるやうだ。鬼の念佛はこのベル、根つから聞きたうはムいませぬわい」

高姫「天の賊が此處に一人居るとはそれや誰の事だい。お前は私の顔を睨めつけ

ながら天の賊と云ふた以上は、誠生粹のこの生宮を取り違ひして天の賊と云つたのだらうがな」

ベル「勿論お前の事だよ、よく考へて御覽なさい。變性男子嚴の御靈の生宮が、大國常立尊の傳達遊ばした神示を、そつと腹に締め込み、それを自分の物として横領して居るぢやないか。そして自分は義理天上だとか、底津岩根の大神の生宮だとか云つて得意になつて居るのは實に天地容れざる大罪惡、大虚偽もこれに越したるものはあるまい。それだからこのベルが大泥坊天の賊と云つたのが、どこに間違ひがゑるかな、不服とあらばベルの前で説明をして貰ひませう」

と胡床をかき言葉鋭く詰よつた。

高姫「ホホホホ。ても扱ても分らぬ男だな、善一つの誠生粹の日本魂の、根本の根本の此世の御先祖様の憑らせたまふ生宮に對し泥坊呼ばはりをするとは無智にも程がある、お前のやうな盲聾が娑婆を塞いで居る以上は何時になつても神政成就は出來ませぬわい。何と云ふても靈が地獄に墮ちて居るのだから、人の眼についている塵は目についてても己の眼にある梁は目に入らぬと見える、これシャル、

六造、この二人の男を見て改心なされや。今が肝腎の時です。人民の分際として善ぢやの悪ぢやのとそれや何を云ふのぢや。三五教の教にも「神が表に現はれて、善と悪とを立て分ける」とお示しになつて居るぢやないか。神様の外に善と悪とを立て分けるものは無い。それも根本の彌勒様より外に立分ける者は無い、枝の神では出来ない、それだから根本の神様の御用をする此高姫の言ふことは大神様の御心だから、お前の心に合はなくてもこの高姫の云ふ通り素直になして行ひを改めさへすれば、現界、神界、幽界、ともに結構な御用が出来ますぞや」

六造「高姫さま、何と仰有つても私にはテンと信用が出来ませぬがな、お前の御面相を最前から考へて居るが、ちつとも神様らしい所が現はれて居りませぬ。表向にはニコニコとしてゐるが、その底の方に何とも云へぬ險惡な相や、憎惡の相が現はれて居りますぞや。「人間の面貌は心の索引」とか云ひまして、何うしても内分は包む事は出来ませぬ、きつと外分に現はれて来るものですからなア」高姫「アーアー、何れもこれも分る靈は一人も無いわい。神様も仰有つた筈だ

「誠の人が三人あつたら三千世界の立替立直が出来るとの事、今更其お言葉を
思ひ出せば實に感歎の外はない。私も長らくこれ程一生懸命に神様の爲め、世人
の爲め、粉骨碎身の活動をして来たが未だ一人の知己を得る事が出来ないのか、
情なや情なや ほんに浮世が嫌になつて来たわい」

シャル「もし高姫様、私はどこ迄も貴女のお言葉を信じます。貴女は本當の根本
の大神様の生宮様に間違ひはありませぬ。何卒私を貴女のお弟子にして下さいま
すまいか」

高姫「オホホホ。成程お前は何處ともなしに氣の利いた男だと初から見込んで
置いた。矢張り日の出の神の目は違はぬわい。これ皆の泥坊共、高姫の申す事
も誠さへ心にありたら、このシャルの通り一遍に腹へ入りますぞや。分らぬのは
お前の心が曇つて居るからであるぞや。ちと御改心なされ、足許から鳥が立つぞ
や」

斯る所へ何處ともなく、ブーウ ブーウと山彦を轟かす法螺貝の聲近づき来る、
ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・三・一四 舊一・二七 於龍宮館二階 加藤明子録)

第八章 愛米あいまい (一四三八)

死しんでから語呂ごろつき出した法螺ほらの貝かひ
聲高こゑたかひめ姫ひめの賤しづが伏家ふせやにに

内外うちそとにうなり出だしたる法螺ほらの貝かひ
おどろきケリナ、ベル、シャル、ヘルに

法螺の音を聞いて高姫立上り

胸轟かす茅屋の戸口

法螺の音は近くに聞え又遠く

聞えぬわいなと神を恨めつ

あの聲は矢張り夢か幻か

高姫司の法螺吹の音か

と口々に歌ひ乍ら、四人は顔見合はして、不審の雲に包まれてゐる。高姫は法螺の聲が再止まつたので、又元の座に引返し來り、併し乍らシャルは妾の知己だ。之から大事に高姫「ああ皆々、待たしました。

して妾の片腕に使うて上げますぞや。四人の方はモウ、トットと歸つて貰ひませう。結構な日出神の御託宣を、ツベコベと小理窟許りひねるやうなお方は、到底助けやうが有りませぬ。第一靈魂の位置に天地の相違があるのだから、此高姫の愛が徹底しないと見えぬ。誠に氣の毒なものだ。之も自業自得と諦めて歸つて貰ひませう。エーエ汚らしい、今聞えた法螺貝の様に腹の中は空洞のクセに、大きな法螺を吹く許りで、仕方のない「カラ」靈魂だ。サアサア、此館は斯う見えても矢張り高姫の御殿だ。お前は小さい熏ぼつた茅屋と思つてゐるだらうが、之でも活眼を開いて能く見れば、金殿玉樓、精靈の曇が除れぬと、こんな立派な御殿が、お前には茅屋に見えませうがな、心次第に何事も映るのだから氣の毒なものだよ。イツヒヒヒヒ

「ベル、何とマア、自我心の強い婆アだなア。妙なインクリネーションを持つてゐるスフエクスだ。どつか精神上に大變なラシヤナリストがあると見えるワイ。オイ、ヘル、ケリナ、モウ歸らうぢやないか。何時迄居つた所で面白くも何ともない、諄々と口角泡を飛ばし、仰有つて下さつても、心に誠がないのだから、サ

ツパリ無味乾燥で、ドライアスダストの様だ。サア、シャルの馬鹿者丈跡に残して出立々々、一、二、三

高姫「エー、ツベコベとベルの如くに嘔る男だなア。併し乍らここへ来た以上は歸ねと云つたものの、中々、實の所歸なす氣はないぞや。歸にたけりや歸なしてやるが、お前の肝玉を抉り出し、結構な結構な靈と入れ替へた上で解放してやる。此處に出刃も用意してあるから、暫時待つたがよからう、動かうと云つたつて、ビクとも出来ぬやうに、曲輪の法が使うてあるから動いてみなさい。お前たちは餘程よい野呂作だから、知らぬ間に靈縛をかけておいたのだよ。イツヒヒヒベル「ナアニツ、チヨン猪口才な、汝等に肝を渡してたまるかい。取るなら取つてみよ」

高姫「取らいでかい。何でも彼でもスツカリ取上げ婆アさまだよ」
ヘル「コレ、もし、高姫さま、私は堪へて呉れるでせうな。實の所はベルよりもお前さまの方がどこともなしに神さまらしい所がある様に思ひます、同じ物を取るにも肝玉を取るとは振つてゐる。私は其一言にサツパリ共鳴して了ひました」

高姫たかひめ「ウン、お前はまへ此このベルからみれば、チツと許ばかりホ口にんそくましな人足だ。併しかし乍ながら底津岩根そこついはねの大神様おほかみさまの生宮いきみやに對たいし、共鳴きよつめいするなんて、何なんと云いふ傲慢不遜がふまんふそんの言いひ方かただ、チツとは言靈ことたまを謹つつしみなさい」

ヘル「何分なにぶんバラモン軍ぐんに居をつて少すこし許ばかり青表紙あをべうしをかぢつたものだから、比較ひかくてき的スピリットが發達はつたつしてゐるものだから、お前まへさまのメデヲカチツクなお話はなしが直接ちよくせつハトに納まりませぬ。それが爲ために煩悶苦惱はんもんくなうしてゐるのですよ」

高姫たかひめ「スピリットだの、ハートだの、メデヲカチツクだのと、そんな怪けツ體たいな四よつ足語あしごを使つかつたつて分わかりませぬぞや。此この高姫たかひめは神かみさまだから、鳥獸とりけものの樣やうな聲こゑは耳みみに通とほりませぬ哩わい。なぜハツキリとしたスパルタ語ごで申まをしあ上げぬのかい」

ヘル「何分靈魂なにぶんみたまの性來しやうらいが惡わるいものだから、満足まんぞくな言靈ことたまがで出まませぬワ。マア堪こらえて貰もらひませうかい」

ベル「コリヤ、ヘルの大將たいしやう、汝きさまは俺おれに反對はんたいてき的たいど態度とを取とる積つもりか。ヨーシ、それならそれで俺おれにも考かんがへがある」

ヘル「考かんがへがあるとは何どうすると言いふのだい」

ベル「當家の主人高姫を第一着手として、『バラモン』教とやり、其次に高姫のパラドックスに共鳴する汝をバラモンとやり、ケリナをうまく懐柔して、へへへ、あとは推量せい。それ以上云ふのも野暮だし、聞くのも野暮だから……」

ヘル「アハハハハ、ケリナが嘸喜んで跟いて行く事だらう、本當に馬鹿だなア」

高姫「エー、喧しい、サア是からこつちの計畫通り實行だ。オイ、ヘル、シャル、お前は表口と裏口に立番をしてゐなさい。そしてケリナは女の事でもあり、反對すると云つた所で、餘り大きな事は能うせうまいから、ここに見て居るがよい、サア、ベル、覺悟はよいか」

と云ひ乍ら、懷中から赤錆になつた出刃をニユツと突き出した。

ベルはビク共騒がず、

ベル「アハハハハハ、そら何だ。蠅螂が斧をふり上げたやうな格好しやがつて、そんな威喝を喰ふベルぢやないぞ。之でも元はバラモン軍のサアジャント様だ。斬合殺し合はお手の物だ。自ら絢うた繩に自ら縛られるやうなものだぞ」

高姫は何と思つたか、出刃をパタリと投付けた。ベルは魔法にかかつて腰から

下がビク共動かなくなつてゐた。併し乍ら手や口は自由自在に動くので、自分の前に落ちた出刃を手早く拾ひ、逆手に握り、最早大丈夫と高姫を睨め付け乍ら、ベル「アハハハハ、面白い面白い、ベルの言葉に辟易して慄ひ戦き、出刃を落しよつたな。エへへへへ、最早大丈夫だ。サア槍でも鐵砲でも持つて来い、之から高姫館の道場破りだ。コリヤ、ヘル、シャル、汝も序にバラしてやらう、有難う

思へ」

高姫「イヒヒヒヒ、何程出刃を振り上げて、山蟹のやうなスタイルで目玉を飛出し、頑張つて居つても駄目だ。こつちには二間の大身槍がある。遠い所からグサリと突いて肝をぬいてやるのだ。オホホホホ。テモさてもいぢらしいものだな。神に反いた天罰と云ふものはこんなものだ。今にみせしめの爲に此高姫が成敗を致すから、ヘル、シャル、ケリナも之を見て改心なされや」

ヘル「ハイ、改心は致します、何卒命許りは助けて下さいませ。どんな事でも致しますから」

高姫「ウン、よしよし、それに間違ひなくば、命丈は許してやる。其代り高姫が

尻を拭けと云つても拭くのだよ」

ヘル「へーエ、宜しあす。……何とか云つて、此場を遁れなくちや仕方がないかならな」

と小聲で呟く。ベルは依然として出刃を振上げたまま、高姫の兇手を防がむと身構へしてゐる。高姫はツと立つて、何處からか大身槍をひつさげ來り、ベルの胸を目蒐けて只一突につき殺さうと構へてゐる。ベルは出刃をふりかざし、息をこらして待つてゐる。忽ちブーブと法螺の貝が間近に聞えて來た。高姫は此聲に身體動搖し、自ら槍を其場にパタリと落した。そして見る見る眞青の顔になつて了つた。シャルは高姫の槍を拾ひ、手早く裏口へ持出し、草の中へ隠して了つた。ベルは依然として出刃をふりかざした儘、固まつてゐる。此時門口をがらりと開け、

「御免下さい、拙者は求道居士と云ふ修験者でゐる。四人の男女がお世話になつてゐると承はり、迎ひに参りました」

高姫は轟く胸を抑へ、ワザと素知らぬ顔をして手を膝の上に揉み、

高姫「これはこれは、どこの修験者か知りませぬが、マアよい所へ来て下さつた。併し乍ら四人の者が世話になつてると、今仰有つたが、能く調べて下さいませ。どうにもかうにもならない悪黨が一人交つてゐます。彼奴は泥坊とみえまして、此婆一人の館へ出刃をふり翳して踊り込み、金を出せ、衣類を出せと申して、此婆アの命を取らうと致しました。それ故、あの通り魔法……オツトドツコイ靈法に依つて封じておきました。お前もチツと、修験者なれば言うて聞かしてやつて下さい。神は人民を一人だつて苦めたい事はムいませぬからな。日出神の義理天上也、こんな没分曉漢に係つては誠に迷惑を致します、オホホホホ」

と自分の事を棚に上げ、且ベルを脅喝した其非事をあばかれない先に、うまく豫防線を張つてゐる。求道居士は「何は免もあれ御免を蒙りませう」と一閒に通じ、見れば四人とも腰部以下はビクとも動かないやうに靈縛されてゐた。求道居士は忽ち、呪文を稱へ、天の數歌を奏上し、四人の靈縛を解いた。高姫は目を丸くし舌を巻いて、家の小隅につツ立つた儘、慄ふてゐる。

求道「お前はベル、ヘル、シャルの三人ぢやないか。北の森でゼネラル様から澤

山のお金を戴き、一時も早く國許へ歸つて正業に就くと言つたクセに、まだ斯様な所にうるついで泥坊をやつてゐたのか、困つた代物だなア

ベル「ハイ、申譯がムいませぬ、キット今後は慎みます、何卒今日は見逃して下さいませ」

ヘル「カーネル様、此通りでムいます」

と掌を合す。シャルは黙つて頭を下げたなり、微笑を帯び、高姫の片腕になつたと云ふ誇りを鼻の先にブラつかしてゐる。

求道「お前達三人は此處を何處だと思ふてゐるのだ」

ベル「ハイ、どことも思ふてをりませぬ、此處だと思ふて居ります」

求道「此處は分つてゐる。現界か幽界かどちらと考へて居るか」

ベル「そんな事が分る位なら、こんな所へ踏ん迷うては参りませぬ、實際は何處でムいますか」

求道「困つた奴だなア、ここは冥土の八衢だ。此高姫といふ婆アさまは、精靈界の兇鬼になつてゐるのだ。サア歸らう、何時迄もこんな所に居つては約まらない

ぢやないか」

三人は何うしても幽界と思ふ事が出来なかつた。

ヘル「モシ、カーネル様、ここが幽界なれば、貴方もヤツパリ肉體は亡くなり、冥土の旅をしてゐるのですか」

求道「イヤ俺は現界にゐるのだ。お前こそ幾ど幽界へ来てゐるのだよ。マ一度現界へ出て心を取直し、誠の人間になつて、更めて靈界へ來るのだ。此儘靈界へ行かうものなら、どうで地獄へ行かねばならぬから助けに來たのだ」

「へーエ」と云つたきり、三人は求道の顔を訝かし氣に見守つてゐる。高姫はソロソロと恐怖心が除かれたと見え、求道の前にドツカと坐り、

高姫「ホツホホホ、お前もヤツパリ氣違だな、最前から聞いて居れば此處は幽界ぢやと云つたが、それがテンで間違つて居るぢやないか」

求道「現界なれば太陽も上り、月も輝き、夜になれば星もきらめく筈だが、晝夜の區別もなく、こんなうす暗い世の中を、お前さまは現界と思ふてゐるのか、よ

く考へて御覽なさい」

高姫たかひめ「ホホホホ、何とマア分らぬ盲だこと、餘り人民の精神が曇り切つて居るの
で、邪氣濛々と立上り、日月星辰の影も見えない所まで曇つてゐるのだよ。それ
だから系統の靈、義理天上の生宮が底津岩根の大ミロクさまの神柱として、此世
を光明世界に致さうと苦勞を致して居るのぢやぞえ。お前も修験者と見えるが、
何を修行してゐるのだい。一時も早く此生宮の申す事を聞いて、神様の御用を勤
め上げ、天晴功名手柄を現はして、死しては神に齋られ、生きては世界の太柱と
なり、名を末代に残す御用を致したら何うだい。斯う見えても此高姫は天地一切
の事は心の鑑に映つてゐるのだから、申す事にチツとも間違ひはありませぬぞや
求道「ああ困つた女だなア、自分が冥土へ来て八衢に彷徨ひ乍ら、まだ目が醒め
ぬと見えるワイ。自愛心の強い女だなア、どうかして救ふてやる工夫はあるまい
か、惟神靈幸はひませ惟神靈幸はひませ」
高姫「ホホホホ、何とまア没分曉漢許りが揃ふたものだこと、これでは神さまの
御心がおいとしいワイの。人間は神の分靈だ。それにも關らず現界か幽界か見當
のつかぬ所迄、靈を曇らし、どうして之が元に返るであらうか、何程結構な神様

が目の前に現はれて居つても、心の眼の晦んだ者は仕方がないワイ。ああ何處の修驗者が知らぬが、此奴も助けてやらねばなるまい。又一つ苦勞が増えて來た。

コレ、シャル、お前も私の弟子になつたのだから、チツと加勢をしておくれ、何程結構な教をしても器が小さいと這入らぬとみえる、お前位な程度で丁度可い所だ。サア、高姫の代理權を、此修驗者に對して委任する、確りやりなされや」

シャル「モシ、カーネルさま、ウラナイ教の高姫先生の仰有る事を、よツく氣を落付けて聞いて下さいませ。神様の信仰は理窟があつては駄目です。總て無條件でなくては信仰は出来るものぢやムいませぬ」

求道「泥坊の改心が出來た上、眞人間になつてから何なと教を聞かしてくれ、それ迄は何うも聞く譯には行かぬからなア。……コレ高姫さま、お前さまは此求道居士に旗を卷いたとみえるなア。それでは生宮とは申されますまい」

高姫は此言葉を聞くや否や、非常な侮辱を與へられたやうに感じ、眉を逆立て、

又もや求道が前に詰めよつて鼻息荒く、

高姫「コレ修チャン、お前は物の分らぬ人だな。人間は天地の花、ミクロコスモ

スノぢやぞえ。何事も宇宙一切腹に呑み込んで居らなくてはならぬ筈の人間が、
サツパリ精靈を曇らして、癡狂癡呆となり、日月の光も見られぬ所迄墮落し、憐
な状態に陥つて居るのだから、せめて神の道に目醒めた者が、此惨状を救はねば
なりませんまい。お前も修験者だと云つて法螺を吹き廻つてゐるが、底津岩根の大
ミロク様の一厘の仕組が分つて居りませんか。人間は何うしても神に次いでのも
だから天晴功名手柄を現はして、天下國家の爲、お道の爲に千騎一騎の大活動を
なし、芳名を天下に輝かし、名を末代に傳へるべき者だ。それが出来ぬやうな事
では人間とは申しませぬぞや。チツと胸に手を當てて考へてみなさい」
求道「人間は只神様の御道具になれば可いのだ。世間愛や自愛の心を拂拭し、何
事も惟神のまにまに活動するのが、人間と生れた所以だ。お前さまの云ふ事は何
處とはなしに、フアラシーがあるやうだ」
高姫「お前は義理天上の生宮に對し、自愛心だの、世間愛だのと譯の分らぬ屁理
窟をツベコベ仰有るが、よく考へて御覽なさい。人間は此世に神様の御餘光を戴
いて生存する限りは自愛心がなくては、一日だつて生存する事が出来ませんまい。

人には肉體維持の責任がありますよ。一日でも結構な月日を送らして戴き、神様の生宮として、千騎一騎の活動をせなくては、濟まぬぢやありませんか。どうしても人間は天地經綸の司宰者ですよ。何故自愛心や世間愛が、それ程お前は、怪惡なもの様に、又兇鬼の所作の様に云ふのですか。本當にお前の言ふ事は人間界には通用せない。屁理窟だ』

求道 『人間が世に在る時は自愛に就ては毫も顧慮する所がない。只其外分に現はれた矜高の情、所謂自愛なる者が、何人と雖も、之を外面から明瞭と伺ひ得らるるが故に、只之を以て、自愛の念としてあるものだ。そして又自愛の念が右の如く判然と表に現はれる事がなければ、世間の人間は之を生命の火と信じ、此念に驅られて種々の職業を求め、又諸多の用を成就するものと信じてある者だ。併し乍ら人間が若し其中に於て、名譽と光榮とを求め、事が出来なければ、忽ち心が萎靡し了るものと思つてゐる。故にかかる自愛心の深い人間は他人に仍つて、又は他人の心の中にて尊重せられ、賞讃される事がなければ、誰人能く値あり用ある行爲をなし、自ら衆に秀れむとするものがあらうか。そして人間をして斯の

如く働かしむるのは其光榮と尊貴とを熱望する心、所謂自愛に仍るものではないかと云つてゐる者許りだ。かくて世間には専ら地獄に行はれる愛と、人をして地獄を作らしむる者は愛我の自體なる事を知らない者が多いのだ。お前さまの仰有る事は要するに、今言つた様な考へより一步も外へ出づる事が出来ないのだから、ヤツパリお前さまの仰有る事は何うしても神の言葉とは聞えませぬよ。第一神の教を奉ずる者は申すに及ばず、人間と生れた以上はどうしても愛我の心を放擲しなくては天下救済の神業は勤まりますまい。自愛心のある間は、如何に善事を行ふとも、それはヤツパリ偽善ですよ。此求道も名利の巷に奔走し、バラモン教のカーネルとして尊貴と名譽を夢みて居つた者ですが、三五教の教を悟ると共に、自愛や世間愛に離れ、斯うして神の爲に働かして頂いて居ります。高姫さまも神の爲に盡して、出世をせうとか、或は出世をさしてやらうとか、思つたり仰有る間は眞正の信仰とは申せません。又眞の愛と云ふ事も出来ません。能く胸に手を當てて貴女の心の鏡をマ一度覗いて御覽なさい」

高姫 「ホホホホ、何とまあ、ツベコベと理窟は甘いものですな。何程國の爲、世

の爲だと云つても、自分を棄てて國家のため世人の爲に盡す者は、實際の所はありませぬ、又有り得可らざる事せう。此高姫の明かな心の鏡には嘘偽りは一つも映りませぬぞや。愛我心がいけないと、お前さんは今言つたが、自分の體は決して自分の物でない、皆神様の御體ぢやありませんか。三五教の教にも神を愛する如く人を愛し、吾身を敬愛すべしと出て居るでせう。吾身を愛するのは所謂神様を愛するのだ。此心が神愛ともなり、自愛ともなり愛我心ともなるのだ。それを前には只一口に愛我心が悪いと仰有るが、今日の世の中を能く考へて御覽なさい。日々の往復文書にも……氣候不順だから随分御自愛專一に祈ります……と書くぢやありませんか、天下國家のために最善を盡し、社會の爲に努力して芳ばしき名を萬世に傳ふるのは、人間としては最上至善の行ひでムいませう。お前だつて、修驗者に歩いてゐるのはやはり愛我の爲だらう。口では立派な事を言つても、言心行一致は中々出来ませぬぞや。體が資本だと言ふ事がある。如何なる善事をなすにも、肉體がなくては出来ませぬ、さすれば其肉體をどこ迄も可愛がらねばなりませんまい」

求道「私の愛我と言ふのは自分のみよからむ事を希求する意思を指すのである。愛我心の強い人間は、他人のよくなる事を願ふのは只自分に利益をもたらす時のみ限つてゐる。故に自愛を以て主としてゐる者は或はチャーチ或は國家、又は如何なる人類の團體に對しても、之が爲に利福を願ふ事もなく、又自分の名譽、尊貴、光榮の爲に非ざれば、他に向つて決して仁恵を施す事をせない。若し之等愛我的人間が他の爲に用を遂ぐるに當つて、其中に以上述べた如き自利と相反するものがあつた時は直ちに失望し、自暴自棄して……ああ吾々は之丈努力しても、果して何の益があるだらうか、何が故に吾々は此様な事をなす可き義務があるか。又果して吾が爲に何等の利得を生ずるであらうか……と云つて、放棄し、自己利益以外には何事もなさない。夫れ故に愛我の念を深く持する者は神様のチャーチを愛せず、國家社會を眞に愛せず、又御用を愛する事なく、只自己のみを愛するものである。例ば自分の主張する教を無條件に聽從する者の多からむことを願ひ、自分を尊敬する人間のみを集め、少しにても反抗的態度を執る者に對し、目をつり上げ、顔色を變じて憤怒の情を現はす如きは、自愛の最甚だしいもので、

せう。斯の如き態度を執る人は、何れも生き乍ら地獄に籍を置いてゐる妖怪的人物です。高姫さまは生宮と仰有る以上は、決して自分を尊貴しない者を威喝したり、自分の頭使に盲従しない者を憎悪したり嘲罵するやうな地獄的行爲はなさいますまいと信じて居ります。愛我心の強い人間は其所主の愛より起來する歡喜悅樂は、即ち其人間の生涯をなす所以のものだから、斯の如き者の生涯は所謂自愛の生涯です。自愛の生涯とは即ち其人間の我執の念から發生てくる生涯である。故に其自體から見る時は、我執、愛我の念慮は決して善と云ふ事は出來ぬものだ。自分に盲従し、隸屬する者のみを愛する者を、又特に自分の子孫や朋友知己に限り愛せむとする者は、結局自愛の心です。自分と行動を一にする朋友知己や意中の人のみを偏愛し、自分と行動を共にせざる者及自分の意志に合はざる者を愛せないのも自愛であつて、眞の神愛ではありません。自分の黨派を愛し、自分の部下のみを愛する事、殆ど自己の如くなし、歡喜するのは、自分をその中に包有してゐるが故である。自愛心の人間が所有と稱する物の中には、總て彼等を賞揚し尊敬し阿諛する者をも含んで居るのだ。之が所謂地獄愛だ。高天原に於ける眞

の愛に比ぶれば、實に天地霄壤の差異がある、自愛と世間愛とは所謂地獄の愛であつて、高天原の愛は天國の愛である。天國に於ては用の爲に用を愛し、善の爲に善を愛して聖團の爲、國家の爲、同胞の爲に其身を空しうして、實踐躬行するものです。之を稱して神を愛し、隣人を愛すると云ふのである。貴女は決してさう云ふ様な自愛心をお持ちになつて居らうとは的確には信じませぬが、世の中に澤山現はれてゐる神柱とか、生宮とか、豫言者とか稱へらるる人間の中には、随分自愛心の強い偽善家が多いものです。眞の神の生宮、五六七の太柱たるプロパガンデストならば、一切の御用も一切の善も皆神より來り、そして其中に自分が所愛の對象たるべき隣人あるが故である。され共自分が爲の故に、此等の事を愛するは、之をして己に服従せしめむが爲、即ち之を僕婢とし、或は部下として愛するものである。故に世間に澤山ある贗神柱は何れも愛我のみに住するが故に、自分のエビスコーバルしてゐるチャーチの爲とか、國家同胞の爲に服事せむ事を願ひ、そして自分は傲然として尊貴を誇り、之に服事することを願はないものです。神の生宮、太柱などを眞向に振かざし、教會、國家、同胞等の上に卓立し、

之をして己が脚下に居らしめむと焦慮するものです。それ故人間は愛我心の除れない限りは、自ら高天原の天國に遠離するものだ。何故ならば高天原の愛から遠ざかるからである』

高姫「そら、そうです共、世の末になりますと、贗豫言者、贗救ひ主、種々雑多のスフエクスが現はれて、世界の愚な人間を魔道に引入れようと致すものです。盲聾に等しき人間は至粹至純なる五六七神政の太柱、義理天上日出神の生宮を認識する明なく、玉石混淆して正邪の判別を、ようつけないのだから、實に此生宮も迷惑致します。誠の者は目薬程もないと、神さまが仰有いますが能うしたものです。此高姫はお前の眼力で御覽になれば分るでせうが、自我のやうに見えても決して自愛や地獄愛を喜ぶ者ぢやありません。餘り宏遠な教理を初めから没分曉漢に諭すと、却つて取違ひを致すに仍つて、最前もあの様に自我心を主張したのだが、お前さまの様に比較的分つた人なら、先づ上根の部だ、今迄言うたのは小乗部だ。之からお前の人格を認め、紳士的態度で大乗部で説いて上げませう。コレ、其處に居る四人の連中、之から第一靈國の教を説くのだから、下根の精靈に

は頭が痛み胸が苦しうなるかも知れないが、そこを辛抱して聞くのだよ。そすりや結構な御神徳が戴けますぞや。底津岩根の大彌勒様の御用を致してゐる此高姫は、言ふ迄もなく高天原の愛善の徳に居るのだから、用の爲に用を愛し、善の爲に善を愛して、心の底から之を行ふ事を唯一の樂みとなし、聖團のため、國家社會同胞の爲に日夜これを實踐躬行してゐるのだ。それだから五六七大神が自分の至粹至純の行ひを御覽遊ばし、神様の方から、生宮としてお降り遊ばしたのだ。併し乍ら餘り靈の光明が烈しいので、下根の人間にはチツと懸隔が遠すぎて、正體を現さうものなら、忽ち柝麵棒を振り、逃げて歸るに仍つて、精靈相應に變化て、説法をしてゐるのだよ。神様は靈相應と仰有るのだから、豚に眞珠を與へるやうな馬鹿な事は出来ませぬからなア。高姫が所主の愛は即ち彌勒大神の所主の愛だ。お前等の様に吾れよしの精神で、用を行ひ、善をした所が、ヤツパリ駄目だ。それは或一方に何か條件を求めてゐるのだから、眞の愛は無條件でなくては駄目ですよ。之を自愛心と申しますぞや。自愛心の者は自ら大神の御神格より遠く離れ、従つて高天原の神國から離れて了ふものだ。自分の方から求める所の愛

は我執がしふの念ねんに導みちびかれて居ゐるのだ。其我執そのがしふの念ねんといふのが、所謂いはゆる悪あくといふのだ。悪あくは又また一名地獄いちめいぢごくといひますぞや。三五教あななひけうの變性女子へんじやうによしの靈みたまは世間せけん悪あくの映像えいざうだと、同教どうけう幹部かんぶのお歴々れきれきが主張しゆちやうしてゐるだらうがな、つまり悪あくといふのは自愛じあいと世間せけん愛あいに失しつする者ものを言いふのだよ。お前まへも之これから此修驗者このしうげんじやの仰有おつしやる事ことを門口かどぐちとして靈みたまを研みがき、奥おくの奥おくのドン奥おくを究きはめて天晴御用あつぱれごようの爲ための御用ごようをしなさい。及およばず乍ながら、此高姫このたかひめが力ちから一杯いっぱい、教をしへて上あげるから……、併しかし乍ながら教をしへて貰もらうてからの改心かいしんは駄目だめだぞえ、心こころの底そこから此高姫このたかひめを生宮いきみやと尊敬そんけいし、且かつ深く信しんじ、大神おほかみに接せつする態度たいどを以もつて仕つかへなくくてはお神徳かみけを取外とりはずしますよ』

と舌鋒ぜつぽうを甘うまく四人よにんの方ほうへ向むけ、俄にはかに求道きうだうの深遠しんえんなる教理けうりを自分じぶんの物ものとなし、得々とくとくとして受賣うけうりりをやつてゐる。實じつに當意即妙たういそくめう、酢すでも蒟蒻こんじやくでも行ゆかぬ妖婆えうばである。

ベル『オイ高姫たかひめさま、求道居士きうだうこじの……俺おれの先生せんせいがお出いでになつてから、俄にはかに心氣しんき一轉いつてんしたぢやないか、随分ずいぶん模倣もほうに妙めうを得えてゐる婆アばアさままだなア』

高姫たかひめ『そら何を言いふのだ、頑愚度ぐわんぐどし難がたき代物しろものだな。人見にんみて法ほふを説とけと云いつて、お前まへの様やうな「ガラクタ」には又またそれ相應さうおうの教をしへをするのだ、耳みみが痛いたからう。此高姫このたかひめは

求道さまに教へてゐるのだ。お前達が彼此云ふ資格はない、スツ込んでゐなさい」
ベル「ヘン、馬鹿にしてゐるわい、イヒヒヒ」
高姫「コレ求道さま、お前は法螺貝を吹く丈、どこ共なしに氣の利いてゐる所がある。高姫の云ふ事も耳へ入るだらう。サ、之から底津岩根の大彌勒様のお言葉を取次いで上げるから、疑はずに聞きなされや。第一世の中に何が悪いと云つても、自愛心即ち愛我の念慮位卑しいものはムいませぬぞや。己を愛すること、神を愛するに勝り、世間を愛する事高天原を愛するに優る様な行り方は駄目ですよ。何事も神第一と致さねば、人間は神の生宮と申す事は出来ませぬぞや。人間が善を爲すに當つて、其中に假令毛筋の横巾でも、自愛の心を混じてゐたならば、忽ち我執の念に陥り、諸惡の地獄に突入致しますぞや。何故なれば斯様な人間は、此時善を離れて自分に向うて居れ共、自分を離れて善に向ふ事がないからだ。さういふ人間が如何なる善をする共、其善の中には自我愛の面影のみを止め、神格の面影をチツとも止めてゐないものだ。それだから此高姫が天の命令を受けて、苦集滅道を説き、道法禮節を開示してゐるのだから、耳の穴を宜く掃除して眞面目

に聞きなさいや。天地の間は皆不思議なものだ。到底人間の細工や知恵で解決がつくものでない。只神を能く信じ能く愛しさへすれば、それで結構だよ。求道さま、どうです、高姫の靈の因縁は之でチツと分りましたかな
求道は「アハハハハ」と笑ったきり、矢庭に法螺を口に當て、ブウブウと吹立てた。それと同時に高姫の館は次第に影うすくなり、遂に陽炎の如く消滅したりける。

ベル、ヘル、ケリナの三人はフツと氣がつき四邊を見れば、エルシナ川の川縁に一人の山伏に救ひ上げられてゐた。そしてシャルは何程人工呼吸を施したり、種々と魂返しをやつてみたが駄目であつた。流石悪黨のベルも此時現界に甦つたのは、兇黨界の高姫に籠絡されず精神を取られなかつたからである。シャルはベルに比ぶれば稍善人であるが、現界に未だ數十年の生命が残つてゐるにも拘らず、蘇生せなかつたのは、彼れの精靈が既に高姫の教に信従し、固着して了つたからである。又求道居士は只一人法螺貝を吹き乍ら、宣傳の爲此川邊にふと現はれ來り、朝早くから四人の死體を認めて身を跳らし淵に飛び込み、救ひ上げ、魂返し

の神業を修したのである。之より求道居士はベル、ヘルを従へ、ケリナを送つて
テルモン山の小國別が館に進み行く事となつた。ベルは中途にヘルと争論を起し、
一時姿を山林に隠したのである。

(大正一二・三・一六 舊一・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

第九章 我執(一四三九)

求道居士が息をこめて吹き立てた法螺貝の音にベル、ヘル、ケリナの三人は此
場より煙の如く姿を消した。求道居士の影もいつしか消えて幽かに法螺の音が遠
く聞えてゐる。高姫はシャル、六造の二人に向ひ、
高姫「コレ、シャル、六造の兩人、何と高姫の神力は偉いものだらうがなア。餘
り我が強いに仍つて、義理天上様が勘忍袋をお切らし遊ばし、ホンの一寸お睨み
遊ばすと共に、あの法螺吹もベル、ヘルの兩人もハイカラ女も、皆一度に煙散霧

消跡しょうとせう型がたもなくなりにけり……といふ悲惨ひさんな有様ありさまだ。之これを見て改心かいしんをなされ。六ろくさんは又唾またおしか何かなにのやうに一言ひとこともいはずに、今迄いままでどこに居をつたのだえ」

六造ろくざう「へー、餘あまり法螺ほらの貝かひが恐おそろしいので、一寸ちよつとかはや廁なかの中なかへ隠居いんきよして居をりました。随分ずいぶん強つよい奴やつがやつて來きた者ものですな。それにしてもベルの奴やつ、私わたしをライオン川がはに放ほり込こみやがつた天罰てんばつで煙けぶりの如ごとく消きえて了しまつたのは小氣味こきみのよいこつてムごいます。

之これも全まったく高姫たかひめ様の御神力ごしんりきの致いたす所ところと、有難ありがたく感謝かんしゃを致いたして居をります」

高姫たかひめ「それだから神かみに凭もたれてさへ居をりたら神かみが仇かたきを討うつてやらうと仰おつしや有あるのだ。

今迄いままでのヤンチャをスツカリ改良かいりやうして、何事なにことも此生宮このいきみやの申まをす通とほりにするが可よいぞや」

六造ろくざう「ハイ、何でも致いたしますが、併しかし何なんだか氣分きぶんが悪わるくなつて來きました。一杯いっぱいおごつて貰もらいませぬと、元氣げんきが付つきませぬワ」

高姫たかひめ「エーエ付け上あがりのした、お前まへはそれだから可いかぬのだ。お前まへの仇かたきをあとほの通とほり消滅せうめつさしてやり、結構けつこうな教をしへを聞きかして居あるのに、一杯いっぱい吞のませなんて、何なんと云いふ厚あつかましい事ことを云いふのだいなア」

六造ろくざう「イエ私わたしは酒さけを吞のましてくれと云いつたのぢやムごいませぬ。お前まへさまの持もつて

居る出刃を懐に吞まして欲しいと云つたのです。どうか一口頂く譯には行きませぬかな」

高姫「ならんならん、出刃のやうな兇器を持つて、何うする積だい、又出刃龜にでもなる積だらう」

六造「イエ、出刃龜ぢやありません、出刃六になる考へです。之を以て風呂屋の障子を四角に切り、三助やおさんの活動を覗く考へです。三助とおさんと寄れば六でせう。そこへ六さんが這入ると六六三で十五夜の満月になります。お前さまは最前も小聲で唄つてみたでせう……十五夜に片割月があるものか、雲に隠れてここに半分……と聞きましたよ。十五夜の片割月は餘り目出度くありません。ぬから、私が之から出刃六となり、三五の月となりて第一靈國へ上り、月の大神様に、お前さまの今の有様を報告せうと思つてゐるのだ。どうです、名案でせう」

高姫「明暗も顯幽もあるものか、お前の靈は暗の暗だ。それだから暗本丹と人に云はれるのだよ。六でなしだから、名迄六造だ。どうで月の國へ行けるやうな代物ぢやない。六道の辻代物だ。イヒヒヒヒ」

六造「コリヤ高、俺を何方と心得てるンでえ、エエン。今迄は法螺つ吹先生が来よつたので、俺も聊か面喰つてすつ込んでゐたのだが、モウ斯うなりやべたものだ。誰憚る者もなし、婆の一匹や二匹は俺の自由自在だ。サア有金をスツパリ渡すか、さなくば、衣類一切をここへつん出して、あやまるか、どうだ。汝の槍は俺が、實の所はボキボキに折つといたのだ。ゴテゴテ申すと命がないぞ」

高姫「コレ、シャル、お前は私の家来ぢやないか、何をグツグツしてゐるのだい。サ、此出刃を貸すから、負ず劣らず、此奴に對抗して取つつめてやりなさい。善を助け悪を懲すは神の道だ。こんな者が世の中にウヨウヨしてゐると、世界にどれ丈害を流すか分らない。サア、之を確り握つて強壓的に出るのだよ」

シャル「高姫さま、チツト夫れは自愛ぢやありませんか、私は何だか地獄の行り方のやうに思へてなりません、威喝や憤怒や復讐などは、神の國には影さへもないぢやありませんか」

高姫「エーエ、氣の利かぬ男だな、正當防衛といふ事を知つてゐるか。何程誠の道だと云つても、ジツとして居つたら、此高姫の生宮がどんな目に合はされま

いものでもない。此生宮は大神様の大切なお道具だから、それを守護するのはお前の役目だ。サアお前の手柄を現はす時だ。かういふものの此高姫は、六のやうな者が千匹萬匹束になつて来たとして屁とも思つて居ないが、お前の弟子入りした初陣の功名に、此奴をとつめさしてなるのだから、生宮様のお馬の前の功名だ。サア、結構な御神徳を頂くのは今だぞえ。エーエ、慄つてゐるのかいな、何だ氣のチヨロい。そんな事で、よう今迄盗人が出来たものだなア

六造「ワツハハハハ、オイ、シャル、其ザマは何だ。随分體が微細にワク……ワクと動いてゐるぢやないか、エへへへへ」

シャル「オイ六、俺は決してお前に抵抗する意志はないのだから、俺には決して危害を加へないやうにしてくれ、そして高姫は何から何まで見えすく生宮だから、天下の爲に之を傷付けるやうな事があつては大變な損害だよつて、何卒、そんな無理な事を言はずに、トツトと歸つてくれ、頼みだからなア」

六造「オイ高、ツベコベと人の受賣許りしやがつて、日出神の生宮を標榜してゐるが、一遍其出刃を此方へ渡せ、實の所はお前の肚を斷ち割つて、日出神の出現

を願ふ積だ。日出神もこんな肉體に這入つてムつてはお氣の毒だからなア」

高姫は稍慄ひ乍ら、ワザと空元氣を出し、

「此生宮を何とお前は心得てるのか、ヘグレのヘグレの武者、或時は天に蟠まる龍ともなり、或時は蝶螭となつて身を潛め、千變萬化の活動をいたして、此世を守護致す彌勒様の太柱だ。左様な事を申すと神罰が當つて、忽ち地獄行を致さねばならぬぞや」

六造「何だか俺はお前の面を見るとムカついて仕方がないのだ。地獄へ墮されうが、そんなこたア、構ふものかい。地獄へ墮ちるのが厭だと云つて、心にもないおベツカを使ふのは、自分の潔しとせざる所だ。そんな心になれば、お前の最前言はれたやうに自愛心になるのだから、放つといて呉れ。それよりも一旦言ひ出したらば後へは引かぬ六造だ。サア、キレーサツパリと、何もかも渡して貰ひませう」

シャルは一生懸命に、

「義理天上日出神様、一時も早く此六造を改心さして下さいませ。生宮様の御難

儀ぎでこゝろムこゝろいます。惟かむ神な靈ら幸たまはちひませせ』

と小聲こゝろで祈いのつてゐる。高姫たかひめはツト立たつて此家このやを逃にげ出だし相さうな様やう子すが見みえた。六ろくは背後うしろからグツと首筋くびすぢを引ひ掴つかみ、力ちからに任まかして引倒ひきたふした。シャルは之これを見みて、吾師わがしの一大事いちだいじと、矢庭やにはに六ろくの胸倉むなぐらを取とり、力ちから限かぎりに締しめつけた。不思議ふしぎや六ろくはスボツと脱ぬけて三間さんげん許ばかり後うしろにつつ立たち、大口おほくちをあけて、

六造ろくざう『アツハハハ』

と笑わらつてゐる。そこへ何處どこともなしに宣傳歌せんでんかの聲こゑが聞きえて來きた。此聲このこゑを聞きくより六ろくは、天井てんじやうの窓まどから煙けぶりの如ごとく逃出にげだして了しまつた。高姫たかひめはヤツと安心あんしんし、又またもや法螺ほらを吹出ふきだした。

高姫たかひめ『オホホホ、コレ、シャル、日出神ひのでのかみの生宮いきみやの御神德ごしんとくは偉えらいものだらう。あの通りとほ御神德ごしんとくに恐おそれて消きえて了しまふのだからな』

シャル『それでも、貴方あなた、大變たいへんに體からだがフラックツアールしてゐたぢやありませんか。此このシャルは高姫たかひめさまが恐おそれて精神動搖せいしんどうえうを遊あそばしたのだと思おもひ、隨分ずいぶん心配しんぱい致いたしましたよ』

高姫たかひめ「ホホホホ、私わたしがフラックツアールしたのは一厘いちりんのお仕組しぐみを現あらはしてみたのだよ。彼奴あいつは影かげの代物しろものだから、此方こちらの言いふ通りとほになるのだ。影かげは形かたちに従したがふものだ。日ひの照てる所ところへ出でて、體からだを動うごかして見みなさい、キツと影法師かげほふしが動うごくだらう。さうだから高姫たかひめが動揺どうえうして見みせたのは、影人足かげにんそくの六公ろくこうをゆり散ちらす神かみの御神法ごしんぱふだ。何なんと御神力ごしんりきといふものは結構けつこうなものだらうがなア」

シャル「成程なるほど矢張やつぱり貴女あなたは、チエンジエールの術じゆつに長たけてられますな。それでヘグレのヘグレのヘグレ武者むしやといふ事ことが合點がってんが參まゐりました。イヤもう大變たいへんな御神ごしんと徳くを戴いたきました。サンキューサンキュー」

高姫たかひめ「コレ、サンキューとは何なにを云いふのだい。六ろくが歸いんだと思おもへば、又また三九さんきうのだと、三九さんきうの數かずは十二じふにぢやないか、何なんと云いふ意味いみだい。ハツキリと聞きかして貰もらひませう。チエンジエールだの、三九さんきうだのと、鳥とりのなくやうな聲こゑを出だして……神かみには分わかりませぬぞや」

シャル「別べつにお前まへさまの御考おかんがへ遊あそばすやうな深ふかい意味いみがあるのぢやムいませぬ、【サンキュー】と云いつたのは有難ありがたうと感謝かんしゃしたのでムいます。チエンジエール

と云つたのは、何にもよく變げ遊ばす尊い神様だと感心したのでムいます」

高姫「ウン成程、そんなら之から精出して、私をチェンジエーブルの大神様とい

ふのだよ。サンキューも許しますから、精出してサンキュー サンキューと云ひ

なさい」

シャル「チェンジエーブル大神様、サンキュー サンキュー、サンキュー サン

キュー サンキュー、モ一つサンキュー まだサンキュー、… サンキュー サン

キュー サンキュー、モシモシ之でお氣に入りますかな」

高姫「エーエ、過ぎたるは及ばざるが如しといふぢやないか、サンキューも可い

かげんにしときなさい、融通の利かぬ男だなア」

シャル「コルブス コルブス、サークイ サークイ」

高姫「又分らぬことを言ふぢやないか、コルブスとは何の事だい」

シャル「ハイ、コルブスといふ事は、死體といふ事です、サークイといふ事は臭

いといふ事です」

高姫「エー、増長するも程がある。何程したいと云つても、ヘン、お前等に相手

になる生宮ぢやありません。そして臭いとは、何といふ無禮な事をほざくだい。夫れほど臭ければ、そこに居つて下さるな」

シャル「實の所は死體のやうな臭い匂ひがしたといふのです。それは高……オツトドツコイ高い窓から脱けて歸にやがった六の事ですよ。本當に臭い奴でしたな

ア」

高姫「お前の云ふ通り鼻持のならぬ代物だつた。マアママ惡魔が拂へて結構だ。

サア之からお前は何事も私の云ふ通りに致すのだよ」

シャル「一旦貴女に體を任した以上は何でも聞きますが、併し乍らかうして男女が二人一つ家に住居をし乍ら、兩方がセリバシー生活をやつてゐるのも無駄ぢや

ありませんか。何とかそこは妥協の餘地がありさうなものですなア」

高姫「ホホホホ、チツトお前のスタイルと相談して御覽。そんな事云へた義理ぢやありません。年から云つても三十計りも違ふぢやないか、せうもない事を云つて生宮をおだてるものぢやありませんぞや」

シャル「お前さまは神様のアボツスルだから、到底私のやうな俗人の側へおより

になつても神格が汚れるでせう。無理とは申しませぬ、併し乍ら肉體上から言へば、貴女も私もウルスヴルグは皆神から發してゐるのですから、靈は兔も角として、さう輕蔑するものぢやありませんか

高姫「ウルスヴルグなんて、又怪體な事を言ふぢやないか、どこ迄もうるさく口説くといふのかなア。そんな野心はやめたがよからう。お師匠様の生宮に向つて、ちと無禮ぢやないか」

シャル「貴女は何處までもセリバシー生活を續けて行く考へですか、四十後家立つても五十後家立たぬといふぢやありませんか。何程表面で立派に男嫌を標榜してる女でも、何時とはなしに其インスチンクトが現はれて、遂には操を破るのが避く可らざる女の境遇ですよ。さうだから露骨に素直に此シャルが直接交渉を開いたのです。私だつて八夕の友達が皆お前さまの説に反抗するにも關らず同情を表し、お味方になつたのも、そこにはそれ、一つ曰く因縁がなくちや叶ひますまい」

高姫「エー、汚い、インスだとか、チンクトだとか、碌なこた言はせぬのぢやな

いか、そんな事を申すと、風俗壞亂になりますぞや、チツとたしなみなされ」

シャル「あああ、サツパリ サツパリだ。男と生れて而もこんなお婆さまに、エツ
パツパをくはされちや、どうして男の顔が立つものか。エー飽く迄も初志を貫徹
するのが男だ。コレ高姫さま、何と云つても駄目ですよ。何程お前さまが神力が
強いと云つても、肉體と肉體と争へば、到底男には叶ひますまい」

高姫は嚴然として威儀を正し、

「コリヤ、シャル、何と心得てゐる。此肉體は勿體なくも、時置師神、齋苑の館
の總務をしてムつた空助様の奥方だぞえ、何と心得てゐるか」

シャル「へー、さうでムいましたか、何でも空助さまといふ宣傳使は偉い神力が
備はつてゐると聞いて居りましたが、その空助様は今何處にゐられますか」

高姫「お前は又それを尋ねてどうする考へだ」

シャル「別に何うせうと云ふ考へもムいませぬが、一遍お目にかかつてみたいの
です」

高姫「オホホホホ、お目にかかりたければ、モツと靈を研きなされ、空助様は神

變不思議の術を使つて、雲に乗り、天へ上られたのだ。天では時置師神様が天人の靈を守護遊ばされ、地では高姫が汚れた靈の洗濯をしてゐるのだ。何れ下つてゐるに違ひないから、其時に目の眩まぬやうに、何事も高姫の申す通り、神妙に御用を致すのだ。今後は一切口答へなどしてはなりませぬぞや、そして女などは心を寄せることは出来ませぬぞ。お前も立派な宣傳使になつた以上は、私が相當の女房を選んで與へてやるから、それ迄辛抱なさい」

かかる所へ美妙の音楽聞え、美はしき三十前後の天人が現はれ來りぬ。高姫は見るより仰天し、アツと計りに其場に倒れたり。シャルは目を閉ぎ、床上に喰付いて慄うてゐる。天人は言葉靜かに高姫の耳許にて、

天人「吾こそは中間天國のエンゼル文治別命でゐる。其方は高姫ではゐらぬか」

此聲に高姫は何となく力を得て、目を開き、目映ゆ相な顔をし乍ら、

高姫「お前さまは一寸氣の利いたエンゼルとみえるが、空助さまのお使で來たのかい。底津岩根の根本の彌勒の生宮、此高姫にお前は何か御用があつて來たのだなア。オホオホ、何とまあ若い男だこと、隨分天國では、それ丈美しいと、女

にもてるだらうな」

文治「高姫殿、拙者をお忘れになりましたか。小北山の受付を致して居った文助

でムるぞや」

高姫「ナニ、お前があのおの盲の文助かい、ホホホホ、そんな嘘を云ふものでない。

そんな立派な風をして化けて來ても、此日出神の二つの目で睨んだら、違ひは致

しませぬぞや。お前は大方中界の魔神だらう、今も今とて此シャル奴、せうもな

い事を言ひよる也、又中界の魔神迄が高姫の姿にラブして下つて來ても、いつか

ないつかな、動きませぬぞや。容貌や若い年に惚るやうな柔弱な高姫とは、へ

ン、チツと違ひますぞや。男とも女とも分らぬやうな面をして騙しに來つて、そ

んな事に乗るやうな生宮ぢやムいませぬぞえ。サアサア諦めて、トツトと歸つて

下さい」

文治「高姫殿、文助に間違はムらぬ、拙者も暫く中有界に於て修行を致し漸く諸

天人の教を聞いて心を研ぎ、今は此通り第二靈國のエンゼルとなり、中有界地獄

界を宣傳に廻つて居ります。お前さまも早く悔い改めて、この中有界を脱出し、

早く天國へ昇つて下さい。此儘にしておけば、貴女は地獄へ墮ちるより道は広いませぬぞ。生前の交誼に仍つて、一應御注意の爲に現はれて來たのです」

高姫「ホホホホ、ようまア仰有いますワイ。第一靈國の天人の靈の高姫の光明がお前さまには見えませぬかな。神は至仁至愛だから現界へ現はれて衆生濟度を、糞糟に身をおとしてやつてゐるのだ。文助なぞと、そんな詐りを言つてもあきませぬぞや。今に正體を現はしてやるから、其積でゐなさい、オホホホホ、油斷も隙もあつたものぢやない」

と云ひ乍ら兩手を合せ、

高姫「底津岩根の彌勒の大神様、義理天上日出神様、末代日の王天の大神様」と祈り出した。文治別のエンゼルは高姫の餘りの脱線振りに取付く島もなく、傍に倒れてゐるシャルを揺り起し、

文治「お前はバラモンのシャルといふ男ぢやないか。こんな所に何時迄居つても仕方がない。まだ現界に生命が残つてゐるから、今の中に、サア早く歸つたがよからう。グツグツしてゐると肉體が腐敗して歸ることが出来なくなりますぞ」

シャル「ハイ、私は此通り肉體を持つてをります。此外にまだ肉體があるとは合
點が参りませぬ。そんな事を云つて、騙さうとなさつても、高姫さまの片腕とな
つた此シャルは、いつかな 騙されませぬ。そんな事を言はずに、何卒
歸つて下さいませ。あとで高姫様の御機嫌が悪いと困りますから……」
文治「お前達は何うしても目が醒めないのかな。又高姫さまも高姫さまだ。中有
界に彷徨ひ乍ら、ヤツパリここを現界と思つてゐると見えて、私の姿を見て化物
と疑つてゐるらしい。ああ元の肉體になつてみせてやりたいが、さうすれば忽ち
神格が下つて、再び今の地位になるのは容易な事ではなし、どうしたら助けるこ
とが出来やうかなア」
と手を組んで思案にくれてゐる。四邊に芳香薫じ、嚙喰たる音樂の音は切りに聞
え、此伏家の周圍には百の天人が隊を成して取巻いてゐる。高姫は殆んど氣も狂
はむ許りに悶え苦しみ出した。エンゼルはいかにもして高姫を救はむと、天津祝
詞を奏上し、數歌を歌つた。高姫は益々忌み嫌ひ、手足をヂタバタさせ乍ら、裏
口を開けるや否や、エンゼルの間を潜つて裏の禿山を指して、野猪の如く四這ひ

になつて逃げゆく。シャルは此體を見るなり、又もや高姫の跡を逐ひ、數多の工
ンゼルの間を潛り脱け、驅けり行く。

之より高姫は禿山を二つ三つ越え、四面山に包まれた赤濁の可なり廣い沼の畔
に着いた。而して沼の水を手にとり掬うて一生懸命に渴をいやしてゐる。皺枯聲を張
り上げ、

「オーイオイ」

と呼ばはり乍ら、禿山の上から、轉げる様にやつて來たのはシャルであつた。

シャル「ああ、先生、能うマア此處に居つて下さいました、大變な事でございました
たなア。ありや一體何でムいませう。何萬とも知れぬ怖い顔した鬼奴が鐵棒を持
つて家のぐるりを取巻き、厭らしい鳴物を鳴らし、鼻の塞がるやうな匂ひをさし
て攻めかけた時の怖さ、辛さ、生宮さまでさへもお逃げ遊ばす位だから、到底自
分は助かりつこはないと、お後を慕うて此處迄逃げて參りました。モウ追つかけ
て來る氣遣ひはムいますまいかなア」

高姫「ホホホ假令幾萬鬼が來ようとも、そんな事にビクともする高姫ぢやムい

ませぬぞや。之は神の秘密の法に仍つて、あの悪魔をここ迄誘ひ出し、此血の池へ皆放りこむ算段で、ワザとに逃げて来たのだよ。千や萬の鬼に逃げ出すやうな高姫と思つて貰つちや片腹痛いわいの、オホホホホ」
と胸の驚きを隠して、ワザと何気なき態を装ひ笑つて居る。

シャル「高姫さま、そんな強相な事を仰有いますけれど、あの時の貴女のスタイルには随分狼狽のサマがみえて居りました、不減口ぢやムいますまいかな」

高姫「まだお前迄が私を疑うてをるのかい、困つた男だなア。文助の靈だなどと云ひやがつて、化けて來よつたのを看破する丈の御神力があるのだから、到底お前では、此高姫の眞價は分りますまい、マア黙つてゐなさい。而して高姫の事を考へてをれば、成程と、二三日の内には合點がゆくだらう。オホホホ、あのまア怖相な顔はいの。これだから弱蟲を伴れてゐると、足手まとひになつて、本當の神力を出すことが出來ないのだ。お前さへゐなかつたら、あんな奴ア、一人も残さず、最前のやうに煙にして了ふのだけけれど、お前の曇つた靈が邪魔をするものだから、とうとう位置を轉じて第二の作戦計畫をせなけりやならぬ面倒が

起つたのだよ。併し流石の鬼も此處迄、ヨモヤ高姫の神力を恐れて追掛ては來ま
すまい。まあ些と落着きなさい」

斯かる所へ又もや音樂の聲、山の頂より文治別は先頭に立ち、數百人の天人を
從へて降つて來る。

シャル「モシモシ高姫さま、やつて來ました、サア、此處で見事、彼奴を亡ぼし
て下さいませ。私の目では彼奴が鬼に見えたり、又綺麗な天人に見えたりして仕
方がありますねワ……それぞれ、大速度で此方へ下つて來ませうがな、早く準備
をして下され」

高姫「エー、準備をせうと思ふておつたのに、お前が出て來て、せうもない事を
喋り、肝腎の時間を潰さして了つたものだから、惡魔の方が早く來よつたのだ。

ああ此處でも具合が悪い、第三の計畫に移らう」
と言ひ乍ら、顔を眞青になし、又もや次の山を轉けつ輾びつ駆け上る。シャルも
是非なく黒い禪をたらし乍ら、高姫の足型を尋ねて、息も苦しげに跟いて行く。

(大正一二・三・一六 舊一・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

第三篇 月照荒野

第一〇章 十字（一四四〇）

エルシナ川の堤に引上げられ、ビクトル山の修験者求道居士に救はれたベル、ヘル、ケリナの三人はエルシナ川の谷川を遡りパインの木蔭を縫ひ乍ら、やや廣き青野ヶ原に出た。ここには色々の美しき花が咲き充ちてゐる。一同は路傍の平岩に腰打掛け息を休めてゐる。求道居士は數珠を爪繰り乍ら、

求道「天龍虎、王命、勝提、大水日。天龍虎、王命、勝提、大水日」

と繰返し繰返し呪文を唱へた。

ヘル「モシ、修験者様、吾々は貴方のお蔭で命のない所を助けて頂きましたが、今のお経は何だか知りませぬが、頭に浸み渡つて有難い様な氣分が致します。何卒その呪文の御解釋をして頂けますまいか」

求道「あ、よしよし、この呪文はバラモン教の神祕となつてゐるのだ。お前等が水に溺れて絶命れて居つたのを呼び戻したのも此十字の祕法のお蔭だよ。何時もこれさへ唱へて居つたならば、あの様な災難に罹る様な事はチツともない。起死回生諸災除攘の神祕的呪文だ。一つ解釋をするから聞きなさい。」

天龍虎、王命、勝提、大水日。天龍虎、王命、勝提、大水日。

この十字の祕傳は神變不可思議の神徳が顯れ、如何なる願望も成就し、又如何なる災禍も除却することが出来るのだ」

ヘル「どうか其の字の功德に就て御教示を願ひたいものですなア」

求道「ヨシヨシ由縁を聞けば有難い。重ねて言へば猶有難いと云ふ神傳祕法の呪文だから、能く胸に疊み込んでおくが好い。」

抑々、

天てん は高貴かうきたいくわん大官たいくわんの前まへに出でる時とき之これを書かくのだ。又また航海かうかいとせん渡船わたせんの時とき之これを書かいても可いい、
さすれば高官かうくわんには自じ分ぶんの意い志しが完くわん全ぜんに通つうじ且かつ難破船なんぱせんの災わざはひを免まぬれる。
龍りゅう は海河かいかまた又は船橋せんけうを渡わたる時ときに書かいて持もつものだ。又大風雨まただいふううに向むかつて出達しゅつたつする時とき
に之これを書かけば凡すべての海河風雨かいかふううの難なんを免まぬれる。
虎こ は廣野原野深山くわうやげんやしんざんに行ゆかむと欲ほつする時ときに書かくのだ。又山獵またやまれふの時ときとか賊ぞくに出遭であつ
た時ときに書かけばその難なんを免まぬれる。
王わう は悪人等あくにんなどに對たいする時とき之これを書かきて持もつものだ。又不時またふじに應おうずる時とき、裁判さいばんの時とき
之これを書かくのも可いい。屹度神きつとかみの御守護ごしゆごがある。
命みやう は人ひとの家いへにて怪あやしき茶ちや、酒さけ、飲いん食じよくを與あたへられた時ときに之これを書かくのも可いい、又敵またてき
に向むかつた時とき之これを書かいて持もつも可いい。屹度災難きつとさいなんを免まぬれる。
勝しやう は軍陣ぐんぢん竝ならびに萬よろづの勝負しやうぶの時ときに書かく、又賣買またばいばいの時ときに書かくのもよい。
提たい は疾しつ病べいのある家いへに行ゆかむとする時とき、又または諸々もろもろの悪人あくにんの集あつまつて居ゐる所ところに行ゆか
むとする時ときに書かくのだ。屹度神德きつとしんとくが顯あらはれる。
大だい は怪あやしと思おもふ場所ばしよや又淋またさびしき所ところに出いで行く時ときとか、惡病あくびやう、傳染病でんせんびやうの人ひとを見舞みまふ

時に之を書くものだ。

水は案内を知らぬ家に行く時又は酒席に出る時、身構へ、清淨の時、又水論のある時に之を書く可い。

日は萬の祝言や慶事喜悅に關する時、又は病人を訪れる時に書いて持つて居れば相方共に御神徳を頂く事が出来るのだ。是は婆羅門教の祕事中の祕術だから、妄りに人に傳へると濫用する恐れがあるから、固く人に傳ふことを嚴禁されてあるのだ。以上の十字を以て婆羅門十字の大法と稱えるのだ。之を行ふには男は左の手、女は右の手にて刀印にて空書するのだ。又刀印を硯に施して白紙に書して懷中して居るのも結構だ。然し、これより尚尊い事があるのだ。併し乍ら、餘り勿體なくて口に出ることが出来ないから、身魂相應に十字の呪文を空書したり、唱へたりして修行に歩いてゐるのだ」

ヘル「これよりも有難い尊い事とはどんな事でムいますか。何卒序に聞かして下さいませな。私も貴方に助けられて此御恩を返すためには、世界の人間も助けさせて貰ひ度うムいますから」

求道「お前が御神徳を私せず、世界の人間を助けさして貰ひ度いと云ふ誠心があるならば傳授してやらう。一番尊い事と云ふのは天の數歌といつて「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百千萬」と唱へるのだ。之は天地開闢の初から今日に至る迄、無限絶對力の神様が此天地を創造し、神徳を世界に充たし愛善の徳と信眞の光明を吾々人間にお授け下さる神文だ。そして「惟神靈幸倍坐世」と後で唱へるのだ。之に越したる尊い言葉は三千世界にないのだから、よく聞いておきなさい」

ヘル「いや、如何も有難うムりました。お蔭で結構な御神徳を頂戴しました。サンキューー サンキューー」

求道「無駄口を云ふ間があつたら此神文をお唱へするのだ。さうすればどんな事でも忍耐びがついて、天晴神様の御用に使ふて貰ふ事が出来るのだ。併し乍ら歌を歌ふ様な氣持になつて唱へては駄目だから、よく慎んで唱へたが宜しいぞ」

ヘル「サンキューー サンキューー」

ベル「アハハハハナーンだ。龍だの、虎だの、貂だの、鼬だのと勿體らしく仰有

いまして、その又後に商人が大工の様に数字を並べたり、鉋だとか、鑿だとか、笑はしやがるわい。アハハハハ、これ丈け人文の發達した世の中に、そんな寢言の餘り言の様な事を云つて廻る修験者の氣が知れないわ。ウフフフフ」

ヘル「こりやベル、修験者求道居士様は、もとは吾々のカーネル、エミシ様だが、結構な呪文を唱へて俺等を助けて下さつたのに、何と云ふ恐れ多い事を云ふのだ。勿體ないぢやないか」

ベル「ハハハハ貴様も亦軟化しやがつたな。何と云つても壽命のある者は死ぬものかい。八衢で「まだお前は生命があるから歸れ」と云つたぢやないか。別に修験者の力でも何でも無い。此世にまだ生存の力を持つてゐるから生還つたのだよ。そんな馬鹿な事云ふものぢやない。それよりも商賣に勉強した方が何程利益だから分らないわ。これからワールドを股にかけワールドウ（悪胴）を据ゑて泥坊商賣を勉強した方が忽ちお蔭がある。何程十字の祕法を唱へても、一、二、三、四と云つて數へて居つても、一文の金も降つて來はせぬぢやないか。そんな事ア世捨人のする仕事だ。俺等は日々の生活難を凌いで行かむならぬから、そんな陽氣な

事は云つて居れないわ。肉體のある限り食物も攝らねばならず、人間の體は實在物だからヤツパリ實在的物質が何よりも肝腎だ。空々漠々たる無形の呪文が何になるか。馬鹿だなア

求道「ハハハハ、ベルはどうしても分らぬと見えるな。そしてお前はゼネラル様から、あれ丈けのお金を頂いた時に、正業に就きますと云つたぢやないか。それにも拘はらずまだ泥坊をこれからやらうと云ふのか」

ベル「何分人間はパンが肝腎ですから、私のやうな無資産者は、泥坊なつとやもなくちや仕方がありませんわい。何程神を祈つて居つても一片のパンも湧いては來ませぬからな。神様だつて有るとも無いとも、そんな事アあてになりませぬわい」

求道「お前は、さうすると何處迄もアーセイズムを主張するのかな。困つたものだな。人間の力で木の葉一枚だつて出来るものでないと云ふ事を知つてるだらう。さうすれば山川草木を拵へた原動力がなければならぬ筈だ。人間以外の物がなければ此天地は造れるものでない。よく考へて見るが宜からうぞ」

ベル「それは人間が出来ない事は分つてゐます。自然の力で一切萬物が出来て居るのです。その自然を貴方等は神と云ふのですか。貴方等はフテキズムだ。もしも違つたら「ナチュラル」・ワーシップだ。私は神なぞが決して此世に存在するとは思はれませぬわい」

求道「どうも仕方のない男だなア。まアまア緩りと胸に手を當てて考へて見るが宜からう」

ヘル「オイ、ベル、人間は神を離れて一日も此世の中に生きて居る事は出来ないぞ。皆神様のお蔭だ。そんな勿體ない事を云はずに神様を禮拜する氣はないか。

お前もこれから天國に救はれるか、地獄に墮するかと云ふ境目だから、トツクリ求道様のお話を聞いて考へて見たら如何だ」

ベル「ウン、そんなら一つ求道さまにお尋ねしますが、一體神様は此天地の間にどれ丈けむるのですか」

求道「天津神八百萬、國津神八百萬と云つて億兆無數の神様がムるのだ。それぞれお役目を分掌遊ばして此世の中を守つて下さるのだから、人間は神様を信仰せ

なくてはなりませんぞ」

ベル「それ丈け澤山の神様があつたら却つて世界が治まらぬぢやありませんか。

貴方のお説はどうも私の腑に落ちない。その筆法で云へば一切神ばかりで此世の

中は埋もつて了ひ、人間の住居する場所はないぢやありませんか。そんなポリセ

ズムは新教育を受けた吾々の耳には、餘り古臭くて這入りませぬがな」

求道「神様は元は只お一柱だ。その神様は大國治立尊と云つて宇宙一切をお構ひ

遊ばす太元神様だから此神の水火から生れた色々の天人が、八百萬の神となつて

御守護遊ばしてゐるのだ。それだから之を巻けば一神となり、之を開けば多神と

なる。所謂神様は一神にして多神、多神にして一神だ。吾々と雖もヤツパリ神様

の御神體の一部分だ」

ベル「益々分らなくなつて來た。お前さまの言ふ事はモノゼイズムかと思へばポ

リセイズムになつて了ふ。ポリセイズムかと思へば一轉してバンエンテリズム

になるぢやないか。そんな據りない神様を禮拜するのは眞平御免だ。エーエーこ

んな話を聞いて居ると氣分が悪くなる。それよりも現實的にお蔭を頂く事をやり

度いものだ。さア之から俺の幕だ[□]
と云ひ乍ら捻鉢巻をグツと締め、瘤だらけの腕をニユツと前につき出し、
ベル「おい、修験者、ここを何處と心得てる。勿體なくも天下の大泥坊ベルさま
の繩張り區域だぞ。さアさア、キリキリチャツと持物一切投げ出して行かつせい。
猪倉山で随分分配金を貰つただらうから、まだ持つて居るだらう。それを此方へ
スツパリ渡して行け。お慈悲に着物丈は助けてやるから[□]
求道「アハハハハ、困つた奴だな。金は此處にまだ一萬兩ばかり持つて居るが、
之は世界の困つた人間を助けるための物質的の寶だ。お前の様な泥坊にやる金は
一文も持たない。將軍様から大金を頂いて改心するかと思へば益々惡黨になるや
うな代物だから、お前を助けようと思へば一厘だつて渡す事は出来ぬ。それより
も無形の寶を頂いて誠の人間になつたら如何だ[□]
ベル「アハハハハ、何と仰有つてもパンを與へられねば信仰は出来ない。俺を信
仰の道に入れ度いと思ふなら先づパンを與へよだ。早くその金を此方へ……皆迄
とは云はぬから、五千兩ばかり渡して呉んねえ。さすれば此金のある間は信者に

なつても可い」

ヘル「到頭本音を吹きやがつたな。もし先生、こんな奴に與る金があつたら乞食におやりなさい。ますます此奴を地獄の底へ墮す様なものですからな」

求道「如何にもお前の云ふ通りだ。こんな者に金を持たしたら狂人に松明を持たすも同然だ。まア止めて置かうかい」

ベル「こりやヘル、貴様の懐がヘルのもでもないのに横合から何をしやベルのだ。人の商賣の妨害をさらしやがつて、もう量見ならぬ。これから貴様と命の奪合ひをして、勝つた方がケリナを女房にするのだ。さア來い、勝負だ」

と手に唾をつけ挑戦する。

ヘル「ハハハハ、そりや何さらしてるのだ。そんな目を剥いて芝居をしたつて恐がる奴は一人もありやせないぞ。なあケリナ、本當に下劣な男ぢやないか。下劣ばかりならまだしもだが、無智暗愚極惡無道、所在罪惡を具備して居るモンスターだから困つた者ですわい。併しケリナ、お怪我があつてはならぬから、先生のお側を離れないやうにして下さい。之から此惡人と奮闘して懲しめてやるから」

ケリナ「ホホホホ何程ベルが凄^{すご}い文句^{もんく}を竝^{なら}べて威張^{おどろ}つた所で誰^{たれ}も驚^{おどろ}くものはな
いわ。そして妾^{わたし}の夫^{をつと}鎌彦^{かまひこ}さまを殺^{ころ}したのも此奴^{こいつ}だから、謂^いはば夫^{をつと}の敵^{かたき}、見逃^{みのが}しは
致^{いた}さぬ。お前^{まへ}、そこに待^まつて居^ゐなさい。妾^{わたし}が美事^{みごと}ベルを平^{たい}げてお目^めにかけませう。
そしてお前^{まへ}も矢張^{やっぱ}り夫^{をつと}を殺^{ころ}した仲間^{なかま}だから此次^{このつ}ぎはヘルだから樂^{たの}しんで待^まつて居^ゐ
なさい」

ヘル「いや、此奴^{こいつ}あチツと都合^{つがふ}が惡^{わる}いわい」

ベル「ワツハハハハ、態^{さま}ア見^みる。ケリナに現^{うつ}を抜^ぬかしやがつて既^{すで}に亭主^{ていす}になつた
氣取^{きど}りで居^をつたが、今^{いま}の態^{さま}は何^{なん}だい。大馬鹿^{おほばか}者^{かも}奴^め、先見^{せんけん}の明^{めい}が無^ないと云^いつても餘^{あんま}
りぢやないか、ウツフフフ」

ヘル「は捻鉢^{ねぢはち}巻^{まき}をし乍^{なが}ら、

ヘル「何^{なに}、猪口^{ちよこ}才^{ざい}な、俺^{おれ}も今迄^{いままで}惡人^{あくにん}だつたが最早^{もはや}神様^{かみさま}の光^{ひかり}に照^てらされた善人^{ぜんにん}だ。
貴様^{きさま}のやうな惡事^{あくじ}はせない。一つ目^{ひとめ}に物見^{ものみ}せてやるから覺悟^{かくご}をせい」

と矢庭^{やには}にベルに跳^とびついて行く。

ベルは「何^{なに}、猪口^{ちよこ}才^{ざい}な」

と側に落ちて居た棒片を手に取るより早く眞向に振り翳し、木端微塵になれよとばかり打下ろした途端に、ヘルを強か打った。ヘルは怒り心頭に達し、矢庭にベルの髻を引掴み引摺り初めた。ベルは痛さに堪へ兼ね、悲鳴をあげて泣き出した。ヘルは此聲に憐れさを催し、手を放した。求道居士は一生懸命に呪文を唱へて居る。隙を狙つてベルは一生懸命に草野ヶ原に四這となり、飛び込んだまま姿を見せなかつた。

ヘル「アハハハハ、口程にも無い奴だ。到頭遁走しやがったな。併し乍ら陰險な奴だから何處に隠れて何をしよるか分つたものではない。ケリナさまには大變な怨みを受けて居るけれども、私の罪亡ぼしのために先生と前後になつて、ケリナさまを親許まで届けさして貰ひませう。なア先生、許して下さるでせうな」

求道「お前の改心は確かだから成るべくは親許まで届けて、両親にお詫をしたが宜からう。然し乍らケリナさまの御意見は何と仰有るか分らない。ケリナさま、如何しますか」

ケリナ「ハイ、實の所を申せば妾の兄を殺した鎌彦を殺して呉れた方だから、別

に怨^{うら}んでは居^をりませぬ。送^{おく}つて下^{くだ}さらば結^{けつ}構^{こう}でム^ごいます』

ヘル『サンキューサンキュー、何^{どこ}處^こまでも送^{おく}らして頂^{いた}きます。もし、思^{おほ}召^{しめ}に叶^{かな}ひましたら、どんな御^ご用^{よう}でも致^{いた}しますから』

求^{きう}道^{だう}『アハハハハ、要^いらぬ事^{こと}は云^いはないでも宜^いい。それよりも十^じ字^じの秘^ひ法^{はふ}を唱^{とな}へて、さア行^ゆかう。テルモン山^{ざん}迄^{まで}はまだ十^じ里^り位^{ぐらゐ}もあるからグツグツして居^をれば日^ひが暮^くれる。途^と中^{ちゆう}で日^ひが暮^くれると又^{また}悪^{わる}者^{もの}が飛^とび出^だすと面^{めん}倒^{たう}だからな』

ヘル『先^{せん}生^{せい}、その時^{とき}には一^{ひと}、二^{ふた}、三^み、四^よ……と唱^{とな}へるのですな。それでいかなければ惟^{かむ}神^な靈^{らたま}幸^ち倍^は坐^ま世^せですわい』

求^{きう}道^{だう}『うん、さうださうだ。それさへ覺^{おぼ}えて居^をれば大^{だい}丈^{ぢやう}夫^ぶだ。おい、ヘル、お前^{まへ}は先^{さき}に行^ゆくのだ。そしてケリナさまを真^ま中^{なか}にして俺^{おれ}が殿^{しん}を勤^{つと}めてやる』

ヘル『はい、先^{さき}へ行^ゆかぬ事^{こと}あム^ごいませぬが、そこが何^{なん}だか一寸^{ちよつと}……でム^ごいますな。先生^{せんせい}が先^{さき}へお出^{いで}になるが順^{じゆん}當^{たう}でせう。お伴^{とも}が先^{さき}へ行^ゆくと云^いふ道^{だう}理^りがム^ごいませぬか

求^{きう}道^{だう}『八^や八^つ八^ぱ八^は矢^や張^{じやう}り恐^{こは}いのだな。よしそんなら思^{おほ}召^{しめ}に従^{したが}ひ先^{せん}陣^{ぢん}を勤^{つと}めやう。

さあケリナさま、續つづいておいでなさい」
と云いひ乍ながら聲こゑも涼すずしく宣せんでん傳か歌うたを歌うたひ、夏なつ草くさ茂しげる青あを野のヶ原がはらをスタスタと進すすみ行ゆく。
(大正一二・三・一六 舊一・二九 於龍宮館二階 北村隆光録)

第一章 惚泥でれどろ〔一四四一〕

求道居士きうだうこじはヘル、ケリナ姫ひめと共に、テルモン山のをくにわけ小國別やかたが館やかたをさして、草くさ茫ぼう々ぼう
たる原野げんやを進すすみ行ゆく。人ひと通とほりも少すくなく、一いち面めんの原野げんやには身みを没ぼつする許ばかりの雜草ざつさう生はえ
茂しげり、所々ところどころに荊棘いばらの叢點むれてんざい在あり、思おもつたやうに道みちが抄はかどらない。種々いろいろの花はなは原野げんや一いち面めん
に咲さき匂におうて居ゐる、時々ときどき足許あしもとに蚯蛇ぐわんだ現あらはれ行歩かうほ甚はなはだ危き険けんである。

日ひはずつぱりと暮くれて來きた。月つきは東とう方ほうの叢くさむらの中なかから覗のぞき初はじめた。北きたにはテルモ
ン山さんの高かう峰ほうが巍然ぎぜんとして控ひかへて居ゐる。夕ゆふの風かぜに送おくられて晚鐘ばんしやうの聲こゑいと淋さびしげに諸しよぎ
行無常やうむじやうと響ひびき來くる。白赤斑しろあかまだらの鴉からすは空そらを封ふうじてテルモン山さんの方面ほうめんさしてガアガアと

鳴き乍ら歸り路を急いで居る。三人は月の光を便りに進んで行つた。併し乍ら足
 許に匍匐してゐる蛭蛇の危険を免る事は到底出来ない。何程月は登りかけても
 長細き雑草に隔てられ、且つ晝の如くハツキリしない、若し誤つて蛭蛇の尾でも
 踏まうものなら、忽ち噛みつかれ、即座に命を落さねばならぬ危険がある。求道
 居士は惟神靈幸倍坐世を唱へ又、天の數歌を奏上し乍ら進んで行く、ヘル及びケ
 リナ姫は未だ神徳足らずとして數歌を唱ふる事を遠慮し、ヘルはバラモンの經を
 稱へ乍ら二人の後に跟いて行く。

或遇惡羅刹

毒龍諸鬼等

念彼觀音力

時悉不敢害

若惡獸圍繞

利牙爪可怖

念彼觀音力

疾走無邊方

蛭蛇及蝮蠍

氣毒焰火然

念彼觀音力

尋聲自回去

雲雷鼓掣電

念彼觀音力

降雹澍大雨

應時得消散

と唱へながら進んで行く。幸に經文の力でもあらうか、毒蛇も現はれず稍廣き草の短き所へ出た。まだこれからはテルモン山の麓へは我國の里程に換算して二里以上もある。さうして山は一里許り上らねばならぬ。そこが小國別の館であつた。三人はやつと危険區域を脱れ、白楊樹の麓に、折からさし登る月を眺めながら、腰を卸して休息した。此時覆面頭巾の黒装束をした男、ノソリノソリと遙向ふの松林を通るのが見えた。ヘルは目敏く之を見て、

ヘル「もし先生、今彼方へ怪しの影が通りましたが、あれは一體何でせうかな」

求道「ウン、あれは泥坊と見える。何か悪い目的を以て旅人を掠めようとやつて来たのだらうが、先方は一人、此方は三人だから到底駄目だと思つて、道を外れたのであらう。アア可愛さうな男だなア。此世の中に爲すべき事業は澤山あるに、どうして泥坊なんかするの、どうかして助けてやりたいものだが、もはや何處

かへ行つて了つた」

ヘル「もし先生、もう泥坊を助けるのはお止めなさい。あのベルだつてあの通りですもの。ゼネラルさまから澤山のお金を頂き、もう是切り泥坊はやらないと云うて置き乍ら、まだ精神が直らないのですから、駄目ですよ」

求道「それでもお前は改心したぢやないか。ベルのやうな男のみはあるまい。あれでも時節が来たならば、きつと改心するだらう」

ヘル「そりやさうです。私も實はゼネラル様からお金を頂き、これつきり泥坊を止めて正業に就かうと思ふて居ましたに、つい悪友の爲に折角の決心が鈍り、益々悪事が増長して終には人を殺し、其天罰である世の關所迄やられて来たやうな悪人が、今漸く改心して貴方のお伴するやうになつたのですから、泥坊だつて改心せないには限つて居りませぬ。併し乍ら今日はケリナさまを送つて行かねばなりませんから、途中で泥坊に出會つても相手にならないやうにして下さいませや」

求道「ウン、承知した。併し乍らベツタリ出會つた時にや、先方が改心せうと、しまいと、一應の訓戒は與へねばならぬ。魔道に墮ちたる人間を、修験者として

見捨る譯には行かぬからなア

ヘル「それもさうですなア。成る可くそんなものに出會はないやうに、神様に願つて参りませうか」

ケリナ「もしお二人様、あの怪しい影は何うも私はベルのやうに思ひますが、違ひませうかな」

求道「ケリナさまのお察しの通りだ。間違ひはありませんまい」

ヘル「エ、あの影がベルぢやと仰有るのですか、そいつは怪しからぬ。吾々が疲勞れて野宿でもせうものなら、寢込を考へて先生のお金を取らうと云ふ考へで來よつたのでせう。仕方の無い奴ですなア」

求道「ウン仕方の無い奴だ。何程改心して居ても金の顔を見ると、直に又惡に還るのが小人の常だ。お前は俺の懐に持つて居る一萬兩の金は欲しい事は無いか」

ヘル「別に……たつて欲しいとは申しませぬ。併し貴方が與らうと仰有れば頂き

ます。これから修驗者になつて世界を歩かうと思へば旅費も要りますからなア」
求道「さうすると矢張りお前も油斷のならない男だ。トコトンの改心は中々出來

ぬものと見えるのう」

ヘル「人間は如何に神様の御子ぢやと云つても、天國と地獄との間に介在して居る以上は、善許りでは到底世に立つていく事は出来ませぬ。内の生活は如何やうにも出来ませうが、衣食住の爲に苦しまねばならぬ肉體は、多少の自愛心も必要で△いますからなア」

求道「刹帝利や毘舍や、首陀なれば、多少自愛の心も生存中は必要だらうが、最早修験者となると定つた以上は金などは必要はない。神のまにまに野山に伏し、食あれば食を取り、食なければ水を飲み、水も無ければ草でも嚙んで行くのが修験者の務めだ。一切の物欲を捨てねば神の使となる事は出来ないからのう」

ヘル「成程、仰せ御尤もで△います。併し乍ら貴方は修験者の身分であり乍ら、一萬兩の金を持つて居ると仰有つたぢやありませんか、どうも仰有る事が矛盾して居るやうに思はれてなりませんなア」

求道「八八八八八、私は實際は無一物だ。併し乍ら心の中に一萬兩持つて居るのだ。どうかして是を投げ出したいと思ふて居るが、まだ罪業が充たないと見えて

除去する事が出来ないのだ。俺の一萬兩と云ふのは、我慢、高慢、自慢、忿慢、慢心と云ふ悪龍が一匹残つて居ると云ふ事なのだ。此一萬龍を何とかして放り出さなくては、比丘になつても天地へ恥かしくて仕方がないから、宣傳使でもなければ俗人でも無い、半聖半俗の境遇に彷徨ひ、修験者となつて居るのだ。どうぞして御神徳を頂き、宣傳使の候補者にでもなりたいものだが、仲々容易の事ではない、それがために實は困つて居るのだ」

ヘル「私は又本當のお金を一萬兩懷中に持つてゐるのかと、固く信じて居りました。先生は口でこそ恬淡無欲らしう見せてゐるが、矢張り内心は、マンモニストだと思つて居たに、形の上の寶は些も持つて居られないのですか。それで私の疑團も晴れました。ベルの奴本當に貴方が現金を所持して居ると思ひ、こんな所迄跟いて來たかと思へば可憐さうぢやありませんか」

ケリナ「ホホホホホ、ヘルも可憐さうぢやありませんか。貴方だつてベルと八百長喧嘩をして、旨く修験者を誑かし、一萬兩の金を取らうと思つて來たのでせう。そんな事はチャンと、私も先生も看破してゐたのですよ。この邊で謀合はし、

「ボツタクル」考へであつたのでせう」

求道「アハハハハ、オイ、ヘル、もう駄目だ。俺達の前にはどんな悪も施すの餘地がないぞ。本當に改心するか、どうだ」

ヘル「ヘン馬鹿らしい、素寒貧の文なしに跟いて来たかと思へば業腹だ。オイ、ベル一寸来い、此奴はあんな事を云やがつて一萬兩持つてけつかるに違ひない、早う来い、ヤーイ」

と嗷鳴り出した。忽ち驅けて来たベルは威猛高になり、

ベル「アハハハハ、今迄はバラモン軍の上官で、カーネルカーネルと尊敬して来たが、もうそんな態になつて零落て来た以上は一個の修験者だ。サア綺麗薩張りと懐の金を渡せばよし、グツグツ吐すと肝腎要の命が危ないぞ。サアどうだ、返答聞かう」

求道「ハハハハハ、分らん奴だなア、俺の體を何處なりと調べて見よ、一文も持つて居やしないわ」

ベル「そんなら早く裸體になつて見せる」

求道はムクムクと眞裸體になり、薄い着物をはたき乍ら、二人の前に放り出した。

ヘル「ハハア、矢張り駄目だな。併し乍らこのナイスをどうしても自分の物にせなくては嘘だ。それについては此修験者が居ると何彼の邪魔になる。サア序に【バラ】さうぢやないか」

求道は頻りに天の數歌を奏上し始めた。ヘル、ベルの兩人は些しも頓着せず、ベルの持つて来た二本の棒千切を持つて雙方より打つてかかる。ケリナは白楊樹に抱きついて慄うて居る。求道居士は眞裸體のまま一生懸命防ぎ戦うた。されど一本の木切も持つて居ない眞裸體の求道は、二人の爲に打ち【のめ】され其場に絶命となつて了つた。兩人は冷やかに笑ひ乍ら、

「アハハハハ、どうやらこれで俺達にもハツピネスが見舞うて来たらしい。サア是からがナイスの番だ。何と云つても斯うなれば此方の自由だ。オイ、ケリナとやら、俺達二人の意志に従ふかどうかだ」

ケリナ「肝腎の修験者迄が、此通りなられたのでムいますから、女の細腕で抵抗

して見た所で仕様がムいませぬ。御意見に従ひませう、併しラマ教のやうに多夫一妻主義はどうも面白うムいませぬ。何方かお一人に願ひ度いものでムいませぬア」

ベル「成程お前の云ふのも尤もだ。まだお前はバージン姿だから到底誰が好き嫌ひだのと云ふ事はよう云ふまいから、一つ茲で俺達二人が抽籤をやつて、一の出た方がお前を女房にすると云ふ事に定めようかなア」

ケリナ「物品か何かのやうに抽籤とは餘りぢやムいませぬか、どうか私に選まして頂く譯には行きますまいかなア」

ベル「ウン、それも一方法だ。善悪美醜をトランSENDして、お前の本守護神の得心した方に向いたが好からう。スタイルは醜うても心の綺麗な男らしい男もあり、何程スタイルは好くても、心の汚い卑劣の男もあるからなア、【そこはそれ】選擇を誤らない様にしたがるしからうぞ」

ケリナ「そりやさうでムいますな。何と云つても男らしい男で、何處ともなしに同情心のある柔し味のある方が好きですわ、人を叩き殺して埋けてもやらないや

うな方は絶対に嫌ひです」

ベル「成程俺も最前からヘルの特が當つて死んだ修験者に同情の涙を濺いで、どうか死骸でも隠して上げ度いと思つて居た所だ。餘り妻の選擇に就いて氣を取られて居つたものだから「ウツ」かりして居た。是もお前を愛する心が深いのだから、決して悪くは思つて下さるな」

ケリナ「女的美貌に現を抜かして假令ヘルが殺したにもせよ、死屍の横たはつて居るのを見て隠してやらうともせぬ男は嫌ひですわ、お前の棒が當つて死ななくとも同じ事ですよ。矢張り二人して殺すといふ考へだつたのでせう。同じ悪人にも身を任す程なら、スタイルの美しいヘルさまに身を任しますわ」

ヘル「エへへへ、オイ、ベルどうだ、戀の凱旋將軍様だ。恐れ入つたか」
ベル「ヘン馬鹿にするない、色は年増が良め刺す」と云つて最後の勝利は俺の手に握つて居るのだ」

ヘル「馬鹿云へ、御本人が承諾しない戀が何になるか、お生憎様だ、イヒヒヒヒ」
ケリナ「ホホホホ、揃ひも揃ふたデレ泥だ事、誰がお前のやうな馬鹿者に身を

任すものがありますか、よい加減に自惚をして置きなさい」

ベル「オイ、何程美人だと云つてもこれだけ侮辱せられては、女房にする譯にも

馬鹿らしくて出来ぬぢやないか、序に此奴も一緒にバラしてやらうかい」

ヘル「ウンさうだ。かう愛想盡かしを云はれては仕やうがない。女は世界に幾人

でもある。此女を生かして置いては修験者を殺したのは俺達だと云つて貰うと、

些許り劍呑だから、やつつけて仕舞はうよ」

ベルは、

「よし合點だ」

と矢庭に棒千切をもつて打つてかかる。ケリナは白楊樹を盾に取つて身を脱れよ

うとする。ヘルは又もや棒千切をもつて脳天目蒐けて打ち卸した。憐やケリナは

キヤツと悲鳴を上げ其場に打ち倒れた。此の時天を焦して下り来る一大火光があ

つた、二人は驚いて雲を霞と森林の中を逃げて行く。火團は忽ち二人の倒れて居

る前に降下した。是は第一靈國より月照彦命が、二人の危難を救ふべく神の命を

帯びて下られたのである。二人は漸く火團の落下した音に氣が付き、四邊を見れ

ば、桃色の薄絹を着した麗しきエンゼルが立つて居る。求道居士は拍手再拜して救命の恩を感謝した。ケリナも亦エンゼルを拜み一言も發せず、嬉し涙にかき暮れて居る。エンゼルは言葉靜に兩人に向ひ、エンゼル「汝等兩人、神の大道を誤らず、身をもつて道の爲に殉じたる其志は見上げたものだ。其方の志に免じ、靈國より汝等を救ふべく下つて來た。吾は月照彦神なり。隨分氣をつけてテルモン山に歸つたがよからう。それ迄に、も一度試みに遇ふ事があるだらう。屹度自分の命を惜むやうな事では世を救ふ事は出來ないから、何事も神に任して救ひの道を拓いたらよからう。さらば」
と一言を残し、紫の雲に乗つて東の空を指して歸らせたまふた。二人は後姿を伏拜み、感謝の涙に暮れつつ、天の數歌を稱へながらテルモン山を指して歸り行く。

赤心を貫き通す桑の弓

届かざらめや神の御國へ。

(大正一二・三・一六 舊一・二九 於龍宮館 加藤明子録)

第一二章 照門風(一四四二)

求道居士はケリナ姫を伴ひ乍ら、テルモン山の小國別の館を指して送り行く途々
歌ひ出したり。

求道 有爲轉變は世の習ひ とは云ふもの人の身の

行末こそは不思議なれ 三國一の月の國

ハルナの都に程近き 大國彦の現れませる

大雲山に立籠り バラモン教の御教を

朝な夕なに信仰し 拔擢されてバラモンの

教司と任せられつ 追々功績を現はして

大黒主の御見出しに

あづかり遂にカーネルの

尊き職を授けられ

神素盞鳴の現れませる

齋苑の館を屠らむと

大黒主の命を受け

鬼春別や久米彦の

兩將軍に扈從して

旗鼓堂々と月の國

後に眺めて進み行く

萬里の山野を跋涉し

蹄の音も勇ましく

浮木の森迄進軍し

片彦、久米彦將軍と

隊伍を整へ河鹿山

進む折しも三五の

治國別の言靈に

打破られて敗走し

浮木の陣屋へ引返し

又もや茲に全軍を

二つに分けてライオンの

廣き流れを相渡り

ビクトル山の袂にて

假の陣屋を造りつつ

ビクトリア城を脅かし

味方の軍勢に驚いて

ゼネラル様と諸共に

總隊崩れ逃げ出す

戦の庭に出で乍ら

薄の穂にも怖ぢ恐れ

慄ひ慄ひて廣野原

漸く渡りシメチ坂

壁立つ如き坂道を

漸く下り猪倉の

難攻不落の山寨に

永久的の陣營を

構へて時を待つ内に

又も聞ゆる宣傳歌

三五教に名も高き

神將軍と聞えたる

治國別の一行に

又も攻められゼネラルは

脆くも茲に兜脱ぎ

バラモン教の軍職を

捨て忽ち三五の

教の道のピュリタンと

變らせ玉ふ果敢なさよ

吾等も共に進退を

同じうせむとカーネルの

職をば止めて修驗者

名も求道と改めて

ビクの御國の清瀧に

靈を洗ひビクトルの

下津岩根に宮柱

太しく立てて永久に

鎮まり居ます大神の

御前みまへに日毎ひごと詣まうでつつ
 治道ちだう、道貫だうくわん、素道居士そだうこじ
 三人みたりの許ゆるしを受け乍うら
 フサの國くにをば横斷わうだんし
 猛獸まうじう毒蛇どくじやの荒すさぶ野のを
 神かみの光ひかりを杖つゑとなし
 夜路よぢの露つゆをば浴あび乍ながら
 エルシナ川がはの麓ふもとまで
 來きたる折をりしも大空おほぞらの
 月つきは漸やうやく薄うすらぎて
 忽たちまち聞きこゆる鳥とりの聲こゑ
 川かはの水瀨みなせのはやる音おと
 たよりに傳つたひ下くだる折をり
 淵ふちに浮うかんだ四人よにんの姿すがた
 見逃みのがしならずと衣きぬを脱ぬぎ
 法螺ほらを口くちに喰くはへつつ
 ザンブと許ばかり飛とび込んで
 四人よにんの男女なんによを空砂からすなの
 上うへに救すくひて耳元みみもとに
 大法螺おほほらがひ貝がひを吹立ふきたつる
 神かみの惠めぐみは忽たちまちに
 シヤール一人ひとりを除のぞく外ほか
 三人みたりは息いきを吹ふき返かへし
 やつと胸むねをば撫なで下おろし
 三人みたりの男女なんによに皇神すめかみの
 御教みのりを完全うまらに諭さとしつつ
 大岩谷おほいはだにの麓ふもとまで
 來きたりて息いきを休やすめつつ

十字の祕法や數歌の

功力を傳へみたる折

惡逆無道のベルの奴

わが懐に金子ありと

早くも悟り惡心を

起して奪らむと攻め來る

ヘルとベルとは初めより

わが懐を狙ひつつ

八百長喧譁を徐々と

眞面目にやり出し

ベルの司は逸早く

此場を後に逃げて行く

さはさり乍らヘルの奴

色と欲とに心をば

曇らせ吾等の後を追ひ

ケリナの姫を送らむと

草野を別けて進み來る

日も黄昏になりぬれば

ポプラの蔭に立寄りて

息を休むる折もあれ

又もや來る黒い影

これぞ正しくベルの奴

ヘルと二人が言ひ合せ

吾が懐を狙はむと

來りしものと悟りしゆ

いろいろ雑多と眞道を

説き諭せども如何にせむ

地獄の境に墮ち果てし

二人の靈は飽く迄も 悪の企みを遂げなむと

忽ち棍棒振り翳し 吾が脳天を打すゑぬ

何かは以て耐るべき 忽ちウンと昏倒し

夢路を辿る折もあれ 高天原の靈國を

領有ぎ玉ふエンゼルが 鳩の如くに下りまし

吾等二人の危難をば 救ひ玉ひし有難さ

ああ惟神々々 神の恵を目の當り

受けたる吾々兩人は 假令如何なる悩みにも

撓まず屈せず道の爲 世人の爲めに真心の

有らむ限りを盡しつつ 進まにやならぬ兩人を

守らせ玉へ惟神 皇大神の御前に

畏み畏み願ぎ奉る 旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 星は天より落つるとも

印度の海はあするとも 此大恩は何時の世か

報むくい奉まつらで置おくべきぞ 思おもへば思おもへば有あり難がたき

惠めぐみの露つゆの天あめ地に 充みち足たらひたる神かみの世よは

草くさ野のの末すえに置おく露つゆも 一いち々いち月つきの御み光かりを

宿やどし玉たまひて瑠るり璃くわう光のの 如ごとく光ひからせ玉たまふなり

ああ天てん國こくか樂らく園えんか 際さい限げんもなき廣ひろ野の原はら

進すすみ行ゆく身みぞ樂たのしけれ

ケリナ 〇わが足たら乳ち根ねの父ちち母ははは 月つきの都みやこに現あれませる

バラムン 教けうの太ふと柱ばしら 大おほ黒くろ主ぬしの部ぶ下かとなり

仁じん慈じ無む限げんの御み教をしへを テルモン山さんの山さん腹ぶくに

大おほ宮みや柱しら太ふと知しりて 鎮しづまりゐます皇すめ神かみに

朝あさな夕ゆふなに仕つかへつつ 四よ方もの國くに人びと悉ことごとく

神かみの教をしへに靡なびかせつ 教をしへを開ひらき玉たまひしが

ウラルの教をしへの神司かむつかさ

數多あまたの手下てしたを引率ひきつれて

得物えものを携たづさへ堂々だうだうと

勢猛いきほひたけく迫せまり來くる

其勢そのいきほひに辟易へきえきし

吾わが足乳根たらちねは逸早いちはやく

館やかたを捨すててテルモンの

高嶺たかねを渡わたり森林しんりんに

暫しばし難なんをば避け玉たまふ

此時このとき信者しんじゃと現あれませる

鎌彦司かまひこつかさが現あらはれて

神變しんべん不思議ふしぎの神力しんりきを

現あらはし玉たまひ攻せめ來きたる

ウラルの教をしへの司等つかさを

一人ひとりも残のこらず退しりぞけて

難なんをば救すくひ玉たまひしゆ

吾わが足乳根たらちねは漸やうやくに

元もとの館やかたに歸かへりまし

神かみの教をしへを詳細まつぶさに

開ひらかせ玉たまふ折をりもあれ

館やかたの難なんを救すくひたる

鎌彦司かまひこつかさは妾わらはをば

ラブし給たまひて朝夕あさゆふに

言いひよりたまひし果敢はかなさよ

妾わらはは素もとより鎌彦かまひこに

少すこしも心こころはなけれ共ども

度重たびかさなれば何時いつとなく

男をとこの情なさけを慕したひ出だし

遂には割なき仲となり

父と母との目を忍び

月夜を恨み暗の夜を

指折り數へ待ち暮す

怪しき仲とはなりにけり

さはさり乍ら足乳根の

吾が兩親は頭をば

左右にふりて兩人が

戀を許させ玉ふ可き

氣色なければ止むを得ず

夜陰に紛れて兩人は

手に手をとつて逃げ出し

エリシナ谷の山奥に

形ばかりの草庵を

結びて暮す折もあれ

吾が背の君の鎌彦は

俄に駱駝を引つれて

妾を家に残しつつ

何處ともなく出でましぬ

深山の奥に只一人

果實を喰ひ芋を掘り

漸く餓を凌ぎつつ

悲しき月日を送ること

早一年に及べども

夫の便りは泣く許り

袖をば濡らす草の露

衣は破れ肉は瘦せ

見る影も無き状となり

淋しき浮世を果敢みて 冥途の旅を爲さむかと

庵を後に夜の道 エルシナ川の川岸に

佇み胸を押へつつ 少時思案に暮れけるが

何處ともなく吾が耳に 死ねよ死ねよと教へ來る

醜の曲津か知らね共 切迫詰つた此場合

死ぬより外に途無しと 心を定めて飛び込めば

千尋の底の青い淵 息も苦しくなりければ

再び娑婆が戀しうなり ま一度生命を保たむと

焦れど詮なし女の身 弊衣に水を含みしゆ

身も儘ならず悶え居る 時しもあれや何物か

吾が身に觸るる物ありと 矢庭にしかと抱き付き

浮つ沈みつ争へば 何時しか息は絶え果てて

前後不覺となりけり 斯かる處へヘル司

現はれ來り兩人を 救ひ助けて森林の

中なかに伴ともなひいたは勞いたはりつ
種いろ々いろ雜ざ多たの介かい抱はうに

再ふたびふた正しやう氣きに復ふくしける
惡あく逆ぎやく非ひ道だうの一人いちにんは

妾わらはの姿すがた見みるよりも
あやしまなこき眼まなこを光ひからせて

耳みみも汚けがるる口くど説き言ご
三み人たりの男をとこは吾わが身みをば

妻つまになさむと争あらそひつ
パインの蔭かげに組くみついて

組くんづ轉ころんづ又また元もとの
青あを淵ぶち目め蒐がけて落おち込こみぬ

妾わらはを救たすけし恩おん人じんの
生いのち命めいを助たすけにやなるまいと

吾わが身みを忘わすれて飛とび込こめば
又またもや溺おほれて人ひと心こころ

無なき身みとこそはなりにけり
これより一いつ行かう四よ人にん連づれ

青あを野のヶ原がはらを打うち渡わたり
當あて途どもなしに進すすみ行ゆく

忽たちち關せき所しよに突つき當あたり
容よう子すを聞きけば靈れい界かいの

八やち衢また關せき所しよと聞ききしより
吾われ等らが一いつ行かう驚おどろいて

再ふたび元もとの道みちをとり
歸かへらむとする折をりもあれ

酒さけに醉よふたる六ろく造ざうが
又またもや途とち中ちゆうに塞ふさがりて

何ぢやかんぢやと口説出すなん くだき こりや恠らんと思ふ折おも
 向ふの方より足早にむか かしら 走り來れる婆々ありはし きた
 一行五人は怪しみていつかうごにん あや 道の側への草原にみち なた
 身を隠したる時もあれみ かく 婆々はツツと立止りばばア
 不思議な手つきで招きつつふしぎ てる 日出神の義理天上ひのでのかみ
 底津岩根の太柱そこついはね みるくの神の生宮だふとばしら
 これからお前等一同にまへら いちどう 天國淨土の眞相をてんごくじやうど
 諭してやるから跟いて來いさと なぞと言葉も滑らかにことば
 いと熱心に説きつけるねっしん 何は免もあれ行き見むとなに
 婆々の後に從ひてばばア 川を隔てて岩山のかは
 賤が伏屋に跟いて行くしづ ぶせや ウラナイ教の旗頭はたがしら
 高姫さまが住家ぞとたかひめ 聞いて驚く胸の内き おどろ
 さあらぬ顔を装ひてかほ 様子伺ひ居たりしがやうす
 忽ち聞ゆる法螺の聲たちま 三五教の修驗者あななひけう

求道居士が現はれて
 吾等一同の危難をば
 救はせ玉ふと見る内に
 俄に聞ゆる水の音
 小鳥の聲も爽かに
 耳に入るよと見るうちに
 再び息を吹返し
 又もや救ひ上げられて
 漸う此處迄歸りけり
 ああ惟神々々
 尊き神の御恵に
 守らせ玉ひて道の上
 包む隈なく足乳根の
 居ますわが家へ速に
 歸させ玉へ惟神
 神の御前に願ぎ奉る

と歌ひつつ求道居士の後に従つて、夜道を辿るのは、ケリナ姫であつた。
 忽ち聞ゆる猛獸の唸り聲、前後左右より一齊に山彦を轟かして聞え來る。
 求道
 居士は天の數歌を歌ひ上げ、

『眞觀清淨觀』

廣大智慧觀

福聚海無量	具一切功德	於苦惱死厄	念々勿生疑	勝彼世間音	妙音觀世音	念彼觀音力	諍訟經官處	澍甘露法雨	悲體戒雷震	能伏災風火	無垢清淨光	悲觀及慈觀
ふくじゆかいむりやう	ぐいつさいくどく	おくなうしやく	ねんねんもつしやうぎ	しょうひせけんおん	めうおんくわんぜおん	ねんびくわんのんりき	じやうていぎやうきやうくわんしよ	じゆかんろほふう	ひたいかいらいしん	のうぶくさいふうくわ	むくしやうじやうくわう	ひくわんぎうじくわん
是故應頂禮	慈眼視衆生	能爲作依怙	觀世音淨聖	是故須常念	梵音海潮音	衆怨悉退散	怖畏軍陣中	滅除煩惱炎	慈意妙大雲	普明照世間	慧日破諸闇	常願常瞻仰
ぜこおうちやうらい	じがんししうじやう	のうあさえこ	くわんぜおんじやうしやう	ぜこしゆじやうねん	ぼんのんかいてうおん	しうをんしつたいさん	ふゐぐんぢんちう	めつぢよぼんなうゑん	じいめうたいうん	ふみやうせうせけん	ゑにちはしよあん	じやうぐわんじやうせんがう

と念じ乍ら、負ず劣らず、力一杯法螺貝を吹き立てた。法螺貝の聲は山野の邪氣を拂ふものである。ケリナ姫は猛獸の聲に戦慄し、求道居士の腰に喰ひつき、泣き聲になつて居士に従ひ經文を誦唱して居る。暫くにしてさしも激しき猛獸の唸り聲はピタリと止まつた。天を封じて居た雲は俄に散つて夏の月は洗ひ出した様に、中天低く輝き始めた。是よりケリナ姫は何となく求道居士を尊信愛慕するの念益々深くなり、ハートに折々波を打たせ胸を焦がすに至りたり。

(大正一二・三・一六 舊一・二九 於龍宮館二階 外山豊二録)

第一三章 不動瀧(一四四三)

テルモン山の峰續き
巨木茂れるスガの山

山一面に鬱蒼と
天を封じて谷間は

晝さへ暗く濛々と

夏と冬の區別なく

霧立ち上る秘密郷

天より布を晒したる

如くに見ゆる大瀧は

アン・ブラツク瀧といひ

物凄じき水の音

百の雷一時に

轟く如く聞え來る

かかる所へスタスタと

夜な夜な通ふ女あり

バラモン教の神司

テルモン山に館をば

築きて教を開き居る

小國別の愛娘

デビスの姫は吾父の

重き病を救はむと

一人の妹に別れたる

其悲しさに身を忘れ

父の病や妹の

無事を祈りて進み來る

月は御空に皎々と

輝き亘り下界をば

隈なく照らし玉へども

此瀧のみは老木の

枝に影をば遮られ

只瀧水のうす白く

吾目にとまる許りなり

デビスの姫は忽ちに
衣脱ぎすてて瀧壺に

ザンブと許り飛込んで
一心不亂にバラモンの

呪文を稱へ祈り居る
其心根ぞ殊勝なれ

かかる所へスタスタと
慌てふためき走り來る

怪しの影は只二つ
足音忍ばせ忍び寄り

暗に浮出た白い肌
眺めて互に囁きつ

デビスの姫が瀧壺を
あがり來るを待ちにける

これぞベル、ヘル兩人が
月照彦の神靈の

御稜威に恐れ修驗者
ケリナの姫を振棄てて

命カラガラ逃げ來る
其道すがら何氣なく

谷の水音たよりにて
尋ね來りし物ぞかし。

あつて、二十丈三十丈と幹のまわつた大木が天を封じ、晝さへ暗き凄じい様な場所
スガ山の谷間は此界限にても目立つて大木の繁茂せる、餘り高からざる密林で

である。そしてテルモン山の谷水を一切ここに集めて大瀑布をなし、高さ數百丈に及び、白布を天から吊り下した様になつてゐる。此地點は殺生禁斷の場所であり、アン・ブラツク明王が瀧の傍に祀られてある。されど國人は怖れて此瀧壺に近よつた者はない。種々雑多の猛獸や蛇など、澤山に棲息し、一歩たり共、スガ山の森林へ足を踏み入れたる者は生きて歸つた者は無いと云つて怖れられてゐた。雨傘を擴げた様な蝙蝠が瀧の近邊を眞黒になつてバタバタと飛び交ひ、晝は大木の朽穴に身を隠し、日の暮頃から、ソロソロ活動し始めるのである。

デビス姫は淨行の家に生れた淑女なるにも關らず、自分の命を的に夜な夜な通ひ來つて、老病に苦む父の全快を祈り、且三歳前に姿を隠した妹ケリナ姫の無事に歸り來らむことを、アン・ブラツク明王の前に祈るべく、危険を冒して夜な夜な通ひ來り、深い瀧壺に身を投じて荒行をやつてゐたのである。そこへ求道居士、ケリナ姫を撲り殺して姿を隠さうとしてゐる矢先、天の一方より大火光となつて、月照彦神のエンゼル現はれ來り、求道居士、ケリナ姫を甦らせ玉うた。ベル、へのルの兩人は此火團の爆發した音に肝を潰し、スガ山の谷間の恐ろしい事は承知し

乍らも、餘りの驚きに逃げ場を失ひ、山を驅け登つて、此瀧の麓に漸く逃げて來たのである。瀧水の音は轟々と騒がしく、デビス姫の祈る聲も聞き取る事が出来なかつた。

ベル、ヘルの兩人は斯かる深林に夜中、纖弱き女が荒行に來て居るとは思ひもよらないので、不審に堪へやらず、若や妖怪にはあらざるかと、齒の根をガタガタさせ乍ら、瀧の近くへ寄つたものの、氣味悪く互に抱きついて慄うてゐた。

デビス姫は一生懸命に祈願をしてゐたので、二人の男が近くに來て居る事は夢にも知らず、濡れた體の水氣を拭き取り、立派な衣類と着替へて、馴た道をスタスタと歸つて行く。怖い物見たさの喩に洩れず兩人は、跡を慕うて十間許り距離を保ち跟いて行つた。女は漸くにして月の照り亘る野原に出た。此處には天拜石と云つて、一間四方許りの長方形の削つた様な天然岩がある。デビス姫は其岩の眞中にキチンと坐り、再び祈願を籠めた。ベル、ヘルの兩人は腰を屈め、茫茫たる草原を潛り乍ら、ソツと傍に寄り草の繁みに身を隠して様子を考へてゐた。

デビス姫は月光に向つて雙手を合せ祈り初めたり。

南無大自在天バラモン大神様、私は丁度今日にて三七廿一日の荒行を無事に了
りました。何卒々々大黒主の神司より父が預かりました如意寶珠の玉が、一日も
早く発見されまして、大黒主様の御勘氣が許されます様に、又父は妹の行衛不
明となりしより心配を致し、それが爲めに重き病の床に臥し、命旦夕に迫つて居
ります。何卒私の心を憐み下さいまして、父の病を全快させ、戀しき妹に會は
して下さいませ。そして如意寶珠の神寶が一時も早く館へ、何者かの手を経て還
つて参ります様に、御惠を垂れ玉はむことを、偏に御願申奉ります。月の大神様
の御姿を拜するにつけ、其圓滿なるお姿にも等しき如意寶珠の神寶の思ひ出され
て参ります。あの神寶が無き時は、テルモン山の神館は暗夜も同様で△います。
何卒々々私の命はお召取になつても構ひませぬから、何卒此三つの願はお聞き届
け下さいませ様に……」

と一心不亂に祈願を籠めてゐる。ベル、ヘルの兩人は初めて此女の素性を聞知り、
胸を撫で下し、又もやソロソロ横着心を起し、女を赤裸にして多少の財産を手
入れむと考へ込んだ。デビスの頭や體には金剛石や珊瑚珠、瑠璃、瑪瑙、碑磔等

の寶玉ほうぎよくが飾かざられ、折柄をりからの月光げつくわうに映えいじて花はなの如ごとく光ひかつてゐる。之これを眺ながめた兩人りやうにんは猫ねこに松魚節かつをぶしを見みせたやうに、喉のどをゴロゴロならし、よき獲物えものムんなれと耳みみに口くちを寄せ、

ベル「オイ、ヘル、素的滅法界すてきめつぽふかいなナイスぢやないか。そしてあの頭あたまから體からだに光ひかつてゐる寶石ほうせきは随分高價ずいぶんかうかな物ものだらうよ。ここで一つ惡あくの仕納しをさめに、彼奴あいつを赤裸まつばだかにして、持物もちもの一切いっさいを奪うばひ取り、それを持つて國許くにもとへ歸かへり、故郷こきやうへ錦にしきを飾かざらうぢやないか。さうすればバラモン軍ぐんが解散かいさんになり、お拂はらひ箱ばこになつたと笑わらはれる事こともあるまい。人間にんげんはどうでもよい、成功せいこうさへすれば人が褒ほめるのだからなア。こんな好いい機會きくわいは又またとあるまいぞ」

ヘル「どうも何なんだか、體からだがビリビリと動き出だして來きた。俺おれやモウ泥坊どろぼうは廢業はいげふする。何程高價なにほどかうかな物ものでも欲ほしくはないワ。頭あたまの上うへから咬かうかう々々たる月つきの大神おほかみが、吾々われわれの行動かうどうを看視かんししてゐられるやうに思おもへて、怖おそろしくなつて來きたよ。お前まへ欲ほしけら、あのナイスに事情じじやうをあけて、頼たのんで貰もらつたら如何どうだ」

ベル「エー、腰拔こしぬけだなア。さうだから惚泥でれどろと云いはれるのだ。そんなら汝きさま、ここで

俺おれの腕うで前まへを拜見はいけんしてゐよ、其その代かはりに、俺おれが奪とつたら一つも汝きさまに分配ぶんぱいせぬから、承しよ知うちだらうな〇

ヘル〇ウン承知しようちだ、併しかしベル、餘程よつほど考かんがへてやらないと、どんな目めに會あふか知れぬぞ。どこともなしに彼奴あいつの體からだから御光ごくわうがさして居ゐるぢやないか、俺おれやどうしても神かみさまのやうに思おもはれて、體からだがすくむ様やうだ〇

ベル〇光ひかつてゐるのが價値ねうちだ。彼奴あいつをスツカリ手てに入れやうものなら、何なに十萬兩じふまんりやうとも知れぬ價値ねうちの物ものだ。汝きさまは餘程よつほど可いい腰拔こしぬけだなア。目めの前まへにブラ下さがつてる寶たからを見みす見みす捨すてるのか。冥加みやが知らず奴め、そんなら、そこに少時しばらく蝮まむしのやうに蟄伏ちつぷくして居をれ〇

と言いひ乍ながら、ツカツカとデビス姫ひめの祈願きぐわんして前まへに立現たちあらはれ、ベル〇オイ、どこの女中ぢよちゆうか知らぬが、長ながの旅たびを致いたす内うち、盜賊たうぞくに出會でひ、有金ありがねをスツカリと奪うばひ取とられ、今は是非いまぜひなく乞食こじきの様やうになつて道中だうちゆうをしてゐるのだ。之これから月つきの國くに迄まで歸かへらなくてはならない。どうかお前まへの頭あたまに光ひかつてゐる物ものを二ふたつ三みつつ此方こちらへ渡わたして下くださるまいか〇

デビスは此聲に驚いて、祈願の手をやめ、月影によくよく透して見れば、荒くれ男が一人、自分の坐つてゐる少し横手に立塞がつてゐる。

デビス「お前はどこの旅人か知らぬが、今私の頭の物をくれと云つたやうだが、之は何うしても上げる譯には行きませぬ。體中に寶石をつけてゐるのは、惡魔を防ぐ禁厭ですから、まだ之から吾家へ歸るのには、一寸二里許りも道程がある。夜の道を歸るのは危険だから、たつて欲しいのなれば更めて來て下さい。私の家はテルモン山の神館でムいます」

ベル「ナニツ、お前はあのテルモン山の靈地小國別様の娘といふのか、ヤアそりや妙な縁だ。拙者は斯う見えてもバラモン軍の征夷大將軍鬼春別將軍でムるぞ」
デビス「ホホホ鬼春別將軍さまは澤山の軍隊を伴つて堂々とお出で遊ばすぢやありませんか。最前何と云ひました……長途の旅、泥坊に出會ひ、金をスツカリ奪られたから頭の物でもくれい……と云つたでせう。鬼春別ともあらう方が、只一人歩いたり、賊に持物を奪られたりする様な事がありませうか。お前は胡麻の蠅だらう。サア、奪るなら奪つて御覽、女乍らも腕に覺がありますぞや」

ベル「實の所は鬼春別に間違ひは無いだ。三五教の軍勢十萬騎を以て吾陣屋へ押寄せ來り、味方は僅に三千餘騎、それも大部分は脚氣を患ひ、殆ど戰場に立つ者は二三百人許り、如何に勇猛なる鬼春別も僅に三百の手兵を以て十萬の敵に對するのだから、天地の道理上、已むを得ず味方は残らず討死し、自分は神の助けによつて、漸く命を助かり、此處まで落伸びて來たのだ。鬼春別に間違ひはムらぬぞや」

デビス「鬼春別様に間違ひなければ、何卒妾の館迄來て下さいませ、自分の體につけてる寶石位は物の數でもムいませぬ。諸方から貢いで來た種々の寶物は山程ムいますから、そして又父も鬼春別様がお出になれば喜ぶ事でせう。何卒私と一緒に來て貰ひたいものですな」

と僞者とは知り乍ら、ワザと氣を引いて見た。そしてデビスは自分の館近くに行つた時に、部下に命じて此泥坊を捕縛し、懲らしめて改心させむと刹那に考へた。ベルは館へ行つては直様バケが現はれると思ひ、燒糞になり、

ベル「エー、實の所は天下晴れての泥坊様だ。サアここで何もかもお前の體に附

着してゐる物は受取らう。ゴテゴテ申すと大切な命迄奪つて了ふが何うだ」

ヘルは思はず知らず草の中から、

ヘル「オイ、ベル、そんな無茶な事云ふない。それ程欲しけりや一つ丈頂戴した
らどうだ」

と呼んでゐる。ベルはハツとし乍ら、

「アハン アハン」

と大きな咳拂に紛らし、ヘルの聲を消さうとした。デビスは早くもまだ外に一人
の卑怯な泥坊が潜んでゐる事を悟つた。

デビス「ホツホホホ、腰拔泥坊だこと、一つ丈頂戴せいなどと、何した情ない
シミツタれた事をいふのだらう。命が欲しけりや命もやらう。寶石が欲しければ
與らぬ事もない。併し乍ら此方も生物だから、チツと許り動きますから、跳飛ば
されぬやうになさいませや」

ベル「エー、モウ駄目だ。コラ、ヘルの奴、汝もやつて來んかい。戦利品は山分
けだ」

ヘル「俺モウそんな殺生な事はしたくないワ、又天から光つて來たら何うする。

ダイヤモンドでも何でも、俺モウ光るものには懲々だ」

デビス「ホホホホ、腰の弱い泥坊許り集つたものだなア。併し乍ら其處邊に慄つ

てる腰拔泥坊、お前は可愛想な奴だ。こんな奴にやるのは惜いが、お前になら寶

石もやらうし、體が欲しけら體も任してやるから、そんな草原に蠱斯の如うにス

ツ込んでをらずに、トツトと此處へ出て來なさい」

ヘルは大膽不敵の女の言葉に度肝を抜かれ、腰をぬかしてバタリと平太つたま

ま慄うてゐる。

ベル「エー、腰拔奴、氣の弱い事許りぬかしやがつて、助けになる所か商賣の邪

魔許りする奴だ。タカが女の一人、何程手が利いてると云つても知れたものだ。

オイ女、渡すのが厭なら俺が直接に奪つてやる、神妙にしる」

と云ひ乍ら猿臂を伸ばして、頭に光る寶石をグツと掴みかけた。デビスは其手を

グツと握り、日頃鍛えし柔術の手を以て、三間許り草つ原へ投げ付けた。ベルは

死武者になつて、女に喰ひつき喉を締めようとした。ベルも少し許り手は利いて

またが、到底デビスには敵はない。併し乍ら寶石に眼眩んで、自分の危い事も忘れ、一生懸命に放られては組み付き放られては組み付き、殆ど十二三回も投げられ、グタグタになつた。それでもまだ性懲もなく、頭や體の寶石の光を目當に喰ひつく。デビスは『エー面倒』と岩を飛び、武者振りつくベルの胸倉をグツと取り、息を詰めた。ベルは手足を藻掻きヂタバタとやつてゐる。流石のヘルも何時迄戦慄して草の中に伏艇してゐる譯にも行かず、傍に落ちてゐた半朽ちたる棒杭が月に照らされて光つてゐるのを見付け出し、デビスがベルの首を締めてゐる背後から、脳天目蒐けて力一杯打下した。手許外れて耳から横つ面をウンと云ふ程撲りつけた。愨やデビスはアツと一聲叫んで脆くも其場に倒れて了つた。夜嵐は遠慮會釋もなく音を立てて通つて行く。

（大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館 松村眞澄録）

ヘルは月影つきかげにベルの姿すがたをよくよく見れば、目を眩まかしてゐる。幸さいはひ傍かたはらに小ちひさい水みづだまりがあつてそれに月つきが光ひかつてるのを認みとめ、口くちに水みづを含ふくみ來きたり、ベルの面かほや口くちなどに幾回いくくわいとなく含ふくませた。漸やうやくにして息いきを吹返ふきかへし、四邊あたりをキヨロキヨロ見廻みまはし乍ながら、

ベル「あー、一體いったい此處ここはどこだ。エライ所ところへ行いつて來きた」

と不思議相ふしぎさうにヘルの面かほを覗のぞき込こんでゐる。ヘルは聲こゑを勵はげまして、

ヘル「オイ、ベル、確しつかりせぬか、汝きま今いま、ナイスに喉のどを締しめられ、目めを眩まかしてゐや

がつたのだ。俺おれが今いまいろいと介抱かいほうして助たすけてやつたのだ。サア、早はやく立たたぬか、

何時追手なんどきおつてが來くるか知しれないぞ。此處ここは夜よるとはいへど通道とほりみちだ、サア、確しつかりした確しつかり

した」

と背せ中なかをポンポン叩たたいてゐる。

ベル「ああ矢張やっぱり夢ゆめだつたか、エライ所ところへ俺おれは行いつて居をつた。澤山たくさんな赤あかや青あをの鬼おに

が鐵棒かなぼう持もつて四方八方しはうはつぱうより俺おれを追おつかけて來くる其苦そのくるしさ、まア夢ゆめでよかつた。併しかし

あのナイスは何どうなつたか、取逃とりにかしただらうな」

ヘル「ナニ、汝が喉を締められヂタバタやつてるのを見るに見かねて、後から棒千切れでポンとやつた所、脆くも倒れよつたのだ。それみよ、そこに倒れてるだ
ないか」

ベルはダイヤモンドの光を見るより早く、

「ヤツ」

と云つたきり、猿臂を伸ばして頭の飾をむしり取り、矢庭に懐に捻込むだ。ヘルは、

「エー、毒をくはば皿までだ。人殺の大罪を犯したのだから寶石を盗んでも矢張り同じ事だ。同じ罪になるのなら、之でも奪つて太く短く暮さうかい」

と悪胴をすゑ、デビスのコルプスを探つて、光つた物は残らず剥ぎ取つて了つた。ベル「アハハハハ、脆いものだな、併し之丈澤山な寶石を體につけやがつて、實に贅澤な者ぢやないか、今日の貴族生活をしてる奴は皆是だからのう、下の人間が苦むのも無理はないワイ。俺達は此寶石をどつかの町へ持つて行って賣とばし、罪亡ぼしに天下の貧民を與ふ限り助けてやらうぢやないか。そすりや人の一人位

殺ころしたつて萬民ばんみんを助たすけるのだから、大罪所だいざいどころか却かへつて天てんから御褒美ごほうびを頂いただくかも知れな
いぞぞ」

へルへ「天てんから御褒美ごほうびを頂いただくことは到底望たうていまれないとしても、せめて罪つみを輕かるうして
もらふ事ことは出で來きるだらう。兔とも角かく汝きさまの持もつてゐる寶石ほうせきを皆俺みなおれに渡わたせ、汝きさまに持もたし
ておくと又また愛我あいがしん心しんを起おこしよつて、貧民救濟ひんみんきうさいに用もちゐないかも知しれない。俺おれに持もたし
ておけば此寶このたからを善用ぜんようして、汝きさまの罪つみも輕かるくなり俺おれの罪つみも輕かるくなるやうにしてやるか
らなアら」

ベルべ「馬鹿ばか云いふな、汝きさまのやうな風かぜが吹ふいても慄ふるうてるやうな人間にんげんに持もたしておく
のは險吞けんのんだ、剛膽不敵がうたんふてきの俺おれのやうな人間にんげんの懷ふところに持もつてをれば、如何いかなる惡魔あくまも狙ねら
ふこた出で來きない、サア、スツパリこちらへ渡わたせせ」

へルへ「馬鹿ばか云いふない、俺おれが助たすけてやらなかつたら汝きさまは此世このよに生いきてるこた出で來きぬ
のだ。そんな執着心しふちやくしんはやめて、皆俺みなおれに渡わたすのだだ」

ベルべ「汝きさまはそんな態ていのよい事ことをいつて、俺おれから寶石ほうせきを奪うばひ取り、一人ひとりで猫婆ねこばをき
めこむ積つもりだらう。今日こんにちの奴やつは慈善會じぜんくわいだとか、或あるひは孤兒院こじゐんだとかぬかして金かねを集あつ

め、皆自分の懐中を肥す奴許りだ。一旦泥坊に成り下つた人足が、慈善なんか夢にもあり相な事はないワイ。そんな偽善者に寶を持たしておく、天下の寶を悪用するから、スツパリ俺に渡せ」

ヘル「何を吐しゃがるのだい、汝も泥坊ぢやないか、俺に渡すのが險呑なら、汝に渡すのも險呑だ。サア、早く出さぬかい」

ベル「ヘン、一旦懐へ捻ぢ込んだ以上はメツタに渡さないぞ。第一黄金や寶石は此ベルのテースト物だから、假令命が亡くなつても渡す氣遣ひがないワ。グツグツぬかすと、汝の命も取つてやらうか、さすれば全部俺の懐へ這入るのだからなア」

ヘル「何猪口才な、美事取るなら取つてみよ、俺も汝の命を取つて、此寶石を全部私有物となし、ハルナの都へ歸つて、天晴れ紳士となる積だ。そして多額納税議員にでもなつて巾を利かす積だ。臺泥でさへも衆議院議員に當選した例があるぢやないか。渴しても盗泉の水を吞まずとは、昔の奴のほざく言葉だ。俺は之から逐鹿場裡に立つて、此金を撒き散らし、社會の優者となる考へだから、其第一

着手として、汝の所持品をスツカリ取つてやるのだ。汝の物を奪つた所で別に罪にもなるまい。又命を取つた所で元々だ。汝の死んでる所を助けたのだから……」
ベル「コラ、汝は寶をみると俄に噪ぎやがるのだ。汝は已に改心したと云つただやないか」

ヘル「きまつた事だい、つまりぬ時には誰だつて改心するが、寶を見て改心する奴があるかい。サア腕づくで之から奪り合だ」

ベル「ヨシ、面白い、見事取つてみせう」

と両方から四股を踏み、手に唾し乍ら、辻相撲を取るやうな調子で、四つからみ、組んづ組まれつ轉げ廻る。互に固い爪で目をひつかく、鼻を削る、手も足も面も血達磨の様になつて格闘を始め雙方共、グニヤグニヤになり半死半生の態で、其場にドツカと倒れて了つた。

宣傳歌の聲は夜嵐につれて、千切れ千切れに遠く聞えて来る、之は求道居士、ケリナ姫が夜道を急ぎ此方に向つて行進しつつ歌ふ聲であつた。

求道 神が表に現はれて

善神邪神を立分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

世の過は宣り直せ

ここは名に負ふフサの國

御空は高く月照彦の

神の命はキラキラと

輝き玉ひ吾々が

淋しき野路を歸りゆく

行手を照らさせ玉ふなり

ああ惟神々々

三五教を守ります

高天原の靈國の

珍の司と現れませる

稜威も殊に大八洲彦

神の命の御神徳

忽ち下り來りまし

吾等二人の危難をば

救はせ玉ひ久方の

天つ御空に輝きつ

歸り玉ひし尊さよ

バラモン教のカーネルと

選ばれハルナを立出でて

鬼春別や久米彦の

兩將軍に従ひつ

山野を渡り河を越え

雨には浴し荒風に

髪梳ずりやうやくに

河鹿峠の麓まで

旗鼓堂々と進み行く

至善至愛の大神は

善をば助け悪神を

懲め玉ふか吾々の

率ゆる軍は悉く

治國別の言靈に

打亡ぼされ這々の

態にて脆くも敗走し

浮木の森やビクトリア

猪倉山にチクチクと

豫定の退却始め出し

三千餘騎を従へて

堅磐常磐の岩窟に

千代の固めと立籠もる

又もや来る宣傳使

治國別の一行に

誠の道を諭されて

曇りし胸も漸くに

黎明告ぐる鶏の聲

旭の豊榮昇る如

靈もあかくなりけり

鬼春別を初とし

久米彦スパール兩司

手もなく神の正道に

歸順きじゆんされたる不思議ふしぎさに 吾われも心こころを翻ひるがへし

バラモン教けうの御教みをしへは げに美うるはしき道みちなれど

不言實行ふげんじつかうと知りしより すまぬ事こととは知り乍しら

掌ての裏返うらがへす藤堂式とうだうしき 忽たちまち味方みかたの軍隊ぐんたいに

鋒ほこを向むけたる果敢はかなさよ さはさり乍ながら天地あめつちの

誠まことに敵てきする事ことを得えず 大黒主おほくろぬしの神様かみさまに

言いひ譯わけ立たずと意いを決けつし 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

たるを憚はばかり中間ちうかんの 法螺吹立ほらふきたてる修驗者しゆげんじや

墨すみの衣ころもに身みを纏まとひ 頭あたまを圓まるく剃そりこぼち

百ももの罪つみをば消滅せうめつし 天地てんちの神かみに三五あななひの

誠まことを盡つくし奉まつらむと 照國山てるくにやまの谷間たにあひに

百ももかももよよの荒行あらぎやうを 勤つとめて遂つひにビクトルの

山やまにまします大神おほかみに 朝あさな夕ゆふなに仕つかへつつ

ゼネラル様さまの許ゆるしをば 蒙かうむり茲ここに宣傳せんでんの

漸やうやく旅路たびぢにつきにけり
 エルシナ川がはの畔ほとり迄まで
 スタスタ来きたり谷底たにそこを
 見下みおろす途端とたんに訝いぶかしや
 渦うづまく淵ふちに浮うかびある
 四人よにんのコルブス見みるよりも
 見逃みのがしならぬ修験しゆげん者じゃ
 神かみに祈いのりて助たすけむと
 危あやふき路みちを谷底たにそこに
 降りてやうやう三人さんにんが
 命いのちを助たすけ喜よろこびて
 荒野あらのヶ原がはらを打うちわたり
 ここ迄まで進すすみ来きたりけり
 道の行手ゆくてに諸々もろもろの
 悩なやみに會あひて玉たまの緒をの
 命いのちも危あやふき所ところをば
 月つきの光ひかりに助たすけられ
 ケリナの姫ひめと諸もろとも共に
 心こころ勇いさみてテルモンの
 山やまに現あれます大神おほかみの
 宮居みやゐをさして進すすみゆく
 吾身わがみの上うへぞたのもしき
 ああ惟かむながらかむながら神々かみ々々
 神かみの恵めぐみのいや深く
 教をしへの露つゆの何處どこまでも
 青人草あをひとぐさの身みの上うへに
 降ふらさせ玉たまへ月照つきてるの
 皇大神すめおほかみの御前おんまへに

赤心籠めて願ぎまつる

ああ惟神々々

御靈幸ひましませよ

ケリナ姫は優しき聲を張上げて又もや歌ひつつ進み來る。

ケリナ 天津日かげは西山に 傾き玉ひ東の

草野を分けて昇ります 月照彦の御光は

草葉の露に悉く 宿らせ玉ひて吾々が

行手の道を守ります 野山の猛き獸や

いと恐ろしき毒蟲も 神の恵に抱かれし

吾身を害ふ事ならず 先を争ひ逃げ出し

吾等は無事にテルモンの 父の館に久々に

歸りゆく身となりけり 吾足乳根の父母は

變らせ玉ふ事もなく 神の御前に朝夕に

いと忠實に仕へますか

戀しき姉のデビス姫

いかに此世を果敢みて

暮させ玉ふことならむ

妾が今宵歸りなば

父と母とはいふも更

戀しき姉の君迄も

必ず喜び迎へ入れ

吾生命を救ひたる

エミシの君を尊みて

厚く待遇し玉ふべし

思へば思へば有難や

戀の迷ひの夢も醒め

心を月に照らしつつ

夏の夜路を歸りゆく

吾身の上ぞ樂しけれ

ああ惟神々々

御靈幸ひまませよ

旭は照るとも曇るとも

月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共

星は空より墜つる共

吾身を救ひ玉ひたる

三五教の大御神

求道居士が師の君の

恵はいかで忘るまじ

命の親の師の君と

手を携へて行く野路は

如何なる曲の現はれて 行手にさやる事あるも

いかでか恐れむ 惟神 尊き神の御守りに

いと安々と歸りゆく ああ惟神々々

御靈幸ひ玉へかし

と歌ひつつ、方岩の閒近に歸つて来た。

求道居士はケリナ姫と共に漸く方岩の傍に着いた。草の中にウンウンと怪しい
聲が聞えて来るのでツと立止まり、よくよく見れば何者が半死半生の態で呻吟い
てゐる。

求道「ハテナ、二三人の人間が斯様な所で倒れてゐるやうだ。大方最前のベル、
ヘル如き悪人に金を奪はれた上、切られて苦んでゐるのだらう、何は兔もあれ、
此儘見逃して通る譯には行かぬ。ケリナさま、貴女は此岩に腰かけて待つてゐて
下さい、一寸調べてみますから……」

ケリナ「ハイ、妾何だか、氣にかかつてなりませぬワ、私の姉さまぢやムいます

まいかな。先づ第一女の方から調べて下さいませ。此衣類から考へますれば女らしうムいます」

求道は月にピカピカ光つてゐる衣装を目當に近よつて見れば、耳から多量の血糊を出し、妙齡の女が倒れてゐた。

求道「ああこれはどこかの貴婦人だ。一通の家の娘ではないやうだ。コレ、ケリナさま、一寸來て御覽、此衣装と云ひ、どうも淨行の嬢さまらしいムいますよ」

ケリナはハツと胸を轟かし乍ら、側近く寄添ひ、よくよく顔をみれば、擬ふ方なき姉のデビスであつた。ケリナは見るよりアツと許りに仰天し、其場に倒れて了つた。求道居士は驚いて、四邊に光る水を掬ひ、先づ第一にケリナの面部に注ぎ漸くにして呼生け、ヘタヘタになつてゐる姫を方岩の上に運びおき、自分の蓑を布いて、其上に寝させ、デビスの介抱にかつた。デビスはウンと息吹返し、四邊を見まはし乍ら修驗者の姿を、不思議相に凝視てゐる。求道はヤツと安心して、

求道「モシモシ、貴女はテルモン山の神館に坐します小國別様のお嬢さまぢやム

いませぬか。拙者は三五教の修験者エミシでムいます。決して悪い者ぢやムいませぬから、御安心なさいませ」

デビスは此言葉を聞いて安心し、頭部の痛みを抑へ乍ら、

デビス「どうも危い所をお助け下さいまして、此御恩は海山にも譬へ難う存じます。悪者に出會し、頭部を擲りつけられ、氣が遠くなつて居りました。貴方様がお通り下さらなかつたら、妾は最早千秋の恨を呑んで此世を去つたに違ひありません。どうも有難うムいました。ああバラモン大神様、よくマア助けて下さいました。惟神靈幸はひませ」

と合掌してゐる。ケリナ姫は姉のデビスと聞いて嬉しさに堪へず、方岩から下り來つて、デビスの手を執り、涙の聲を絞り乍ら、

ケリナ「姉上様、お懐しう存じます、私は妹のケリナでムいます。御兩親様や姉上様に御心配をかけまして誠に申譯がムいませぬ。何卒お許し下さいませ。そして御兩親は御無事でゐられますかな」

と疊みかけて問ひかけた。デビス姫は頭がフラフラとしてややもすれば氣が遠く

なり行くのをキツと氣を張りつめて、妹の手を握り、

デビス「ああ戀しき妹であつたか、不思議な所で會ひました。ようマア無事でゐて下さいました。モウ之で私は命が亡くなつても、あなたの顔さへ見れば得心でムいます」

ケリナ「お姉様、氣を確に持つて下さいませ。そんな心細い事を云はない様に頼みます。さぞエライお怪我でお苦しうムいませうが之から私が館へ歸り、心限りの御介抱を申上げますから御安心なさいませ。キツと神様の御神徳で御全快なさいますからな。貴方は今此修驗者に助けられたのですよ。私も此お方に命を助けられ、今送つて戴いて、御兩親の館へ歸る途中でムいます。どうしてマアこんな慘酷しい目にお會ひなされたのでムいますか」

デビス「實の所は大黒主様のお寶、如意寶珠の神寶が紛失致しまして、それが爲に父上は大變な御心配を遊ばし、病氣に取りつかれ、御老體の事とて、日に日に病は重る許り、そこへあなたの行方が分らなくなつたものですから、益々御心配を遊ばし……私はとても命は長持てはせないが、せめて生前にケリナに一目會う

て死しにたいものだ……とお歎なげき遊あそばすので、私わたしは立つてもゐてもをれなくなり、
今日けふで三七廿一日さんしちにじふいちにちの間あひだ、國くに人が恐おそれて晝ひるさへも、よう近ちかづかない、魔まの山やまと稱となへ
られてるスガの山やまの森しんりんに通かよひ、アン・ブラツクの瀧たきにかかつて、荒行あらきやうをすませ、
今日けふは行ぎやうのあがり、此處ここ迄までやつと歸かへり、方岩はこいはの上うへで満願まんぐわんの御禮おれいや祈願きぐわんを籠こめて
ゐる最中さいちゆう、二人ふたりの悪者わるものが現あらはれて、こんな目めにあはしたのでこゝいませよ。ああ修しゆ
驗げん者じゃ様さまのお蔭かげ、妹いもうとが助たすけられ、私わたし迄までが助たすけられたとは、何なんたる深ふかい因縁いんねんでこゝいませ
せう。修驗しゆげん者じゃ様さま誠まことに有難ありがたうこゝいませ。茅屋あばらやなれど、吾館わがやかたへお越こし下くださいまして、
緩ゆるり御逗留ごとうりゆう下くださいませ。定さだめて兩親りやうしんは申まをすに及およばず、數多あまたの役員やくゐんや信者しんじゃも喜よろこぶこ
とでこゝいませう』
求道きうだう『ハイ有難ありがたうこゝいませ、申まを上げたことは海山うみやまこゝいませが、貴女あなたは大變たいへんな御負ごふしや
傷うづをしてゐられことますから、お氣きを揉もませ、種々いろの事ことを聞きかせては、却かへつてお障さばりに
なりますから御全快ごぜんくわいの後のち緩ゆるりと申まを上げます。何卒どうぞ氣きを緩ゆるりと落着おちけて下くださいませ
デビス『ハイ有難ありがたうこゝいませ、何分なにぶん宜よろしうお願ねがひ申まをします』
ケリナ『お姉あねえさま、あなたを苦くるめた奴やつは此處ここに倒たふれてゐる兩人りやうにんではこゝいませぬか』

此言葉にデビス姫は後振返りみれば、以前の悪者が二人大の字になつて唸つてゐる。

デビス「ああ此賊でムいます。鬼春別將軍だと法螺を吹いて居りましたが、どうで碌な奴ぢやムいますまい」

此言葉に求道居士はハツと胸を躍らせ、眞青な顔をし乍ら、

求道「ハテさて淺ましい事だ、ゼネラル様は又もや邪道に逆轉遊ばしたのかなア。何した悪魔が魅入れたのだらう。何は免もあれ、實否を調べてみよう」

と心に嘯き乍ら、よくよく見れば、以前のベル、ヘルの兩人であつた。

求道「ああ此奴は、ケリナさま、最前吾々を殺さうとしたベル、ヘルの兩人です。テもさても困つた奴ですなア」

ケリナ「何と呆れた者ですなア。併し何程悪人だとして、此儘放つておけば死んで了ひますから、助けておやりなさいますでせうなア」

求道「尤もです、何程悪人でも見捨てて行く譯には行きませぬ。吾々が悪人か、此男が悪人か、到底人間では分りませぬ。仁慈の神様は吾々の心を矯直さむと、

此等兩人をお使ひ遊ばし、お前の心は此やうなものだとお示しになつてるのかも知れませぬ。此等兩人を使つて、吾々に苦集滅道の眞諦をお示しになつたのかも知れませぬ。さうすれば此兩人は吾々の絶好唯一のお師匠様と思はねばなりません。ああ惟神靈幸倍坐世^{かむながらたまちはへませ}」

と水をくくんで、兩人の介抱を懇切にやつてゐる。漸くにして二人は氣がついて起き上り、血みどろの體を曝して、求道の前に兩手を突き自分の不都合を涙と共に謝罪した。求道は二人の心を憐れみ、力限りに祈願を籠め、懷より、照國山の溪間にて採取したる石綿を取出し、血糊を拭ひ取り天の數歌を二三回繰返した。

ヘルは涙を流し乍ら、ヘル「貴方は求道様でムいましたか。命を助けて頂き乍ら、自我心の欲にからまれ、こんな不心得な事を致しました。之は姫様の衣装からぼつたくつた寶玉でムいます。スツパリお返し申します。何卒之をお受取り下さいませ」

と懷から差出すを、ベルは目敏く眺め、横合からグツと奪ひ取り懷に捻ぢ込み、足をチガチガさせ、丈餘も伸びた草の中に身を隠し、何處ともなく消えて了つた。

求道居士はヘルの背中にデビス姫を負はせ、神言を奏上し乍らケリナと共に後先になつて、月夜の露路を踏み分け、テルモン山の神館を指して歸り行く事となつた。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館 松村眞澄録)

第四篇 三五開道

第一五章 猫背(一四四五)

三千彦 巖の御霊と現れませる

高皇産靈の大御神

瑞の御靈と現れませる

神皇産靈の大御神

珍の御水火に現れませる

三五教の大神は

埴安彦や埴安姫の

神の命を世に降し

天地百の神人の

靈を淨め天國の

清き聖場に救はむと

心を配らせ玉ひつつ

神素盞鳴の大神に

其神業を任せ玉ひ

茲に瑞の大神は

神漏岐神漏美二柱

神の御言を天地に

麻柱奉り常暗の

世を平けく安らけく

治めて松の御世となし

日出の守護に復さむと

百の司を養成し

豊葦原の中津國

國の八十國八十の島

残る隈なく巡らせて

天國淨土の福音を

擴充せしめ玉ひけり

天足の彦や胞場姫の

曲のすさびにつけ入りて

此世を紊す曲津神

八岐大蛇や醜狐
曲鬼共は天の下

治むる國の司人
其外百の人々に

憑りて所在曲わざを
縱横無盡に敢行し

日に夜に世界を汚し行く
醜のすさびぞうたてけれ

齋苑の館の宣傳使
玉國別の弟子となり

神の教を四方の國
傳へむものと眞心の

思ひは胸に三千彦が
ライオン河を渡りてゆ

廣野の中に日をくらし
やむなく眠る露の宿

暗路を辿る折柄に
バラモン教の落武者が

幾百人とも限りなく
手に手に兇器を携へて

三五教の宣傳使
塵殺せむといきり立ち

吾一行の身邊を
十重や二十重に取圍み

劍をかざし石を投げ
勢猛く攻め來る

玉國別の師の君や
眞純の彦は言靈を

力ちから限かぎりに打うち出だして

防ぼう戦せんしたる折をりもあれ

敵てきの突つき出だす槍やり先さきに

股ももをさされて伊いた太た彦ひこが

其その場ばにドツと倒たふれ伏ふす

見みるより驚おどろき眞ます純み彦ひこ

伊いた太た彦ひこ小こ脇わきにかい込こんで

敵てきの重ぢゅう圍ゐを切きりぬけつ

何いづ處こともなく逃にげ行ゆきぬ

吾わが師しの君きみも大おほ勢ぜいに

取とり圍かこまれて何ど處ことなく

姿すがたを隠かくし玉たまひける

後あとに殘のこりし三み千ち彦ひこは

俄にはかに言こと靈たま澁しぶりきて

詮せん術すべもなき悲かなしさに

命いのちカラガ圍かこみ

突とつ破ぱし乍ながら漸やっくに

吾わが師しの跡あとを尋たづねつつ

此こ處こ迄まで進すすみ來きたりけり

ああ惟かむ神な々々ながら

尊たふとき神かみの御おん守まもり

吾わが師しの上うへに顯あれまして

神かみに受うけたる使し命めいをば

完う全まらに委つ曲ばらに果はすべく

惠めぐみの露つゆを賜たまへかし

眞ます純みの彦ひこは今いま何いづ處こ

伊いた太た彦ひこ司つかさの槍やり創きづは

最も早はや癒いえしか或あるは又また

深手ふかてに惱なやみ山奥やまおくに 隠かくれて病やまひを養やしなふか

聞きかまほしやと思おもへども 曇くもりし靈たまの吾々われわれは

神かみに伺うかがふ由よしもなく 道みちの行手ゆくてを氣遣きづかひつ

バラモン教けうの籠こもりたる テルモン山ざんの近ちかく迄まで

知らしず知らしずに着つきにけり 油斷ゆだんのならぬ敵てきの前まへ

企たくみの穴あなの陷おとしあな 數多あまた拵こしらへ三五あななひの

教司をしへつかさの來きたるをば 手具脛てぐすねひいて待まつと聞きく

ああ惟かむながらかむながら神々々 尊たふとき神かみの御前おんまへに

吾師わがしの君きみを始はじめとし 吾等われら一行いっかうの幸運かううんを

謹つつしみ敬うやまひ願ねぎまつる』

と密々ひそびそ唄うたひ乍ながら、テルモン山ざんより流ながれ落おつるアン・ブラツク河がはの川邊かはべりに着ついた。

頃ころしも夏なつの半なかばにて半圓はんえんの月つきは西天せいてんにかかり、利鎌とがまのやうな鋭すゑどい光ひかりを投なげてゐる。

三千彦みちひこは日ひの暮くれたのを幸さいはひ、川堤かはどてに腰こしをおろし、小聲ここゑになつて天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、

終つて獨り言、

三千「ああ、水の流れと人の行末、變れば變るものだなア。玉國別の師の君のお

伴をなし、去年の冬齋苑の館を立出でてより、浮つ沈みつ、種々雑多の艱難苦勞、

其中にも吾師の君は、懷谷に於て猿に眼を破られ玉ひ、止むを得ず祠の森に立て

籠り、御神勅のまにまに、祠の宮を建設遊ばし、吾等三人の弟子と共に潔く月の

國ハルナの都へ、神の依さしのメッセージを果たさむと、勇み進んで來る折しも

俄の雨にライオン河の大激流、目も届かぬ許りの川巾を水馬に跨り、命カラガラ

此方へ渡り、日を暮らして、廣野の中に一夜を眠る時しも、バラモン教の殘黨數

多襲ひ來り、吾友の伊太彦は敵の鋭き手槍に刺され、生死の程もさだかならず、

師の君を初め眞純彦は今何處へ行かれたか、何の便りも夏の夜の、月に向つてな

く涙、乾く由なき袖の露、憐れみ給へ月照彦の神」

と述懐を述べ、一生懸命に祈つて居る。

三千彦は漸くにして、川の堤の青草の上に眠に就いた。澤山の蚊が人間の匂ひ

を嗅ぎつけて、珍らしげに集まり來り、ワンワンワンと厭らしい聲を立て、三千

彦の體一面に折重なつて喰ひついでゐる。此時俄にレコード破りの川風吹き來り、堤上に眠つてゐた三千彦の體を鞆の如く轉がして、あたりの泥田の中へ吹き込んで了つた。三千彦は驚いて立ち上らうとすれ共、泥深くして腰のあたりまで體がにえこみ、何うする事も出來ず、チクチクと身は泥田に没し、最早首丈になつて了つた。此儘にしておけば全身泥に没し、三千彦の生命は既に嵐の前に燈火の如き運命に陥つて了つた。三千彦は一生懸命に天津祝詞を奏上し、せめて肉體は泥田の中に埋めて死す共、吾精靈を天國に救はせ玉へと、聲を限りに祈つてゐる。斯かる所へ黒い四つ足の影、何處ともなく現はれ來り、三千彦の體の圍の泥土をかきのけ、泥のついた着物を喰わへて、自分も亦體を半分以上泥土に没し乍ら、漸く堤の上へ救ひ上げた。三千彦は如何なる獸か知らね共、自分を助けてくれたのは、全く神様の使に違ひあるまいと、雙手を合せて、黒い獸を一生懸命に拜み、泥だらけの着物を着けたまま川の淺瀬に飛入り、ソロソロ洗濯を始め出した。黒い影の獸は復川中にバサバサと飛込み、自分の體を洗つてゐる。

三千彦はザツと衣類の洗濯をなし、夏の事とて、白く焼けた河原の砂利の上に

着物を干し、自分は蚊を防ぐ爲に、全身を水に浸けて夜を明かすこととなつた。獣の影は何時しか見えなくなつてゐる。夏の一夜を漸く明かし、能く能く自分の衣類を見れば、着物一面に毛の生えた如く、厭らしい蛭が喰付いて居る。粘着性の強い蛭で容易におちない、手を以て落とさうとすれば手に喰付き、どこ迄も離れてくれぬ。『エー一層の事、此着物は川へ棄て、裸の道中で、行く所迄行つてやらうか』と思案を定めてみたり、『いやいや待て待て、夜分になれば、又蚊の襲撃を防ぐ事は出来ぬ、ぢやと云つてこれ丈澤山の蛭のついた着物を身につけば又血を吸はれる、ハテどうしたらよからうか』と身の不遇を嘆き、再び堤に上つて、涙にくれてゐた。

遙向の方より夜前見た黒い獣が矢を射る如く此方に向つて走つてくる。これは初稚姫が三千彦の難儀を前知して、スマートに言ひ含め、救援に向はしめ玉うたのである。スマートは、立派なバラモン敎宣傳使の服を喰わへて來た。そして三千彦の前に二聲三聲、ワンワンと吠乍ら、尾を振つて、之を着よとすすむる如き形容を示した。三千彦は感涙に咽び乍ら、

三千みち「ああお前は畜生ちくしやうにも似にず、賢いかしこ犬いぬだなア、よう助たすけてくれた。キツと神様かみさまのお使つかひに違ちがひなからう。ついては此服このふくは私わたしが頂戴ちやうだいする。併しかし乍ながらバラモン教けうの宣せん傳でん使しでんしふくだ。之これも何か神様かみさまの深ふかい思召おぼしめしがあるだらう。之これを幸さいはひ、バラモン教けうの宣せん傳でん使しと化ばけ込んで、此このテルモン山ざんを向方むかうへ涉わたつてみようかなア」
と獨ひとりごちつつ、手早てばやく服ふくを身みに纏まとうた。フツと足許あしもとを見れば、最早もはや犬いぬの影かげはなくなつてゐた。遙方はるかむかうの禿山はげやまを驅かけ登のぼる犬いぬの影かげ、猫ねこほどに見みえてゐる。三千彦みちひこは淺あさ瀬せを渡わたつて西岸せいがんへ着つき、ワザとバラモンの宣せん傳でん使し氣取きどりになつて、經文きやうもんを唱となへ乍ながら進すすんで行く。

六十許ろくじふばかりの白髪交しらがまじりの婆々ばばアが二人ふたりの侍女じぢよを伴ともなひ、杖つゑをつき乍ながら此方こちらに向むかつて進すすみ來くる。三千彦みちひこは道みちの片方かたへに立止たちとまり、「ハテ不思議ふしぎな婆々ばばアだ。毘舍びしゃや首陀しゆだとは違ちがつて、どこ共ともなしに氣高けだかい所ところがある。之これは大方おほかた小國別をくにわけの奥方おくがたではあるまいか」と獨ひとりごちつつある所ところへ早はやくも三人さんにんは近ちかづき來きたり、
婆ばば「お前まへさまはバラモン教けうの宣せん傳でん使しと見みえるが、私わたしはテルモン山ざんの館やかたを守まもる小國別をくにわ別の妻つま小國姫こくにひめでごいます。何卒どうぞむさ苦くるしい所ところでごいます、一寸立ちよつとよつて下ください

ますまいか、そしてお名は何と申しますか」

と矢つぎ早に尋ねられ、三千彦は俄に假の名を思ひ出す譯には行かず、

三千「ハイ私はお察しの通り、バラモン教の宣傳使でムいます。此度、鬼春別將

軍様の陣中に交はり、宣傳使専門の役を勤めて参りました所、お聞及びもムいま

せうが、鬼春別將は敵の爲に手いたく敗北遊ばし、やむを得ず私は只一人で此處

まで参つたのでムいます。テルモン山の御舊蹟を拜したいと存じ、ヤツとのこと

で夜を日についで、靈地へ足を踏み入れたとここでムいます」

と長い口上を云つて、其間に自分の名を考へ出さうとしてゐる。もしもバラモン

教の宣傳使や錚々たる人物の名に匹敵した事を喋つては直に看破さるる虞がある

と氣遣ひ、どう云つたら無難であらうかと考へた末、今渡つて來た川の名を思ひ

出し、俄に元氣よく、

「私は宣傳使と云つても、ホンのホヤホヤでムいますから、名のあるやうな者で

はムいませぬ、アン・ブラツクと申すへボ宣傳使でムいますが、何卒一度お館に

参拜をさして頂きたいものでムいます」

姫「あ、左様でムいますか、貴方のお名はアン・ブラツク様でしたか、何と目出たいお名でムいますなア、此アン・ブラツク川は昔から濁つた事のない清川でムいますが、其名を負はせ玉ふ宣傳使に出會うとは、何といふ結構な事でせう。之でテルモン山の館も、萬世不動の基礎が固まるでせう。實の所は夢のお告に「アン・ブラツク川の岸邊に行け、さうすればお前を助ける眞人が現はれる」との事でムいましたので、信賴ない夢を力として参りましたが、矢張り神様のお告と見えて、尊い名の宣傳使に會ふ事が出来ました。ああ有難い有難い」

と嬉し涙をたらし乍ら合掌する。三千彦は眞面目な顔して、

三千「ハイ承知致しました。然らばお世話に與りませう」

姫「早速の御承知、満足に存じます。……コレ、ケーや、セミスや、宣傳使のお荷物を持たして頂きなさい」

ケー「ハイ何でも持たして頂きますが、別に何もお持になつてはゐないぢやムいませぬか」

姫「それでもお背に澤山の荷物を負うてゐらつしやるぢやないか」

ケー「奥様、あれは荷物ぢやムいませぬ、宣傳使様が猫を負うてゐらつしやるのですよ。なア、セミスさま、さうぢやムいませぬか」

三千彦は何時の間にやら背中(せなか)にブクブクとした瘤(こぶ)が出来(でき)てゐたが、背中(せなか)の事(こと)と少しも氣(き)がつか(つか)なかつた。

三千「アハハハハ、猫(ねこ)に見(み)えますかな、どうで犬(いぬ)に……」

と云(い)ひかけて俄(にはか)に口(くち)をつぐみ、

三千「犬(いぬ)か猫(ねこ)のやうな靈(みたま)ですから、仕方(しかた)がありませぬ。まアさう仰(おつ)しやらずに可愛(かあい)がつて下(くだ)さいませ」

小國(をくに)姫(ひめ)は「サア参(まゐ)りませう」と先(さき)に立(た)つて行(ゆ)く。三千彦(みちひこ)は半安(はんあん)半危(はんき)の面持(おももち)にて門内(もんない)深(ふか)く進(すす)み入(い)り、小國(をくに)姫(ひめ)と共(とも)に直(ただ)ちに神殿(しんでん)に至(いた)つてバラモン教(けう)の經文(きやうもん)を稱(とな)へた。三千彦(みちひこ)は只(ただ)聞(き)き覺(おぼ)へに經文(きやうもん)のそしり走(はし)り知(し)つてゐる許(ばか)りで、餘(あま)り大(おほ)きな聲(こゑ)を出(だ)し、間違(まちが)つた事(こと)を言(い)つては、忽(たちま)ち看破(かんぱ)さる事(こと)を恐(おそ)れ、ワザと小聲(こゝろ)になり、教服(けうふく)に添(そ)へてあつた數珠(じゆず)を爪(つま)繰(く)り乍(なが)ら、一(いつ)生(しやう)懸命(けんめい)に念(ねん)じてゐる。何(いつ)時(つ)の間(ま)にやら三千彦(みちひこ)の猫背(ねこぜ)は元(もと)の通(とほ)りに痕跡(あと)もな(な)く直(なほ)つてゐた。これはスマートの靈(れい)が三千彦(みちひこ)を無(ぶ)

事に館内に送り且つ其身邊を守らむが爲であつた。スマートは館の床下に隠れて守つてゐる。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館 松村眞澄録)

第一六章 不臣(一四四六)

神殿の拜禮が終ると共に三千彦は小國姫の居間に招ぜられ、茶菓の饗應を受け朝飯を頂き等して寛いでゐる。朝飯が済むと二人の侍女は此場を立ち去り小國姫は憂ひ顔をし乍ら現はれ來り、

姫「アン・ブラツク様、よくまアお越し下さいました。折入つてお願い致し度い事がムいですが、聞いては下さいませうまいかな」

三千「ハイ、私の力に及ぶ事ならば如何なる御用も承はりませう。御遠慮なく仰せ下さいませ」

姫ひめ「有難ありがたうごさムります。早速さつそくながらお伺うかがひ致いたしますが、當館たうやかたは貴方あなたも御承知ごしやうちの通りとほバラモン教けうの大棟梁だいつりやう大黒主おほくろぬしの神様かみさまが、まだ鬼雲彦おにくもひこと仰おほせられた時分じぶん、ここを第一だいいちの聖場せいぢやうとお定め遊あそばしたバラモン發祥はつしやうの舊跡きうせきでごさいます。吾々われわれ夫婦ふうふの名なは國彦くにひこ、國姫くにひめと申まをしましたが、鬼雲彦おにくもひこ様より御名おなを頂いたいて今は小國彦をくにひこ、小國姫をくにひめと申まをして居をります。就ついては當館たうやかたの重寶ぢうほう如意寶珠にょいほつしゆの玉たまが紛失ふんしつ致いたしまして今いまに行衛ゆくゑは知しれず、百日ひやくにちの間に此玉このたまを發見はつけんせなければ吾々われわれ夫婦ふうふは死ししてお詫わびをせなくてはならない運命うんめいに陥おちつて居をります。吾夫わがをとこはそれを苦くにして大病たいびやうに罹からせ玉たまひ、命旦めいたん夕せきに迫せまると云いふ今日こんにちの場合ばあひでごさいます。悪い事わるいことが重かさなれば重かさなるもので、今いまより三年さんねん以前いぜんに妹娘いもつとむすめのケリナと云いふもの、仇あだし男をとこと共ともに家出いへでを致いたし、今いまに行衛ゆくゑも分わからず、夫婦ふうふの心配しんぱいは口くちで申まをすやうの事ことではごさいませぬ。何卒どうぞ御神徳ごしんとくを以もつて如意寶珠にょいほつしゆの所在ありかをお知しらせ下くださる譯わけには參まぬりませぬか」

三千彦みちひこは天眼通てんがんつうが些ちつとも利きかないので、こんな問題もんだいを提出ていしゆつされても一言いちごんも答こたへる事ことが出来できない。然しかし乍ながら、何なんとかして此場このばのゴミを濁にごさねばならないと一生懸いっしやうけん命めいに大神おほかみを念ねんじ乍ながら事こともなげに答こたへて云いふ。

三千 『お話を承はれば實に同情に堪えませぬ。必ず御心配なさいますな。私がこ
こへ参りました以上は必ず神様のお綱がかかつて引寄せられたに相違ひいませぬ。
ここ一週間の間御祈念致し、玉の所在を伺つてみませう』
と其場逃れの覺束なげの挨拶をして居る。溺るる者は藁條一本にも頼らむとする
喩の如く、小國姫は三千彦の言葉を唯一の力とし大に喜んで笑を湛へ乍ら、
姫 『御親切に有難うございます。何分に宜しう願ひ致します。そして厚かましい
お願ひでムいですが、夫の病氣は如何でムいませうかな』
三千 『先づ一週間心魂を籠めて祈る事に致しますせう。神様は如何しても必要があ
ると思召したら命を助けられるでせうし、又靈界にどうしても御用があると
したら命をお引き取りになるでせう。生死問題のみは如何ともする事は出来ませ
ぬ。之は神様にお任せなさるより外に道はありますまい』
姫 『仰せの如く何時も私も信者に生死問題に就いては、人間の如何ともする所
ないと言つて居ますが、さて自分の身の上に關するとなるとツイ愚癡が出たり、
迷ふたりしてお恥しき事でございます。それから、も一つ申兼ねますが娘の行衛で

△います。彼娘はまだ無事に此世に残つて居るでせうか。或は悪者の爲めに殺されたやうな事は△いますまいか。それ許りが心配で堪りませぬ」

三千彦は何れも此れも宜い加減な返事はして居れない。エー、ままよ、一か八かと決心して、

三千「娘さまの事は御心配なさいますな。屹度神様のお恵で近い内に無事にお歸りになります」

姫「ハイ、有難う△ります。そして娘は今頃は何處の國に居りますか。一寸それを聞かして頂き度いもので△います」

三千彦はハツと詰まり乍ら肝を放り出して、
三千「つい近い所に隠れて居られます。まア御心配なさいますな。臆て歸られま

すから、然し詳しい事は御神前で伺つて來なくては申上兼ねますから」
姫「成程、さうで△います。何卒御緩りなさいましたら、一度御神勅を伺つて

下さいませ」
三千「ハイ、承知致しました。これから早速伺つて参ります。併し乍ら誰方もお

出でにならぬやうに願ひます』
と云ひ残りし神殿さして進み行く。

三千彦は神殿に進み小聲になつて天津祝詞を奏上し、終つて、

三千彦「私は大變な難問題にぶつつかりました。併し乍ら苟くも三五の宣傳使、宜

い加減な事は申されませぬ。もし宜い加減の事を申し、化けが露はれたなら、そ

れこそ神様のお名を穢し、師の君に對しても相濟みませぬからハツキリした事を、

ここ一週間の間に私の耳許にお聞かせ下さいますか、但は夢になりと知らして下

さいませ。そしてなる事なら吾師の君の所在のほどもお示し願ひます』

斯く念じて暫らく瞑目して居ると忽ち背中がムクムクと膨れ出し、犬の様なも

のが負ぶさつた様な重味が感じて姿は見えねど、少し掠つた聲で耳許に囁いた者

がある。之はスマートの精霊が三千彦の身を守るべく諭して呉れたのである。さ

うして其示言は左の通りであつた。

精霊「三千彦殿、其方は大變に心配を致して居るが、玉國別様一行は臆て近い内

に此館でお目にかかれるであらう。そして當館の重寶如意の寶珠は家令の悴ワツ

クスと云ふ者が或目的のために隠して居るのだから、之も只今現はれるであらう。儂は初稚姫の身邊を守るスマートと云ふものだが、小國姫に對しては決してワツクスが匿して居る等と云つてはなりません。然し直様、現はれる様に致すから心配致すなと云つて置きなさい。又此家の主人小國彦はここ暫らくの壽命だから、それは諦める様に云ふて置くが宜い。又娘のケリナ姫は三五教の修驗者に助けられ、近い中に歸つて来る。之も安心するやうに知らしてやりなさい。尋ねる事は、もう之でないかな」

と小さい聲が聞えて来る。三千彦は初めて天耳通が開けたものと考へ、非常に喜んで大神に感謝し、莞爾として小國姫の居間に引返した。小國姫は三千彦の何處ともなく元氣に充ちた顔色を見て、

姫「こりや、些と有望に違ひない」

と早くも合點し、さも嬉しげに、

姫「これはこれはアンブラツク様、御苦勞様でムいました。御神徳高き貴方、定めし神様のお告げを直接お聞きなさいましたでせう。何卒お示し下さいませ」

三千「イヤ、さう褒められては恐れ入ります。何を云つてもバラモン教へ這入つてから、俄に拔擢されて宣傳使になつたものの、經文も碌にあがりませぬ。只信念堅實と云ふ廉を以て宣傳使にして貰つたのですから、バラモン教の教理は少しも存じませぬが、信仰の力によりまして天眼通、天耳通を授けて頂いて居ります。それで何んな事でも鏡にかけた如く知らして頂けます」

姫「イヤ、結構で△います。今の宣傳使は難い小理窟ばかり云つて、朝から晩まで經文の研究に日を暮し、肝腎の信仰が缺けて居ますから、神様のお取次であり乍ら、些とも大神の意思が分らないので△いますよ。何を云つても不言實行が結構で△います。さうして神様は何と仰せられましたかな」

三千「はい、明白した事は分りませぬが私のインプレッションに據りますれば、此お館の重寶は近い中にお手に這入ります。屹度私が貴女にお手渡しをしますから御安心下さいませ。さうしてお嬢さまは日ならずお歸りになります。然し乍ら旦那様はお氣の毒ながら天國へ御用がおりなさるさうだから先づお諦めなさるが宜しからう」

姫「どうも有難うムりました。神様の御用で昇天するとあれば止むを得ませぬが、成る事ならば夫の生存中に如意寶珠の在所が分り、又娘の顔を一目見せ度いものでムいますが、如何でムりませう、これは叶ひますまいかな」

三千「イヤ、御心配なさいますな。之は屹度現はれて参ります。そして御主人が如意寶珠を抱き、片手に姫さまを抱いて喜び勇んで國替をなさいますから、まア一時も早く神様のお繰合せをして頂くやう御祈願を成さませ。私も一生懸命に御祈願致します」

姫「ハイ、有難うムいます」

と嬉し涙にかき暮れる。斯かる處へ家令のオールスチンは衣紋を繕ひ現はれ來り、オールス「もし、奥様、旦那様が大變お苦みでムいます。そして奥を呼んで來て呉れと仰有いますから何卒早く側へ行つて下さいませ。私は宣傳使のお側にお相手をつかまつから」

姫「アン・ブラツク様、今家令の申した通り、主人が待つて居りますから一寸行つて参りますから何卒御緩りとお休み下さいませ」

と言ひ捨てて忙しげに此場を立つて行く。

オールスチンは三千彦に向ひ、

オールス「宣傳使様、どうも御苦勞様でムいます。お聞及びの通り此お館には大事が突發致しまして上を下へと騒ぎ廻つて居ります。どうか貴方の御神徳によりまして、此急場が逃れますやうにお願い致し度うムいます。そして神様の御神勅は如何でムいましたか」

三千「御心配なさいませぬ。如意寶珠の玉は決して外へ紛失はして居りませぬ。此お館に出入する相當な役員の息子が、或目的を抱いて玉を匿して居ると云ふ事が、神様のお告げで分りました。臆て出て來るでムいませう」

オールス「エ、何と仰有ります、あの如意寶珠の寶玉を此身内の者が匿して居ると仰有るのですか。そして此館へ出入する重なる役員の息子とは誰でムいませう。参考のためにお名を聞かして頂き度うムいますが……」

三千「まだ私も修行が足りませぬので、隠した人の姓名まで明白り云ふ事は出来ませぬ。丸顔の色白い男だと云ふ事だけは確に分つて居ります」

オールス「はてなア、妙な事を聞きます。然し乍ら誰が匿してあるにせよ、之を探し出さねば小國彦様の言ひ譯が立たず、又此館の役員迄が大黒主から厳しい罰を受けねばなりません。そしてその玉は近いうちに現はれるでムいませうか」

三千「屹度現はれます。成るべく事を穩かに濟ませ度いと思ひますから、何卒秘密にして置いて下さいませ。互に瑕がついてはなりません」

オールス「成程、仰有る通りでムいます。こんな事が外へ洩れては一大事、一時も早く現はれますやう、そして旦那様に一時も早く安心の行くやう、願つて下さいませ」

三千「ハイ、承知致しました」

斯かる所へ小國姫は再び現はれ來り、

姫「もし、宣傳使様、主人が大變に様子が悪うなりましたから、何卒一つ御祈祷をしてやつて下さいませうかな」

三千「それはお困りです。然らば参りませう」

と云ひ乍ら家令と共に主人の居間に通つた。

小國彦は熱に浮かされて囁言を云つて居る。そして時々、ワツクス
と呻いて居る。ワツクスとは家令のオールスチンが息子である。オールスチンは
之を聞くよりハツと胸を撫で、俯向いて思案に暮れて居る。小國姫は少しく聲を
尖らし乍ら、

姫「これ、オールスチン、今旦那様が夢中になつて「ワツクス　ワツクス」と仰
有るのはお前の悴の名に違ひない。何か旦那様に對し、御無禮の事をして居るの
ではあるまいか。よく調べて下さい。此宣傳使様にお尋ねすれば直分るだらうけ
れど、斯んな事まで御苦勞になるのは畏れ多い事だから、お前、心に當る事があ
るなら包まず隠さず、ワツクスの事に就いて述べて下さい」
オールス「ハイ、心當りと申しては何もムいませぬが、兔も角宅へ歸りまして悴
を調べて見ませう。暫くお待ち下さいませ。然らば奥様、旦那様をお大切に
下さいませ。アンブラツク様、左様ならば一寸宅まで歸つて参ります。何卒宜し
うお願い申します」
と言葉を残し急ぎ吾家を指して歸り行く。

オールスチンは館を出でて吾家に歸る道すがら幾度となく吐息をつき、何事か心に當るものの如く首を傾け乍ら、杖を突きトボトボとして吾家に歸り行く。田圃の稲葉は風に煽られてサラサラと勇ましく鳴つて居る。燕は前後左右に梭をうつ様に黒い羽根の間から白い羽毛を現はし、或は高く或は低く大車輪の活動を稲田の上にやつて居る。寝むたさうに梟の聲はホウホウと家の後の森林から聞えて居る。オールスチンは祕かに吾家の門口に歸つて見ると二三人の人聲が盛に聞えて居る。心にかかるオールスチンは耳をすませて門の戸に凭れ話の様子を立聞きし居たりけり。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館 北村隆光録)

第一七章 強請(一四四七)

オールスチンの館には悴のワックスとエキスとヘルマンの二人が胡床をかいて

ひそひそばなし
密々話に耽つて居る。

ワツクス「お前達二人はさう何遍も何遍も無心に来て呉れては困るぢやないか。

俺もお前の知つて居る通り部屋住だから、さう金が自由になるものぢやない。あの

禿チヤンがうまく死んで呉れたら此家の財産は俺の自由だからどうでもしてや

るが……さう云はずに暫く待つて居て呉れ、さうすれば小國別夫婦は玉の紛失の

咎に依つて職務を取り上げられ、嚴罰に處せられて了ふ、さうすりや俺がこの玉

を發見したと云うて大黒主様に届けたならば、屹度小國別の跡目相續をデビスに

さすに定つて居る。さうすれば俺が玉を發見した褒美として婿になるのだ。モウ

【そこ】に出世がぶらついて居るのだから、さう八釜しう云はずと暫く待つて居

て呉れ、その代り、お前を重役に守り立て、さうして幾何でも金は渡してやるか

らなア。親父に悟られやうものなら、家を放逐され、一も取らず二も取らずにな

つて仕舞ふ。さうすればお前達も困るぢやないか」

エキス、ヘルマンの兩人はワツクスの悪友で常に好からぬ事許り勧めては親父

の金を盗み出させ飲み喰ひに費してゐた。ワツクスは元來が何處かに抜けた所の

ある馬鹿息子である。けれども家令の息子と云ふ事で非常に若い者の仲間には持て囃され、調子に乗つては親父の金を盗み出し、悪友と共に飲食に費つて居た。父のオールスチンは女房には先立たれ、唯一人の悴ワツクスを力とし、目の中に入つても痛くない程愛して居た。それ故段々増長して手にも足にも合はなくなつて仕舞つた。そしてワツクスは小國別の娘デビス姫に戀慕し、明けても暮れてもデビス デビスと口癖のやうに言つて居た。併し肝腎のデビス姫は、馬鹿息子のワツクスを虫蜒の如く嫌ひ、目を細くして言ひ寄る度に、手厳しく肱鐵をかませ恥かしてめ居た。併し乍らワツクスは益々戀が募つて嫌へば嫌ふ程可愛くなり、何とかして目的を達せむものと、エキス、ヘルマンの二人に相談をかけた。狡猾いエキスは一も二もなく嘲笑つて云ふ。

エキス「デビス姫を君の妻にせうと思へば何でもない事だ。如意寶珠をそつと盗み出し隠してやつたなら、きつと監督不行届きの廉によつて小國別夫婦及び家族一同が免職を喰ひ、その上刑罰に處せらるるに定つて居る。まづ第一に其玉を隠し心配をさせてやると、小國別夫婦が、終の果には百計盡きて、「もしもあの紛

失した如意寶珠を探して来た者があつたらデビス姫を遣らう」とか、「婿にせう」とか云ふに定つて居る。先づ其玉を隠すが一番である」

とエキス、ヘルマンが知恵をつけた。そこで薄野呂のワツクスは夜密に奥殿に忍び込み、エキス、ヘルマンと共力して玉を盗み出し、床下を掘つて人知れず隠して置いた。そして當座の鼻塞ぎとして百兩宛渡して置いたのである。併しエキス、ヘルマンの二人は、忽ち酒食に使用つて仕舞ひ、幾度も幾度も弱身をつけ込んでワツクスの所へ無心にやつて来る。其度毎にワツクスもいろいろ工夫して渡しておいた。併し父親の金も、もう無い所迄盗み出して渡して居たのだから、もう幾何請求されても渡す金が無いのである。それ故ワツクスは最早一文も無いから……暫く待つて呉れ、今に願望成就すれば、幾何でも金をやるから……と斷つて居たのである、されどエキスは……此家令の家には金銀が目を剥いてゐるに違ひない、脅迫さへすれば、この馬鹿息子は幾何でも出して来るに違ひ無い……と惡胴を据ゑ聲を尖らし、

エキス「オイ、ワツクス、餘り馬鹿にして貰ふまいかい。金剛不壞の如意寶珠を

命^{いのち}がけで盗^{ぬす}み出し、もし發覺^{はっかく}したら俺^{おれたち}達の命^{いのち}がないのだ。さうして甘い汁^{うま}を吸^すふのはお前^{まへ}許^{ばか}りぢやないか。天^{てん}下一^{かい}品のナイス、デビス姫^{ひめ}さまの婿^{むこ}となり、さうしてテルモン山^{ざん}の神司^{かむつかさ}となつて覇張^{はばり}散^ちらす身分^{みぶん}になれるぢやないか。俺^{おれたち}達^{りやうにん}兩人^{なに}は何^{なに}程^{ほど}お前^{まへ}が出世^{しゅつせ}した所^{ところ}で、デビスを女房^{にようぼう}にする譯^{わけ}にも行^ゆかず、神司^{かむつかさ}にもなれないのだから引^ひき合^あはないのだ。それだからお前^{まへ}から酒代^{さかて}でも貰^{もら}つて酒^{さけ}でも呑^のまねば不^ふ安^{あん}で苦^{くる}しうて、一日^{いちにち}でも斯^かうして居^ゐる事^{こと}が出来^{でき}ない。グツグツ云^いはずに百兩^{ひやくりやう}許^{ばか}り出^ださつしやい。夫^{それ}でなければ自分^{じぶん}達^{たち}も罪^{つみ}になるのを覺悟^{かくご}して、「恐れ乍^{おそ}ら」と罪^{ざいじ}状^{やう}を自^じ白^{はく}する積^{つもり}だ、それでもよいか」

ワツクス「さう大きな聲^{こゑ}で云^いふものぢやない、近所^{きんじよ}に聞^きえたらどうするのだ。俺^{おれ}達の迷^{めい}惑^{わく}のみではない親父^{おやぢ}迄^{まで}が迷^{めい}惑^{わく}するではないか」

エキス「迷^{めい}惑^{わく}したつて何^{なん}でい。俺^{おれ}アもう破^{やぶ}れかぶれた。のうヘルマン、犬骨^{いぬほね}折^をつて鷹^{たか}に取^とられるやうな荒^{あらし}仕事^{しごと}をやらされて耐^{たま}つたものぢやない。此^こ奴^{いつ}はきつと目^{めく}的^{てき}が成^{じやう}就^{じゆ}したが最^{さい}後^ご、自^じ分^{ぶん}の權^{けん}威^ゐを笠^{かさ}に着^きて、俺^{おれたち}達^を反^{はん}對^{たい}に罪^{つみ}に落^{おと}すかも知^しれな

いぞ。それより今^{いま}の中^{うち}に「もぐる」丈^{だけ}は「もぐつ」て甘^{うま}い汁^{じゆ}でも吸^すふて置^おかねば

算盤そろばんが持もてないや。オイ ワツクスワツクスの先せん生せい、俺おれが今いまバラしたが最さい後ご、お前まへの笠かさの臺だいは飛とんで仕舞しまふぞ。百兩ひゃくりやうの命いのちは安價やすいものだ、どうだ買かふ氣きはないか」

ワツクス「百兩ひゃくりやうは安價やすいやうなもの、さう何遍なんべんも百兩ひゃくりやう々々ややくりやうと云いふて來こられては堪たまらないぢやないか。親父おやぢの臍へそ繰くり金が迄まで皆みな貴様きさまに出だしてやつたし、もう逆さかさに振ふつたつて血ちも出でないのだ。些ちつと俺おれの心こころも察さつして呉くれないか。九分くぶく九厘りんと云いふ所ところになつて引ひくり返かへつては詮つまらないぢやないか。俺おれの目的もくてきさへ立たてば、お前まへの思おもふやうにしてやるのだから」

エクス「へん甘うまい事こと云いつて乞食こじきの蝨みみずぢやないが、口くちで殺ころさうと思おもつても其その手てに乗のるやうな哥兄あにいぢやないぞ。末すゑの百兩ひゃくりやうより今いまの五十兩ごじふりやうだ。さつぱりと五十兩ごじふりやうにまけて置おく。サアきつぱりと出だしたり出だしたり」

ワツクス「何程なにほど出だせと云いふても無ない袖そでは振ふれんぢやないか。そんな無茶むちやの事ことを云いはずに、今暫いましばらくの所我慢ところがまんしてくれ、掌てを合あして頼たのむから」

エクス「へん、貴様きさまが掌てを合あして金かねの一兩いちりやうも降ふつて來くるのなら辛抱しんぱうもしない事ことはないが、拜をがみ倒たふさうと思おもつても、そんな事ことに乗のるやうな俺おれぢやないわい。こんな

大きな屋臺骨をした家の悴でありながら、親父の金が無くなつたと云つたつて誰が本當にするものか、人を馬鹿にするない。出さにや出さぬでよいわ。これから俺が一伍一什をデビス姫の所へ知らしに行き、二人が證人となつて報告するからさう思へ。オイ、ヘルマン、こんな奴にかかつて居ても仕方がないわ。さア行かう

と立ち上らうとするをワックスは慌てて手を握り、眞青な顔をしてビリビリ慄ひ乍ら、

ワックス「オイ、エキス、さう短氣を出すものぢやない。暫時待つてくれと頼むのにお前も聞き譯のない男だなア。お前も俺の心を知つとるだらう、有る金を隠して千騎一騎の此場合、誰が無いと云ふものか。些考へて呉れ」

エキス「千騎一騎の場合になつてゴテゴテ云ふ奴は駄目だ。考へも【へチマ】も有つたものかい、薬罐頭の歸つて來ない中に早く出さないと陰謀露見の恐れがあるぞ。貴様は親父が怖いのか。親父が怖いやうな事では伊勢神樂は見られないぞ

……、

親おやの財産ざいさんあてにすれや
薬罐頭やくわんあたまが邪魔じやまになる

と云いふのは俺達おれたちの爺おやぢの事ことだ。貴様きさまらは親おや一人子ひとりこ一人ひとり、羊羹やうかんよりも甘い奴あまやつだから、
貴様きさまが何程なにほど盗ぬすみ出して俺おれに呉くれたとて、悴せがれの命いのちとつりがへだと聞きいたら、滅多めったに
怒おこる氣遣きづかひはない、餘程よほど貴様きさまはケチな奴やつだなア
ワツクス「どうか頼たのみだから、今日けふ丈だけは柔順おとなしく歸かへつて呉くれ、何なんとか又考またかんがへて置おく
からなア」

エキス「俺おれも男をとこだ。一旦いったん口くちへ出だした以上いじやうは滅多めったに恥はぢを搔かいて歸かへるやうな哥兄にいさんぢや
ないぞ。サア、グツグツ云いはずに出だしやがらないか、グツグツ云いふと此鐵拳このてつけんが貴きさ
様の頭あたまにお見舞みまひ申まをすぞ」

と飛とびつかうとする。ヘルマンは慌あわてて後うしろより抱留だきとめ、
ヘルマン「待まった待まった、短氣たんきは損氣そんきだ、大事だいじの前のまへ小事せうじだ、今短氣いまたんきを出だしては
俺達三人おれたちさんにんの首くびは無なくなるぢやないか。首くびが無なくなつては酒さけを飲のむと云いつたつて飲の

めないぢやないか。今日はまア此處の銀瓶でも持つて歸らう、ナア、ワツクス、金の代りに銀瓶ならお前も何とも云ひはすまい」

ワツクス「夫は何卒耐へて呉れ、今親父が歸つて來て調べたら大變だからのう」

エキス「そんなら床の置物が無垢らしいから、彼品を攫つて行かう、これなら千兩や二千兩の價値はあるだらうから」

ワツクス「何卒それだけは耐へて呉れ、親父に見つけられては困るからなア」

エキス「ヘン、二つ目には親父々と吐しゃがつて、親父を煮汁に俺達の要求を

拒絶する考へであらう、同じ穴の貂だ。親父だつて貴様の陰謀をすつかり知つて

居て、素知らぬ顔をしてけつかるのだ。ええもう斯うなつては構ふものか、惡胴を据ゑて百兩渡すか、この無垢の置物を渡すかする迄は、十日でも廿日でも坐り

込んで動かない覺悟を定めやうかい」

ヘルマン「ワツクスの云ふ通り、今日は柔順く歸つて遣らうぢやないか、俺達も

矢張疵持つ足だからなア」

エキス「俺は一旦云ひ出した事は後へは退かぬのだ。馬鹿らしい、男がこれ丈金

銀の目を剥いて居る家へ来て請求すべきものを請求せずして歸る事が出来るものか、貴様もよい腰抜けだなア

ヘルマンはムツと腹を立て、顔を眞つ赤にしながら、腹立紛れに何も彼も忘れて仕舞ひ、

ヘルマン「こりやエキス、悪垂口を叩くにも程がある。俺が腰抜けなら貴様は魂抜けだ。今に目に物見せてやらう、覺悟せよ」

と云ふより早く床にあつた無垢の置物をグツと頭上にさし上げ、エキスを目蒐けて投げつけた。エキスは避け損うて向脛にカンと打ちあてられ、

「アイタタタ」

と云つたきり座敷の中央に倒れて仕舞つた。折柄門口を慌ただしく押し開けて這入つて来たのは此家の主人オールスチンである。

オールス「オイ、ワックス、私の留守中に何を喧嘩して居るのだ。些靜にせないか」

ワックス「へエ、ほんの酒の上で譯もない喧嘩をおつ初めまして誠に申譯がムい

ませぬ」

オールス「さうではあるまい。最前さいぜんから門口かどぐちですつかり立聞たちぎきをした。貴様きさまら三人さんにんは如意寶珠にょいほうしゆを盗ぬすんだ大罪人だいがいにんだ。假令たとへわがこ吾子こと雖いへども許ゆるす事ことは出来できぬ。サア三人さんにんとも手てを後うしろへ廻まはせ」

ワックス「お父とうさま、誠まことに濟すまぬ事ことを致いたしました。併しかし乍ながらもう今日こんにち限り心こころを改あらためますから、何卒どつぞないしやう内證ないしやうにして下ください」

オールス「馬鹿ばかを云いふな、誠まことの道みちに親疎しんその區別くべつはない。オールスチンの悴せがれに貴様きさまのやうな大悪人だいくにんが出来できたかと思おもへば、神様かみさまに對たいし、先祖せんぞに對たいし、申譯まをしわけがない、どうして俺おれの顔かほが立たつか。グツグツ云いはずに罪つみに伏ふくするが好よい。これやエクス、ヘルマンの兩人りやうにん、元もとを云いへばお前達まへたちが悴せがれに知恵ちゑをかつたのだから、お前等まへらの罪つみが最もおもも重いおも、併しかし乍ながら悴せがれも悪いわるいのだから免のがれる譯わけにはゆかぬ。三人さんにん共覺悟かくごしてバラモンのお經きやうでも唱となへたがよからう」

と兩眼りやうがんに涙なみだを湛たたえて居ある。エクスは吃驚びっくりして、エクス「もしオールスチン様さま、誠まことに濟すまぬ事ことでムごまいましたが、是これには貴方あなたの息子むすこ

のワックスも入つて居るので、何卒大目に見て下さい。何卒其筋へ突き出す事だけは許して下さい。その代り玉は直様お返し申しますから」

オールス「玉を還す事は勿論だ。併し乍ら一旦取つた罪はどうしても許す事は出来ぬ。さてもさても困つた事をして呉れたものだなア。この儘にして置いたら御主人の家は断絶、随つて此家令も監督不行届の罪によつて、どんな嚴罰に處せらるるかも知れない。貴様等三人を突出して主家と吾家を守らねばならぬ。斯様な時に悴の愛に引かれて大事を誤るやうなオールスチンではないぞ」

と聲高に叱りつけて居る。三人は平た蜘蛛のやうになつて疊に頭をにぎりつけ、只々詫入る許りであつた。オールスチンは直に神前に額づき「吾子の罪を許させたまへ」と一生懸命に祈つて居る。されど一旦大罪を犯した此三人はどうしても助ける工夫は無。もしも自分の子なるが故をもつて罪を許さば綱紀紊亂の端緒を發し、不公平の譏を受け、誠の道を潰して仕舞はねばならぬ、ああ如何にせむと瀧の如くに落涙して居る。二人は目と目を見合せ、後から細繩を首に引っかけ引倒し折重なつて締め殺さうとして居る。オールスチンは力限りに、防ぎ戦ひ、

逃げ脱れむとすれども力足らず、彼等がなす儘に任すより仕方がなかつた。

ワツクス「オイ、エキス、ヘルマン、俺の親父をさう甚い事をして呉れな、死んで了ふぢやないか。打轉す位はよいけれど、命迄取らうとするのか」

エキス「定つた事だ。此奴の命を取らねば俺達の命が無くなるのだ。貴様の命もなくなるのだぞ。何を呆けて居るのだ。オイ、ヘルマン俺は老耄をバラして了うから、貴様はワツクスをやつつけて了へ」

ヘルマン「よし来た」

とワツクスに喰ひつく。茲に二組の殺し合ひが初まり、ジタン、ボタンと怪しき物音が戸外まで聞えて居る。此物音を聞きつけ慌ただしく飛び込んで来たのは、小國別の僕エルであつた。エキス、ヘルマンはエルの顔を見るより一目散に裏口から雲を霞と山越に逃げて仕舞つた。そしてエルは最前からの喧嘩の顛末や由來を残らず聞いて仕舞つた。オールスチンは漸くにして起き上り首筋の痛みを撫でて居る。ワツクスは、庫の中へ飛び込み、中より錠を卸して慄つて居る。エルは一目散にこの有様を報告せむと、宙を切つて館へ馳歸り行く。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館階上 加藤明子録)

第一八章 寛恕(一四四八)

小國姫は三千彦と共に一閒に入つて心配らし相に、密々と話をしてゐる。

姫「モシ、アンブラツク様、家令の態度がどうも貴方が御出になつてから、何だかソワソワしてゐるやうですから、彼の悴でも若しや玉を隠したのではムいまいか。まいか。吾々夫婦を困らせ窮地に陥れ、娘のデビス姫を女房に致し、良からぬ思惑を立てようとしてゐるのではムいまいか。何うも常から怪しいと思つてゐますが、何を云つても家令の悴ではあり、言ひ出しかねて誠に困つて居ります。

貴方の御考へは何うでムいますな」

三千「モシ貴方、家令の悴が如意寶珠の玉を隠して居つたとすれば、何うなさる考へでムいますか」

姫「左様な事が判れば、何程家令の息子と云つても許す事は出来ずまい」

三千「ここは免も角圓滿に事を済まさなくてはなりません。第一お館の恥になり

ますから……、そして世間へパツとしてからは仕方がありませんから、成るべ

くは内證で済ましてやつたら何うでムいませう」

姫「玉さへ還つて参りますれば、吾々夫婦の不調法にもならず、皆が助かる事な

らば餘り表へ出したくはムいませぬ。併し乍ら之も明瞭した事は判りませぬから

貴方様に伺つて頂き度いと思つて、主人の病氣の看護の際に御居間迄参りました」

三千「貴方が如何なる罪も内済にしてやると云ふ御考へならば申しませう。實は

御察しの通り家令の悴ワツクス、竝にエキス、ヘルマンと云ふ三人の若い者が或

目的の爲寶珠を盗んで隠してゐるのです」

姫「ああ、それで合點が行きました。何うもワツクスの態度がソワソワして居る

と思ふて居りました。家令のオールスチンは極めて忠實な正直な者でムいますか

ら、彼に限つてそんな事をする氣遣はムいませぬが、體は生みつけても、魂は生

みつけぬとか申しまして、英雄豪傑の悴に馬鹿が生れたり、忠臣義士の子に叛逆

人の生れるのは世間に澤山ある習ひでムいますから、家令が貴方の話を聞いて慌
てて歸りましたのも、何か心に當る事があつたのでムいませう。夫に就て僕の工
ルをして様子を考へにやらせましたが何うしたものが未だ歸つて來ませぬ
三千「ヤ、今に歸られます。さうすれば真相が解ります。成る可く之は大業にし
ては成りますまい」

と話す處へ、僕のエルは慌ただしく歸り來り、息を喘ませ乍ら、
エル「モシ奥様、タタ大變でムいます。殺し合ひが始まりました」

姫「ナニ、殺し合が始まつたと……どこかに喧嘩をして居つたのかい」

エル「メメ滅相な、殺し合といつたら喧嘩ぢやありませんがなア。喧嘩のモ一つ
毛の生えた事ですがなア。ソレ生命の取合の事ですがなア。怖ろしや怖ろしや、
地異天變地異天變、喉を締める、置物をブツつける、喚く、裏口から山越しに逃
げ出す、庫へスツ込む、ソレはソレは偉い事でムいました」

姫「エル、そんな事云つて解るかい。そら一體何處の事だい」

エル「ヘイ、定つて居りますがなア。家の中の事ですがなア」

姫「誰と誰とが喧嘩をしたと云ふのだ」

エル「男と男が命の奪り合をしたのです。エー、解らぬ御方ですなア」

姫「何處の何兵衛だと問ふてゐるのぢや」

エル「エー辛氣臭い、何兵衛も彼兵衛もありますかい。愚圖々々して居ると生命

が失くなりますがなア。アアもどかしい事だワイ」

姫「そんな解らぬ事を何時迄も云つて居つても埒があかぬぢやないか。此方がも

どかしいワ。家令の館へ未だ行かぬのか。大方犬の喧嘩でも見て居つたのだらう」

エル「ハイ、その家令ですがなア。それはそれは偉い事怒つてましたよ。大きな

額口に青筋を立てましてね……」

三千「アハハハハ、イヤもうエルさまとやら、分つて居ります。お前さまは随分

慌てて居るから、云ふ事がシドロモドロになつて解り憎いが、お前は家令の宅へ

行つて四人の喧嘩を見て來たのだらう」

エル「ハイ其通りでムいます。サア之から村中を布令て來ます。大變ぢや大變ぢ

や」

と飛び出さうとするのを、小國姫は襟髪掴んでグツと引戻し、
姫「コリヤ、エル、何處へも行く事はならぬ。そして何も喋る事はならぬぞ」
エル「ソソそんな事仰有つても、之が黙つて居られませうか。愚圖々々して居ると家令の生命が失くなるか知れませぬぞや」
三千「エルさま、まア落付いて下さい。家令は大丈夫だから、そして何も云つちやなりませぬよ」

エルは「ハイ」と云ひ乍ら、縮んで了つた。

三千「奥さま、何うやらワックスが隠してゐたところ、家令殿に看破されて一悶着が起つたと見えます。之は私に任して下さい。キット如意寶珠を持つて歸り御目にかけてます。そして家令の親子を私に任して下さいませ。斯うして發見したのも矢張神様の御蔭でムいますからなア」
姫「何事も神徳高き貴方様の仰せ、御任せ申します」

と話して居る處へ、家令のオールスチンは、吾子のワックスを引立て乍ら、如意寶珠の玉を幾重にも嚴重に包み、此場に現はれ來り、パツと兩手をつき、

オールス「奥様、誠に申譯の無い事を致しました。悴の馬鹿者が悪い友達に唆され、種々の謀叛を企み、隠して居りましたのを漸く覺り、悴に腰繩をつけて、此處迄お詫に参りました。何れ悴は生命の大罪人でムいますから、思ふ存分にしてやつて下さいませ。私の悴に斯様な者が出来たと思へば旦那様へも、世間へも申譯が立ちませぬから……」

と云ふより早く懐劍を引抜き、矢庭に吾腹に突立てようとする一刹那、三千彦は飛び下りて懐劍をもぎとり、聲を勵まして、

三千「オールスチン殿、心を落付けなされ。何事も皆神様の攝理でムいませう。

此問題は奥様より私が一任されて居りますから、先づ御急きなされるには及びませぬ。今死ぬる命を長らへて御主人様へ忠義を御盡しなされる方が、何程誠が通るか知れませぬよ。そして貴方の息子、ワックス殿も三千彦が預かつて居りますれば安心なさるが宜しい。實の處私はアンブラックとは假の名、實は三五教の宣傳使三千彦と申す者、當館はバラモン教だと知つた故に、故意とバラモン教の宣傳使と化け込んで御救ひに参つたのです。今迄吾名を詐つた罪は奥様を始め御一同様

御許しを願ひます」

姫「エー何と仰有います。貴方は三五教の宣傳使様でムいましたか。之はイカイ

御無禮を致しました。併し乍らよくまア急場を助けて下さいました。有難う存じ

ます。貴方の御神徳に依つて玉の所在が分り、斯んな嬉しい事はムいませぬ」

三千「三五教と云ひ、バラモン教と云ふも元を正せば一つの神様でムいますから、

教に勝劣はムいますまい。只道を奉ずるものの心に依つて御神徳の現はれに大小

高下の區別がつく丈けのものです」

オールス「貴方は初めて御目にかかった時から、何處とはなしに變つた御方と思

つて居りましたが、三五教の宣傳使でムいましたか。誠に失禮致しました。斯様

な亂癡氣騒ぎを御目に掛け、誠に御恥かしうムいます。吾々親子はバラモンの顔

に泥を塗つたものですから、何卒死なして下さいませ。之ばかりがお願でムいま

す。そして私の自殺に依つて倅の罪を幾分軽くして下さいさる事ならば、それを冥途

の御土産として、勇んで死に就きます。南無大自在天大國彦命様……」

と合掌し、決死の覺悟を示して居る。

三千彦は立上り宣傳歌を歌ひ始めたり。

三五教の宣傳使 吾は三千彦神司

神の御綱に操られ 不知々にテルモンの

山の麓に現はれて 清き流れを打ち渡り

此方に向つて進む折 小國姫の神司

二人の侍女を伴ひて いと懇に吾が身をば

館に誘ひ歸りました 種々雑多の御惱み

包まず隠さず宣り玉ひ はからせ玉ふを聞くよりも

同情の涙に堪えかねて 皇大神の御前に

真心籠めて祈る折 神の化身のスマートが

吾が耳近く聲をかけ 如意の寶珠の行衛をば

完全に委曲に相示し ケリナの姫や其外の

數多の託宣下しつづ 雲路を分けて歸ります

吾れは心も勇み立ち

小國姫に打ち向ひ

天地の道理を説き諭し

唯何事も神直日

心も廣き大直日

見直しませと勧めつつ

神の御前に平伏して

此難局をいと安く

結ばむために村肝の

心を千々に配りけり

時しもあれやエルさまは

慌ただしくも入り來り

家令の館に人殺

大騒動が突發し

居たりと報告聞くよりも

外へ洩れては一大事

如何はせむと思ふ折

オールスチンの御入來

珍の寶を芽出度も

此處に運ばせ玉ひたる

此瑞祥はテルモンの

館の萬代不易なる

瑞祥なりと祝ひつつ

凡ての曲を宣り直し

唯何事も大神の

さばきに任せ奉るべし

人は神の子神の宮

元より惡しきものならず

八岐大蛇やまたをろちや醜神しこがみの

曲津靈まがつみたまに曇くもらされ

不知しらず々々しらずに惡魔道あくまだうへ

墮おち行ゆきたりしものなれば

皇大神すめおほかみに賜たまひたる

嚴いづの言靈ことたまの宣のり上あげて

いろいろ雜多ざつたの罪科つみがたを

科戸しなどの風かぜに吹拂ふきはらひ

拂はらひ清きよめて速川はやかはの

流ながれの如ごとく身からだ體たまや

靈みたまに塵ちりも止とめざれと

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

三千彦みちひこ祈いのり奉たてまつる

小國をくに姫ひめよオールスチンよ

ワツクス司つかさよ心安うらやすく

思召おほしめされよ三千彦みちひこが

ここに現あらはれ來きし上うへは

如何いかでか罪人つみびと造つくらむや

心安こころやすかれ惟神かむながら

神かみに誓ちかひて宣のり傳つたふ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まこと一つの三五あななひの

教をしへに身みをば任まかしなば

如何いかなる曲まがの猛たけびをも

決けつして怖おそる事ことは無なし

尊たふとみ敬ゐやまへ三五あななひの

すめおほかみ 皇大神の御神徳
おほくにひこ 大國彦の御稜威
みたまさち 靈幸はひましませよ
バラモン教を守ります
ああ惟神々々

三千彦の歌にて家令のオールスチン及ワツクスはヤツと安心し、涙を流して神恩を感謝し、如意寶珠を奉持して小國別の病室に罪を陳謝すべく、小國姫、三千彦と共にシトシトと進み行く。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館 外山豊二録)

第十九章 癡漢(一四四九)

館の主人、小國別はソファアの上に横はり息も絶え絶えに苦しんでゐる。二人の看護手は寢食を忘れて介抱に餘念なかつた。小國姫はオールスチン、三千彦、

ワツクスを伴ひ入り來り、

姫「旦那様、喜んで下さいませ。三五教の宣傳使三千彦様のお蔭によりまして如

意寶珠の神寶が歸りまして△います。之を御覽なさいませ」

と包みを解いて目の前につきつけた。小國別は病み疲れ、衰へたる目の光りに玉

を眺めてニヤリと笑ひ雙手を合せて感涙に咽んでゐる。そして只「有難う」と一

言云つたきり後の語を次ぐ事は出来なかつた。これは衰弱の甚だしき上に、餘り

の喜びに打たれたからである。三千彦は病人の側近く寄り、

三千「この通り御神寶が歸りました上は、又もや神様の御惠によりまして、屹度

ケリナ姫様も近い中にお歸りになるでせう。御安心なさいませ」

と詞優しく慰むれば小國別は掌を合せ、娘の近い中に歸ると云ふ證言を聞くより、

稍元氣づき、

小國「娘が歸りますか。それは有難う△います。到底私は今度は、もう旅立をせ

なくてはなりません。せめてそれ迄に紛失した如意寶珠を、もとに還し、娘の顔

を生前に一目なりと見て此世を去り度いと思つて居りましたが、斯う弱りきつて

は、もう三日も命が續きますまい。成る事ならば一時も早う引寄せて頂き度うム
います」

三千「もう間もなくお歸りになりませう。私の耳の側で神様がさう仰せになりま
した。併し乍ら御病氣に障るとなりませぬから、吾々は控へさして頂きませう」
小國「何卒御自由にお休み下さいませ」

と微の聲で挨拶する。家令のオールスチンは病人の側近くより、
オールス「旦那様、何卒氣を確りして下さいませ。そして如意寶珠の玉を盗んで
匿して居つたのは私の悴ワツクスでムりました。誠に偉い御心配をかけまして申
譯がムいませぬ。此皺腹を切つて申譯を致さむと覺悟を定めた所を奥様に止めら
れ、惜からぬ命を少時延ばしましたが、何卒貴方が命數盡きてお國替遊ばすやう
の事あれば屹度私もお伴致します。何卒何處迄も主従の縁を斷らぬやうにして下
さいませ」

小國別は微に首肯いた。三千彦はワツクスの手を曳いて自分の居間へと歸つて
行く。二人の看護人とオールスチンに小國別の介抱を頼み置き、小國姫は又もや

三千彦の居間に來り心配さうな顔をして、

姫「三千彦様、誠に御心配許りかけまして申譯がムいませぬが、主人は到底あき

ますまいかな」

三千「お氣の毒乍ら到底駄目でムいませう。併し乍ら假令肉體はなくなつても精

靈は活々として若やぎ、靈界に於て神様の爲に大活動を成されますから、御心配

なさいますな。人は諦めが肝腎でムいませぬからな」

姫「ハイ、有難うムいます。最早覺悟は致して居ります。然し乍ら、も一つ心配

な事がムいますが一寸伺つて貰ふ譯には行きませぬか」

三千「何事が存じませぬが一寸云つて御覽なさいませ」

姫「實の所は私の娘デビス姫と申すのが、今日で三七二十一日の間、晝さへ人の

よう行かぬアンブラツクの瀧へ、玉の所在を知らして下さるやう、父の病氣が癒

るやう、も一つは妹の所在が判るやうと、纖弱き女の身を以て毎晩二里の道を往

復致し、何時も夜明け方に歸つて参りますが、今日は如何したものがまだ歸つて

参りませぬ。大方瀧壺に落ちて命を捨てたのではムいませぬか。但しは猛獸に

殺ころされたのではありますまいか。俄にはかに胸騒むなさわぎがして氣きが氣きぢやありませんか。

三千みち「決して御心配ごしんぱいなさいますな。半時はんとき経たない間に御姉妹ごきやうだいうちそる打揃うちそろふて、一人ひとりの修しう

驗者げんじやに送おくられて無事ぶじに歸かへられます。間違まちがひはムいませぬからな」

姫ひめ「左様さやうでムいますかな。娘二人むすめふたりが歸かへつて呉くれたならば、最早もはや心配事しんぱいごとはムいませ

ぬ。ああ南無大慈大自在なむだいじだいじざいてんさま天様てんさま、何卒なにとぞ々々一時いちじも早く娘二人むすめふたりの顔かほを夫をつとの命いのちのある間うち

に見みせて下さいますやうお願いねがひ致します」

と涙なみだを流ながして祈いのり入いる。

三千みち「これ、ワツクスさま、お前はまへ大それた悪い事わるいことを成なさつたが、これと云いふの

もお前まへの副守護神ふくしゆごじんがやつたのだから、茲ここに神直日大直日かむなほひおほなほひに見直みなほし聞直ききなほして頂きいただき、

内分ないぶんで済すます事ことになつてゐますから、之これから心得こころえて貰もらはねばなりませんぞ」

ワツクス「ハイ、有難ありがたうムります。誠まことに申譯まをしわけのない不調法ぶてうはふを致いたしました。今度私こんどわたし

の罪つみをお助たすけ下さいますならば、無ない命いのちと心得こころえて如何様いかやうなる働はたらきも致いたし、屹度御きつとごお

恩返んがへしを致いたします。モシ奥様おくさま、屹度きつとお赦ゆるし下さいますか」

姫ひめ「赦ゆるし難がたい罪人ざいにんなれど三千彦様みちひこさまのお計はからひにより内證ないしやうで済すます事ことにして上げよ

う。之これからキツと心得こころえたがよいぞや。年寄としよつた一人ひとりの親おやに心配しんぱいをかけ、本當ほんたうにお前は不孝ふかうな者ものだ。親おやばかりか、吾々われわれ夫婦ふうふや娘むすめに迄まで心配しんぱい苦勞くろうをかけて困こまらしたのだから、今後こんごは屹度きつと愼つつしんで貰もらはねばならぬぞや」

ワツクス「ハイ、有難ありがたうムいます。これから貴方あなた様さまを親おや様さまとして眞心まごころを盡つくしお仕つかへ申まをします」

姫ひめ「これ、ワツクス、お前は親おやがあるぢやないか、妾わしを主人しゅじんとして仕つかへるべきものだ。親おやとして仕つかへる等なごとはチツと可笑をかしいぢやないか」

ワツクス「義ぎに於おいては御主人ごしゅじんでムります。然しかし情じやうに於おいては親おや様さまと存ぞんじてツヒ不都ふつが合ふな事ことを申まをしました。然しかしお赦ゆるし下くださつた以上いじやうは私わたくしを子ことして下くださいませうな。

實じつの所ところはエクス、ヘルマンの兩人りやうにんが盗ぬすみ出したのでムいますが、私わたくしが種々いろいろと苦心くしんをして玉たまの所在ありかを白状はくじやうさせ、お家いえの爲ために働はたらいたのでムいます。二人ふたりの者ものを助たすけたさに私わたくしが盗ぬすつたと父ちちに申まをしましたが、その實じつはヘルマン、エクスの兩人りやうにんが盗ぬすみ出したのでムいます。それを父ちちに匿かくして金かねをやり、酒さけを飲のまして白状はくじやうさせ、ヤツとの事ことで如意寶珠にょいほうしゆを手てに入いれたのでムいます。貴女あなたはお忘わすれでもムいますまいが

家中一般に如意寶珠の玉の所在を探し、持つて来たものはデビス姫の養子にする
と仰有つたぢやムいませぬか、さすれば仰せの通り私は御養子にして頂くべき資
格があらうと存じます」

姫「そりや、お前の云ふ通り、如意寶珠の玉を探し、持つて来たものは養子にす
ると云ふて置いた。然しお前は親一人、子一人、家令の家を繼がねばならぬ身の
上だから、それは出来すまい。先祖の家を忽かにする譯には行くまいからな」
ワックス「いえ、そんな心配は要りませぬ。私が養子になり、デビスさまとの間
に三人や五人は子が出来ませうから、其中の一人を頂いて、私の家を繼がせば宜
しいぢやありませんか」

姫「もし三千彦様、あんな事を申しますが如何したら宜しうムいませうかな」

三千彦はワックスの顔をギョツと睨みつけ口をへの字に結んでゐる。ワックス
は怖相に少しばかり聲を慄はし乍ら、
ワックス「モシ、宣傳使様、何卒私を約束通り、玉の發見人ですから養子にして
下さるやう御とり成しを願ひます」

三千「これ、ワツクス、お前は吾々を盲にするのか、否御夫婦を騙る積りか。今云つた言葉は皆詐りだらうがな。お前はお家の重寶を匿し、御夫婦を困らし、往生づくめでデビス姫様の夫にならうとの計略をやつたのであらう。そんな事に誤魔化される三千彦ぢやありませんぞ」

ワツクス「メメ滅相な。さう誤解をされては困ります。あれ丈苦心してお家の爲めになる寶を手に入れた此忠臣を、悪人扱ひにされては根つから勘定が合ひませぬ。何卒も一度お考へ直しを願ひます」

三千「お黙りなさい。左様の事を仰有ると最早容赦はしませぬぞ。高手小手に縛め唐丸籠に乗せてハルナの都へ送り届けませうか。又何程お前がデビス姫様に戀慕して居つても、肝腎の姫様がお嫌ひ遊ばしたら如何する積りだ。愛なき結婚でもお前は快う思ふのか。家令の悴にも似ず、譯の分らぬ事を仰有るぢやないか」

ワツクス「吾々を威喝して二人の戀仲を遮り後に又ツケリコとお前さまが養子に這入りこむ考へだらう。そんな事あチャーンと此のワツクスは腹の底まで讀んで居りますぞ」

三千「これはしたり、迷惑千萬、何と云ふ失禮な事を仰せられるか。吾々は三五
教の宣傳使、大切なるメッセージを受けて或所まで進まねばならぬ身の上、女を
連れるなどは思ひも寄らぬ事。お前の心を以て吾々の心を測量するとは些と失
禮ではムらぬか」

ワックス「宣傳使と云ふものは、そんな事をよく云ふものです。口でこそ立派に
女嫌ひの様な事を云つて居ますが蔭に廻ると、もとが人間ですから駄目ですわい。
デビス姫様が欲しけりや欲しいとハツキリ云ひなさい」

姫「これ、ワックス、何と云ふ失禮な事を申すのだ。玉盗人はお前に違ひない。
現在お前の親が證明して居るのぢやないか」

ワックスは自棄糞になり、尻をクレツと捲つて此場を後に、一目散に表門を潜
つて駆け出した。小國姫は手を拍つてエルを招きワックスの後を追跡せよと命じ
た。狼狽者のエルは皆まで聞かず、「ハイ、承知しました」と又もや此處を飛び
出し地響きさせ乍らドンドンと門外へ駆け出し、道の鍵の手になつた所を、
頭を先につき出し體を横にして走る途端に、あまり廣くもない道端の柿の木に大

牛が繫いであつた。其牛の尻にドンと、頭突をかました。牛は驚いてポンと蹴つた拍子にエルはウンと許り倒れた。牛は二つ三つ尻を振つて再びエルの鞞丸の端をグツと踏み、力を入れてグーツと捻た。エルはキヤツキヤツと悲鳴を擧げてゐる。通りかかつた旅人や近所の家からドヤドヤと集まつて来てエルを助け、傍の或家に擔ぎ込み、様子を聞けばエルは顔を顰め乍ら、エル「皆さま、如意寶珠のお寶が手に入りました。そして様子を聞けばワックスが玉の所在を探した御褒美に、デビス姫さまの婿になると云ふ事ですよ。それから小國別様は御危篤で何時息を引きとられるか分りませぬ。大方今頃は絶命したかも知れませぬ、大變でムいます。何皆さま、一時も早う各自に町内を觸れまはり城内に悔みに行つて下さい」

とまだ死んでも居ないのに、手まはしよく死んだものと假定して吹聴した。之を聞いた老若男女は次から次へと、尻はし折り駄賃とらずの郵便配達となつて、如意寶珠の玉が手に入った。そして小國別が國替へをなさつて、ワックスがデビス姫様の婿にきまつた」

と一軒も残らず、御丁寧に布令まはつた。

テルモン山の麓の町は俄にガヤガヤと騒ぎ出し、衣裳を着替へて館へ悔みに行くもの引きもきらず、俄に大騒動が起つた様になつて來た。エルは鞆丸の端を牛の爪に「むしり」とられ、益々體中に熱が高まつて「死んだ死んだ」と囁言ばかり囁つて居る。

俄に小國別の訃を聞いて泣く老若男女もあれば、馬鹿息子のワックスがデビス姫の婿になるげなと驚いて觸れる奴もあり、如意寶珠の玉が歸つたと喜ぶものもあり、テルモン山の麓の宮町は此噂で持ちきりとなつた。氣の早い男は早くも幟を立て「神司小國別の御他界を弔ふ」とか、「如意寶珠再出現」とか、「デビス姫ワックスとの御結婚を祝す」とか云ふ長い幟を立てて、ワツシヨ　ワツシヨと辻々を廻り初めた。

かかる所へ宣傳歌の聲涼しく町外れの方から聞えて來た。此聲は求道居士がデビス姫、ケリナ姫を助けて歸り來るにぞありける。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館 北村隆光録)

第二〇章 犬噓（一四五〇）

テルモン山の館をエルが飛び出してから半時許り経つと各宮町の住民が、禮服を整へ扇をきちんと手に握り玄關口にチクチクと集まり來り、

「頼もう頼もう」

と呶鳴り立てて居る。小國姫は何事の突發せしならむかと玄關口へ出て見れば町總代のパイんと云ふ男、叮嚀に辭儀をしながら、

パイん「これはこれは奥様でムいますか。旦那様は誠にお氣毒でムいました。嘸お力落しでムいませう。此の通り澤山の町民がお悔に參りましたが、一々御挨拶を致すのも御迷惑と存じ私が總代に出ました。承はれば旦那様は御昇天との事で御歎きの所へ如意寶珠の玉が還り、ワツクス様とお嬢様の御婚禮が調ひましたさうで、お喜び申てよいやら、お悔み申てよいやら、盆と正月が一緒に來たやうに、喜びと悲しみに打たれて居ます。何卒御用があつたら仰つけ下さいませ」

姫「貴方は町總代のパイん様、ようお出下さいました。併し誰がそんな事を申し

たか知りませぬが、旦那様はまだお國替になつて居ませぬから御安心下さいませ」

「パインは驚いて顔を赤らめ乍ら、

「工何と仰有いますか、旦那様はまだお達者で居らつしやいますか、それは何より結構でムいます。誠に申譯のない事を申して失禮でムいました。何卒お許し下さいませ。併し如意寶珠が再びお手に入つたと云ふ事は事實でムいますか」

姫「ハイ有難う、それは事實でムいます。まあまあこれでこの館も一安心でムいます」

「パイン「それは何よりもお目出度い事です。吾々町民一同もこんな喜ばしい事はムいませぬ。就ては御家令の御子息様がお嬢様の御養子になられると云ふ事を承はりましたが、それは事實でムいますか」

姫「そんな事を誰にお聞きになりましたか、此方にはそんな噂もして居りませぬが」

「パイン「ヤ、それを聞いて町内の者も安心を致すでムいませう。斯う申すと何でムいますが、御家令様の御子息は町内中での憎まれもの、根性が悪くて、馬鹿で、

極道で、悪い奴を友達にして、町民を困らせて居る仕方のないお方ですから、若しもそんなお方を御養子にでもお貰ひにならうものなら、お家は忽ち潰れて仕舞ひ、宮町の氏は皆、小國別家に背くでムいませう。併し乍ら今承はつてお家のため、實に安心を致しました。如何なる事情がムいまして、御如才はムいますまいが、義理人情に搦まれて、あのやうな男を御養子になさる事は止めて頂きたうムいます。是はパイーン一人の意見ではなく、町内一般の意見でムいますから」

姫「ハイ御親切有難うムいます。何卒町内の御一同様にも宜敷く言つて下さいませ。又夫小國別は何分老齡の事でムいますから、何時變が來ないとも分りませぬ。其時には何卒宜敷く皆様にお頼み申すと、妾が言ふたと仰有つて下さいませ」

パイーン「これはこれは失禮致しました。左様ならば是で御免を蒙ります。町内のものが旦那様がお國替になつたと云つて各自に仕事を休み、又立花、生花などの用意にかかつて居りますから、早くこの事を知らしてやらねばなりませんから」

姫「もしパイーン様、誰がそんな事を申したのでムいませうねえ、怪しからん奴があるではムいませぬか」

パイイン「現にお家の受付をやつてゐるエルさまが大勢の前でそんな事を云つたものですから、忽ち町中に擴がつたのでムいます」

姫「何といふまア、チヨカ助だらう。さうして何處に居りますかなア」

パイイン「ハイ、今エルさまは牛に鞆丸を蹴られて綿打屋の座敷に擔ぎ込まれ、大熱を出して譯の分らぬ事許り云つて居られます。併し乍ら隣に藪井竹庵がムつた

ものだから診察して貰つた所、二三日静養さして置けば癒るだらう、假令間が要つても生命に別條は無いからと仰有いました。エルさまの事は吾々がお世話を致

しますから御心配下さいませ。それよりも旦那様に氣をつけて下さいませ」

斯く話す所へ、黒山の如く弔ひ客や祝ひ客が門を潛つて押し寄せて来る。小國

姫はパイインに後を頼み置き、夫の傍に走り行く。

パイインは町民一同に向ひ大きな聲を張り上げて、

パイイン「皆様御親切によくも来て下さいました。館の奥様のお頼みによつて私が代理となり御挨拶を致します。旦那様はまだ御昇天遊ばしたのぢやムいませぬ。

番頭のエルが御存じの通りの慌者でムいますから、慌て左様な事を喋つたのでム

いませう。何卒皆様安心して下さいませ。さうして一つ喜んで貰ふ事は如意寶珠の玉が再びお館へ還つた事でムいます。皆様の御親切を當お館の奥様に代つてパインが有難く感謝を致します」

と述べ終り、

「小國別館萬歳」

を三唱した。數多の群集は聲を揃へて萬歳を三唱し、各呆氣に取られ、ブツブツ小言を云ひながら拍子の抜けた顔をして歸り行く。

ワックスは宮町の四辻に立つて盛に演説をやり始めた。大勢の者は館からの歸りがけ馬鹿息子が又もや何だか喋り出したと、面白半分やつて來た。ワックスは手を振り乍ら、

ワックス「皆さま、テルモン山の館には大變事が突發致しましたが御存じですか、よもやお分りではムいますまい。噂にもお聞きでムいませうが三五教の三千彦と云ふ惡神が飛んで參り、金剛不壞の如意寶珠を夜密に盗み出し、小國別夫婦を初め一族郎黨に不調法をさせ、大黒主様の命令をもつて館は云ふに及ばず、宮町一

般の人民を小國別の同類と見做し、片端から首をチヨン切らすと云ふ悪い計劃を致して居りませぬぞ。そしてその三千彦と云ふ悪者は、今お館に大きな面をして居据り、魔法をもつて小國姫をチヨロまかし小國別様を病氣に致し、ジリジリ弱りに弱らせて命を取り、デビス姫の婿にならうとして悪い企みを致して居りませぬ。皆さま、テルモン山のお館を思ひ、又貴方方自身のお家や、體や子孫をお思ひなさるなら、これから一同力を合せ、お館に押し寄せ、三千彦と云ふ悪人を懲しめて下さい、否殺して下さい。一日も猶豫はして居れませぬぞ。グツグツして居ると貴方方の難儀になりますぞや。幸ひ拙者はその三千彦と云ふ奴の顔を存じて居りますから、是から御案内を致します、皆さま私の云ふ事が御承知が出来ますなら、何卒従いて来て下さい。

と呶鳴った。群集の中には全部眞實と信ずるものもあり、又半信半疑の者もあつた。併し乍ら、バラモン教の館の中に三五教の者が来て居ると云ふ事が分り、俄に皆が怒り出し老爺も老婆も子供も、脛腰の立つ奴は群衆心理とやらで再び館に取つて返し、潮の押し寄すが如く館の表門にヒシヒシと詰めかけた。

ワツクスくちの口からでまか出任せの虚構きよこうえんぜつ演説によつてたちま忽ち一同憤慨いちどうふんがいし、館やかたに押寄おしよせ三千みちひ彦こを袋叩ふくろだたきにした事ことや、其外そのほかいろいろの面白おもしろき物語ものがたりは之これにて盡つきませぬが、紙面しめんの都合つがふによりて後卷こうくわんに譲ゆづります。

(大正一二・三・一七 舊二・一 於龍宮館階上 加藤明子録)

(昭和一〇・六・一四 王仁校正)

本ほん日は故井上明澄君このうへはるすみくんの五十日祭ごじふにちさいに就つき口述者こうじつしゃ参列さんれつす。明澄氏はるすみし神靈しんれいの請求せいきうに依より白扇はくせん一本いっぽんを靈前れいぜんに贈おくる、氏しの神靈しんれいは第一だいいち靈國れいこくの天使てんしとして教祖けうその傍近そばちかく奉仕ほうしし給たまへり。

大正十二年三月十七日舊二月一日

~~~~~

靈界物語 第五六卷 眞善美愛 末の卷

終り